

5-1. 弥生時代の遺構・遺物

S B 19 (図 31)

平面形は円形で、住居の南西部の壁溝は残存していない。長軸・短軸ともに推定 6.55 m を測る。壁溝と柱穴・炉跡のみで、掘り方や貼床は確認できなかった。壁溝の幅は 0.25 ～ 0.32 m である。四本柱が四角形に配置されていたと推測する。中央付近では炉跡と推測される焼土痕 2 箇所を確認した。2 つの炉跡は中央からやや北西よりの位置で、横並びで検出された。東側の焼土がやや大きく長径 0.75 m、短径 0.45 m で、西側の焼土が長径 0.45 m、短径 0.4 m である。いずれも厚みは 0.04 ～ 0.06 m であった。内部ピットや壁溝から弥生時代中期中葉嶺田式の土器片が出土しているが、図示できるものはない。周囲の複数のピットからも同時期の土器の破片が出土している。

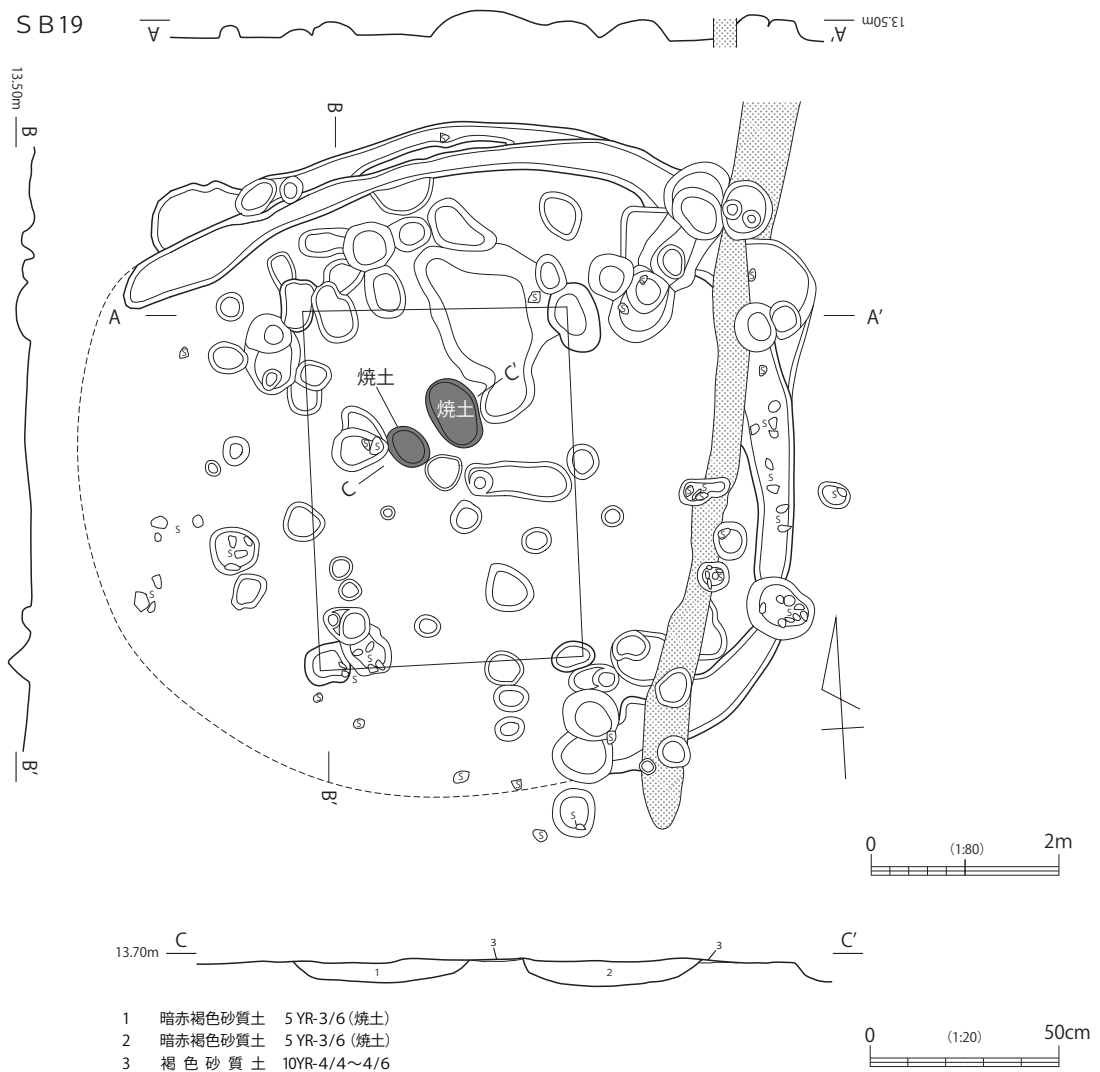


図 30. 第 18 次調査区 S B 19

SH38 (図31)

梁間1間、桁行1間の建物で、遺構主軸はN-2°-Eである。遺構規模は梁行3.6m、桁行4.5mを測り、柱間2.5～3.6m、柱穴径0.36～0.66m、深さ0.2～0.3mである。柱穴より弥生時代後期菊川式とみられる土器片が出土しているが、いずれも細片で図示できるものはない。

SK15 (図31)

長径2.5m、短径2.1m、深さ0.17mの浅く不整形な土坑である。黒褐色土の覆土中より、弥生時代後期菊川式の特徴をもつ土器が出土した。後世の掘り込み等のない、一括性の高い資料である。土器は中央部に集中していて、東西方向に広がる。器種類は壺、小型壺、台付甕が見られるが、壺の破片が多い点の特徴。いずれも細片で図示できるものはない。



図31. 第18次調査区 SH38 SK15

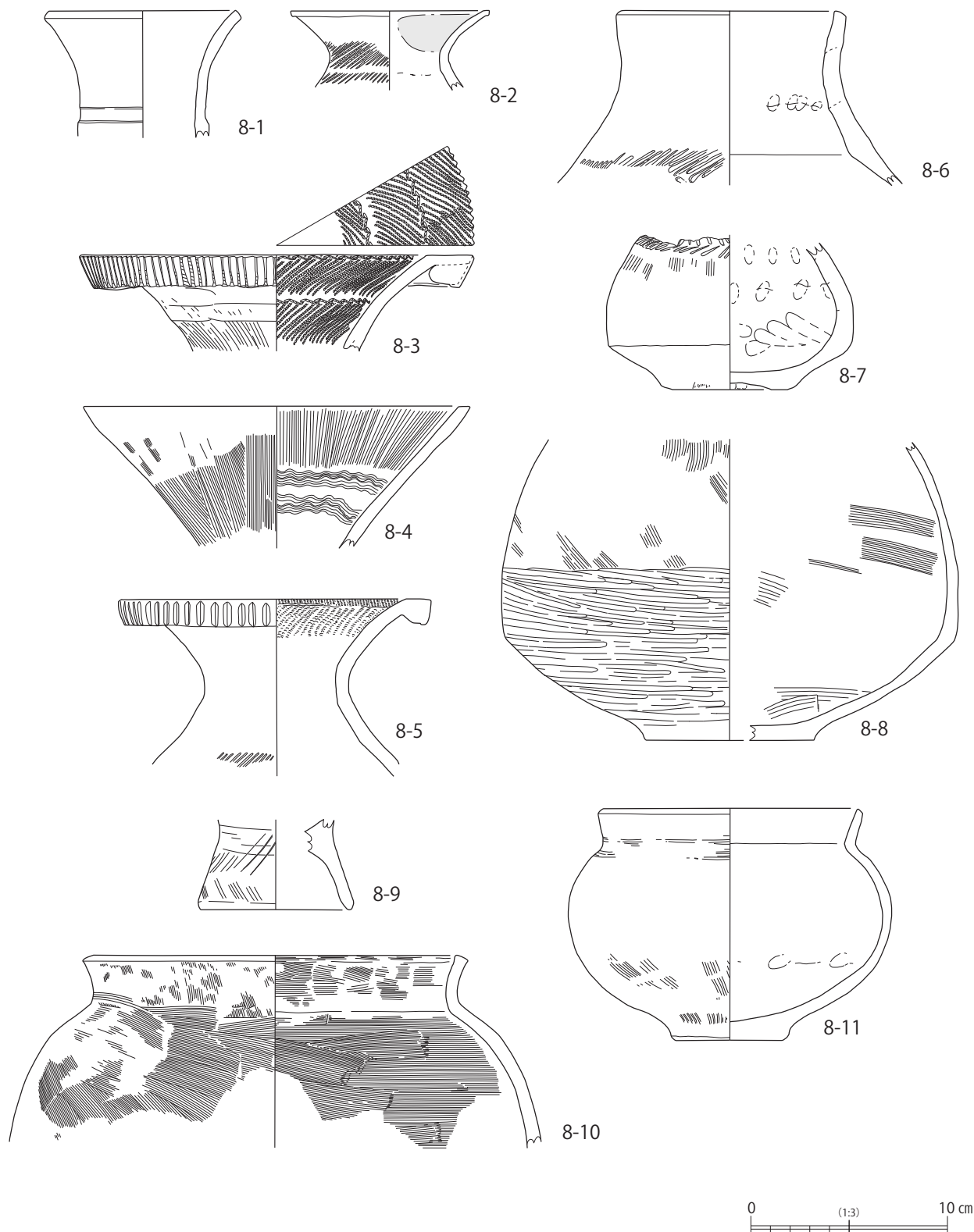


図 32. 第 18 次調査区 遺物実測図 1

5-2. 古墳時代の遺構・遺物

S H39 (図 33)

梁間1間、桁行2間の建物で、遺構主軸はN-19°-Eである。遺構規模は梁行4.6m、桁行5.2mを測り、柱間1.3～3.5m、柱穴径0.48～0.88m、深さ0.3～0.45mである。柱穴から須恵器や土師器の甕口縁部の破片等が出土しているが、いずれも細片で図示できるものはない。

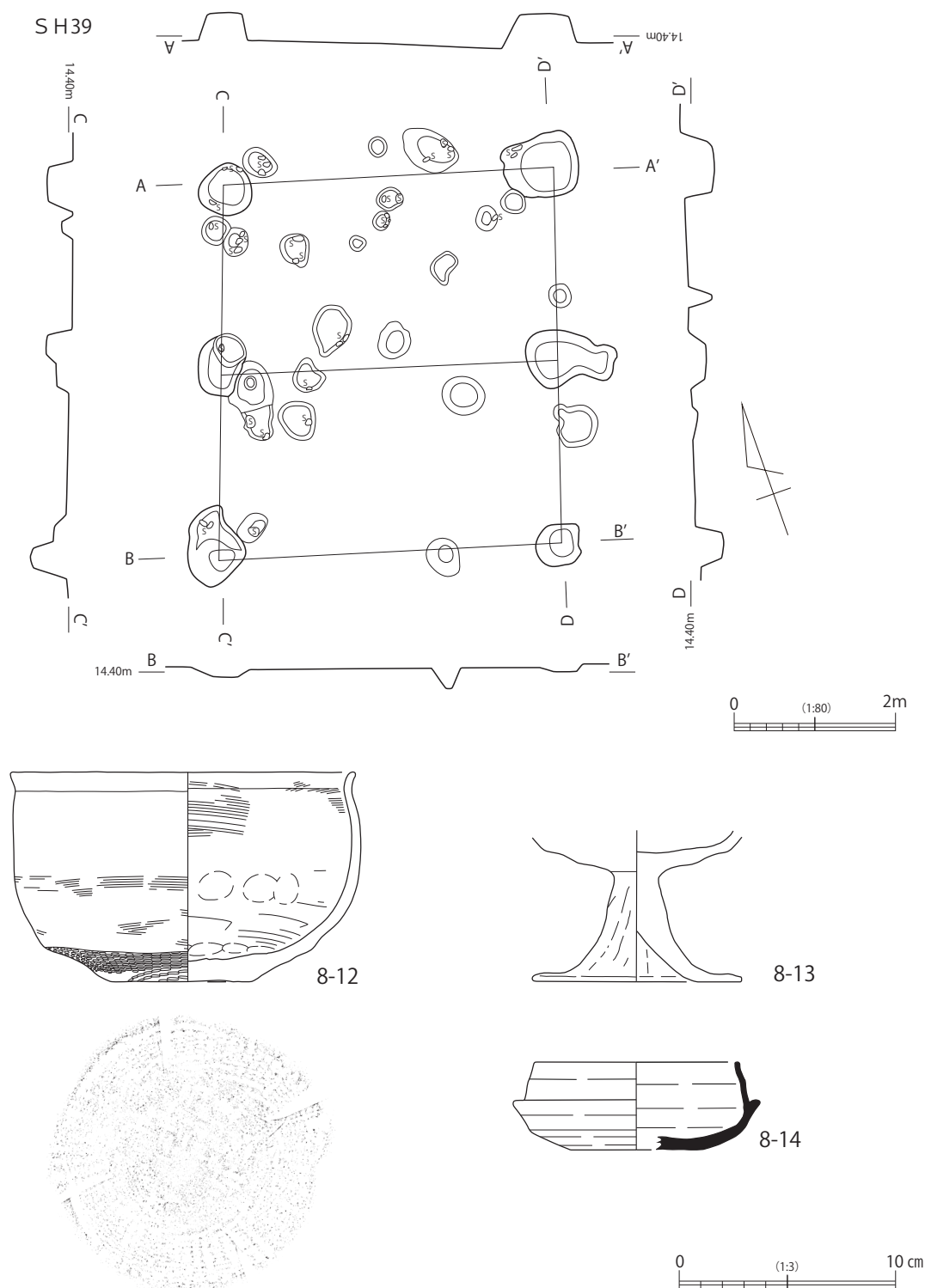


図 33. 第 18 次調査区 S H 39 遺物実測図 2

5-3. 奈良時代以降の遺構・遺物

SH40・41 (図 34)

2 棟の大小の建物を検出した。2 棟ともおよそ正方形の 1 × 2 間の建物で、柱穴から出土する遺物の時期も近いことから、比較的近い時期に建てられたもの推測する。底付建物の可能性もあるが、建物の主軸が異なる。以下、内側の建物を SH40、一回り大きい外側の建物を SH41 とする。

SH40 は梁間 1 間、桁行 2 間の建物で、遺構主軸は $N-4^{\circ}-W$ である。遺構規模は梁行 3.5 m、桁行 3.6 m を測り、柱間は 1.0 ～ 2.8 m、柱穴径 0.37 ～ 0.7 m、深さ 0.13 ～ 0.24 m である。柱穴から土師器の細片が、他の柱穴からは 7 世紀須恵器片、土師器片が出土している。

SH41 は梁間 2 間、桁行 1 間の建物で、遺構主軸は $N-1^{\circ}-E$ である。遺構規模は梁行 4.8 m、桁行 5 m を測り、柱間は 1.2 ～ 4.0 m、柱穴径 0.48 ～ 0.7 m、深さ 0.14 ～ 0.36 m である。

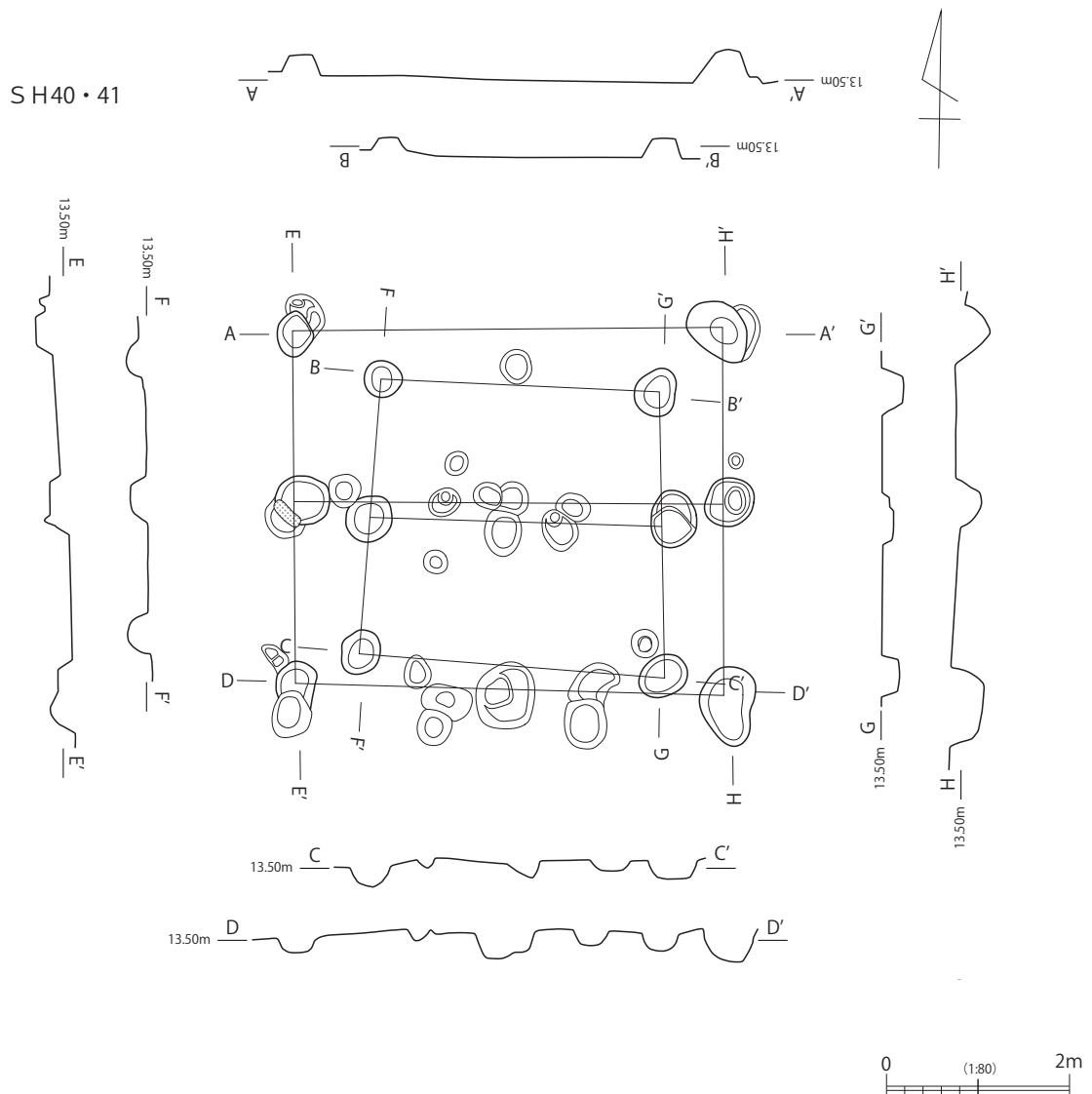


図 34. 第 18 次調査区 SH 40・41

S H42 (図 35)

梁間 1 間、桁行 1 間の建物で、遺構主軸はN-6°-Eである。遺構規模は梁行 4.3 m、桁行 4.6 mを測り、柱間は 3.1 ~ 3.5 m、柱穴径 0.48 ~ 0.8 m、深さ 0.19 ~ 0.50 mである。

S K16 (図 35)

長径 2.0 m、短径 1.0 mの楕円形の土坑で、深さは 0.26 mである。覆土中より宝珠つまみ付蓋ほか須恵器中心が中心に出土しており、7 世紀の土坑であると考えられる。

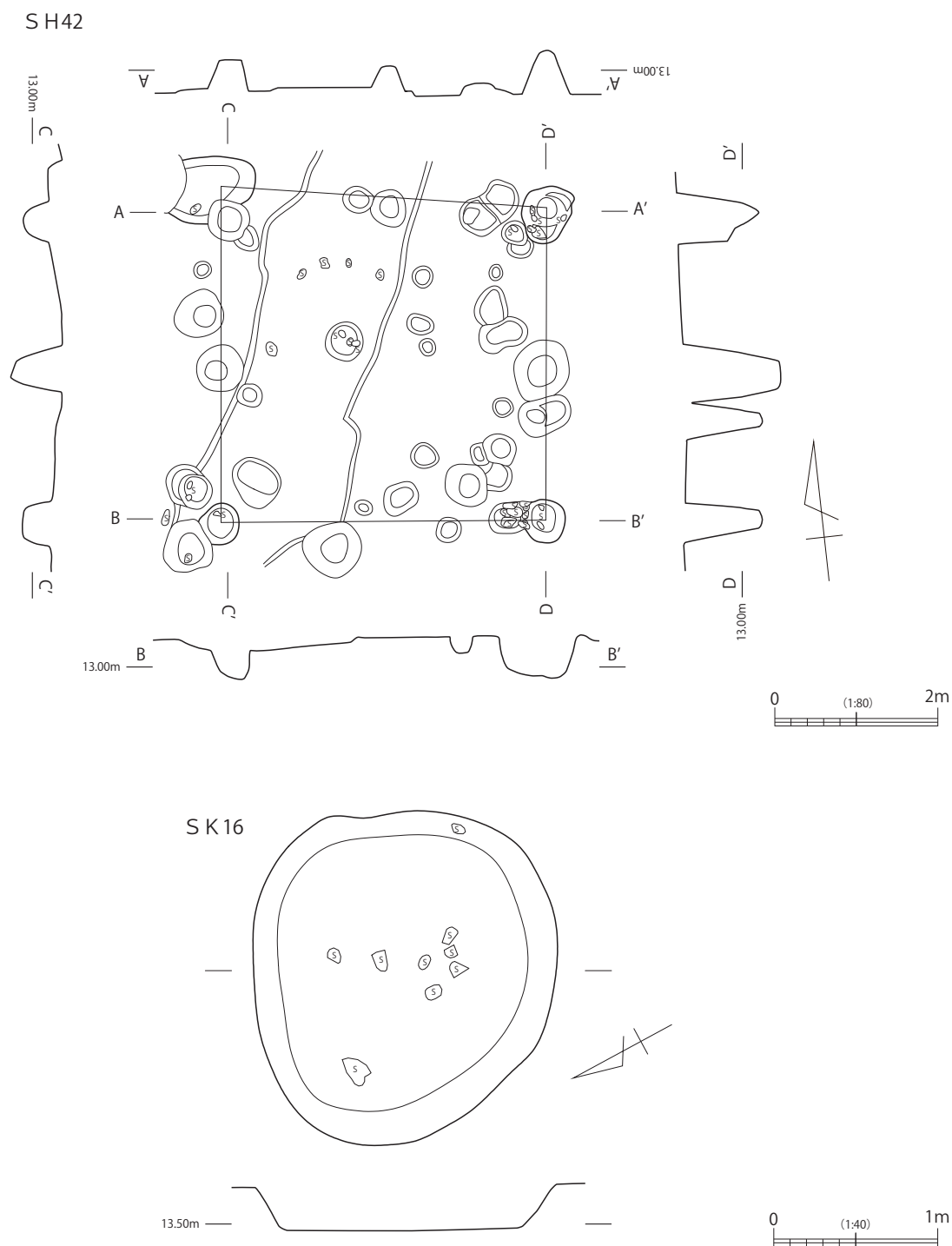


図 35. 第 18 次調査区 S H 42 S K 16

S A5～9 (図 36)

調査区西南側で確認された5条の溝である。5条とも並行しており、北側 SA5・6 が SH42 と重複している。最も北側の SA5 は5基のピットが東西方向に並ぶ柵で、規模は9.6 mである。柱間は1.3～2.6 m、柱穴の径は0.46～0.6 m、深さ0.27～0.55 mを測る。この柱穴は周囲のピットと比べると径に対して深いことが特徴である。SA6 は SA5 に並行してやや南側に位置する4基の柵で、全長は8.5 mを測る。柱間は1.3～3.1 m、柱穴の径は0.44～0.58 m、深さ0.61～0.68 mである。SA7 は SA6 の南側に位置し、SA5 と近似する5基のピットからなる柵で、全長は10.7 mである。柱間は1.3～2.2 m、柱穴の径は0.62～0.75 m、深さ0.23～0.77 mである。SA8 は SA7 の南側え並行する5基のピットで構成された柵で、全長は9.8 mである。柱間は1.5～1.6 m、柱穴の径は0.62～0.75 m、深さ0.37～0.85 mである。その南側で SA5～8 より全長が長い SA9 は、5基のピットで構成された柵で、全長は11 mである。柱間は1.4～2.5 m、柱穴の径は0.49～0.77 m、深さは0.62～0.72 mである。

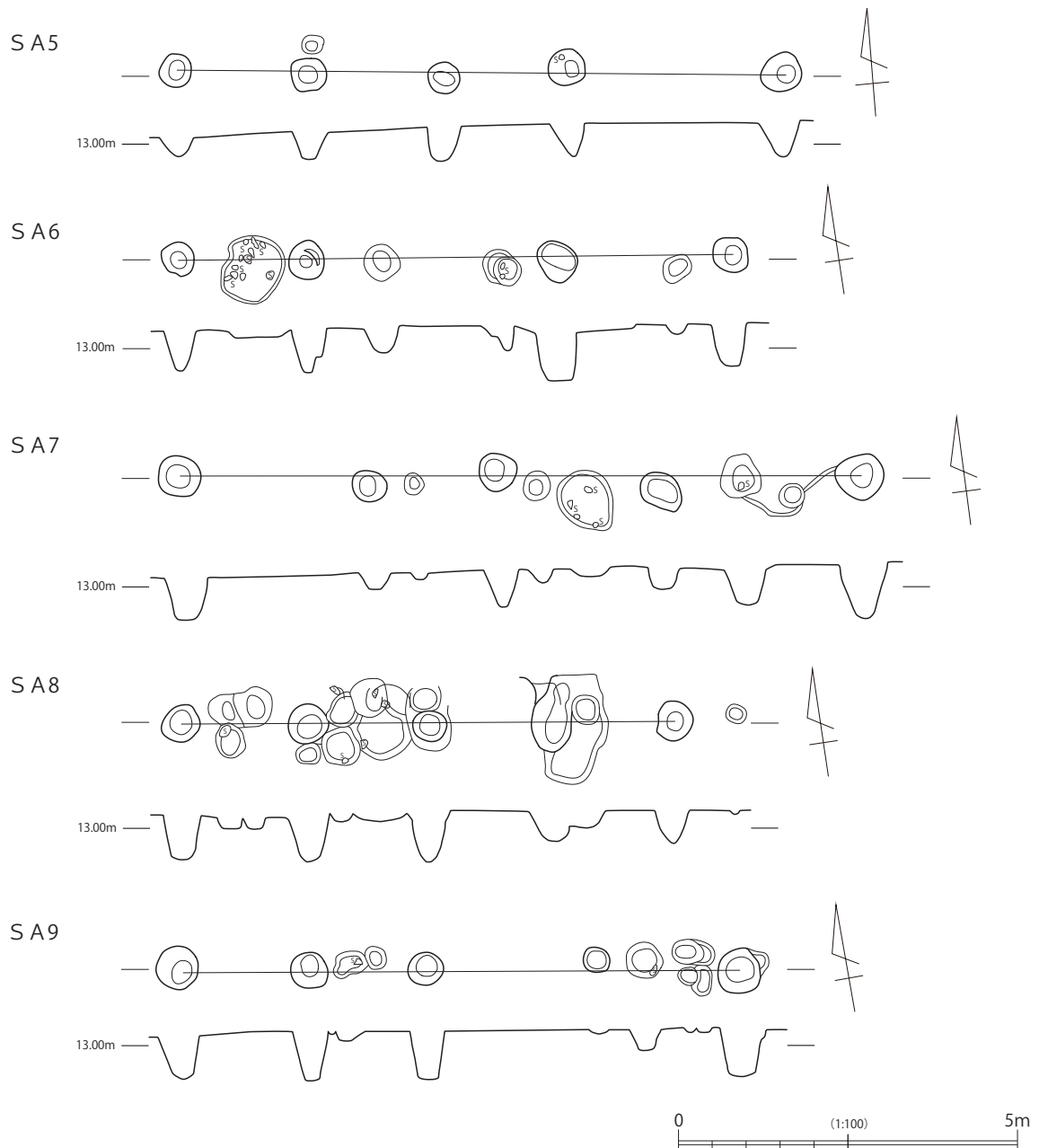


図 36. 第18次調査区 S A5～9

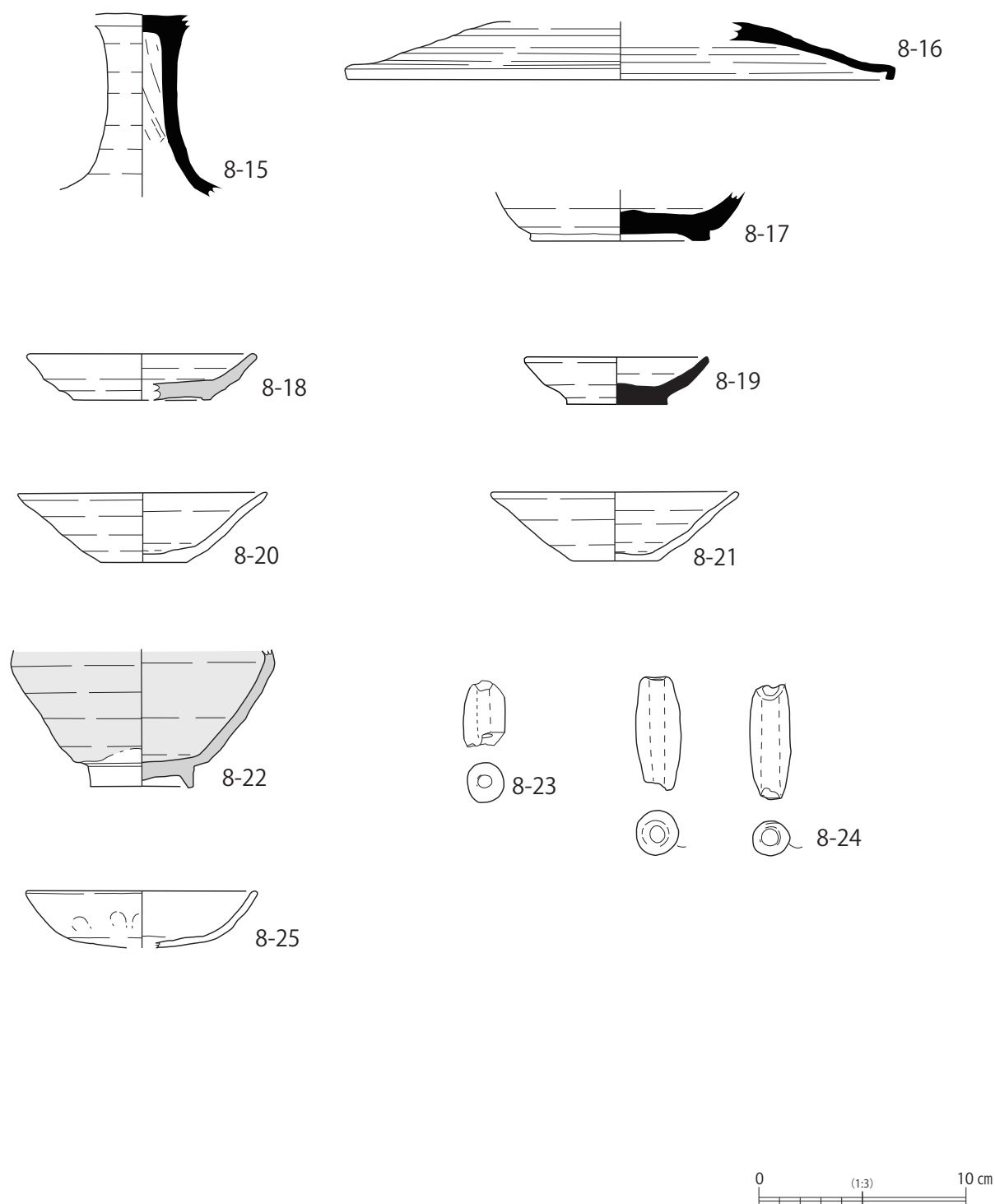


図 37. 第 18 次調査区 出土遺物実測図 3

6 節 第19次調査区

南北に長い調査区で、調査時期は令和元年10～12月、面積は736 m²である。西に第18次調査区、東には第20次調査区、北に第24次調査区が位置する。



図 38. 第19次調査区全体図 (1:300)

基本層序は概ね以下の通りである。

I 層 黄褐色土 表土

II 層 黒褐色土 遺物包含層

III 層 明黄褐色土 地山 遺構確認面

III層にて遺構を確認するまでに、表土を0.4～0.5 m除去した。遺構確認面の標高は13.3～14.3 mで、北東から南西方向にかけてゆるやかに傾斜をする。北側半分に弥生時代の遺構が集中していて、遺跡の南端でもある調査区の南側ほど遺構の数が減る傾向がある。遺構としては、弥生時代後期の掘立柱建物跡、溝、土坑が中心である。

出土遺物の傾向としては、嶺田式の土器片を含むピットがまばらにあるが、多くは後期の菊川式と推定されるものである。ほか、S字甕口縁部や高坏脚部など古墳時代前期に該当する遺物を含むピットや、奈良時代以降の須恵器片を伴う溝やピットがみられるが、数は多くなく弥生時代後期の密集の具合が見て取れる調査区である。

6-1. 弥生時代の遺構・遺物

S H43 (図 39)

梁間1間、桁行2間の建物で、遺構主軸はN-6°-Eである。遺構規模は梁行3.7 m、桁行4.3 mを測り、柱間は1.5～2.6 m、柱穴径0.57～0.68 m、深さ0.16～0.34 mである。柱穴から朱塗り弥生土器の破片が出土している。ほかのピットから弥生土器の細片が出土している。

S H44 (図 39)

梁間1間、桁行1間の建物で、遺構主軸はN-6°-Wである。遺構規模は梁行3.2 m、桁行4.3 mを測り、柱間は1.8～3.0 m、柱穴径0.7～0.84 m、深さ0.27～0.43 mである。柱穴からは弥生土器が出土しているが、いずれも細片で図示できるものはない。

S H45 (図 40)

梁間2間、桁行2間の建物で、遺構主軸はN-14°-Wである。遺構規模は梁行3.3 m、桁行3.7 mを測り、柱間は6.0～9.9 m、柱穴径0.46～0.72 m、深さ0.2～0.23 mである。柱穴からは弥生時代後期菊川式と推測される土器片が出土するが図示できるものはない。

S H46 (図 40)

梁間1間、桁行1間の建物で、遺構主軸はN-30°-Wである。遺構規模は梁行3.5 m、桁行3.5 mを測り、柱間は1.7～2.2 m、柱穴径0.45～0.76 m、深さ0.17～0.26 mである。柱穴より弥生時代後期菊川式の土器片が出土しているが、いずれも細片で図示できるものはない。

S K17 (図 41)

長径1.4 m、短径1.3 m、深さ0.3 mの円形の土坑である。覆土中より弥生時代後期菊川式の土器片とともに、土塊や炭化物が出土しているが、土器はいずれも細片で図示できるものはない。

S K18 (図 41)

長径2.8 m、短径1.5 m、深さ0.3 mの不整形な土坑である。覆土中より弥生時代後期の後葉欠山式の高坏脚部とともに、多量の弥生時代後期菊川式の土器片が出土しているが、いずれも細片で図示できるものはない。

S K19 (図 41)

長径2.3 m、短径1.9 m、深さ0.18 mの楕円形の土坑である。中央からやや北東にずれた床面付近にて、礫がとなりあうようになっている。弥生土器片が出土しているが、いずれも細片で図示できるものはない。

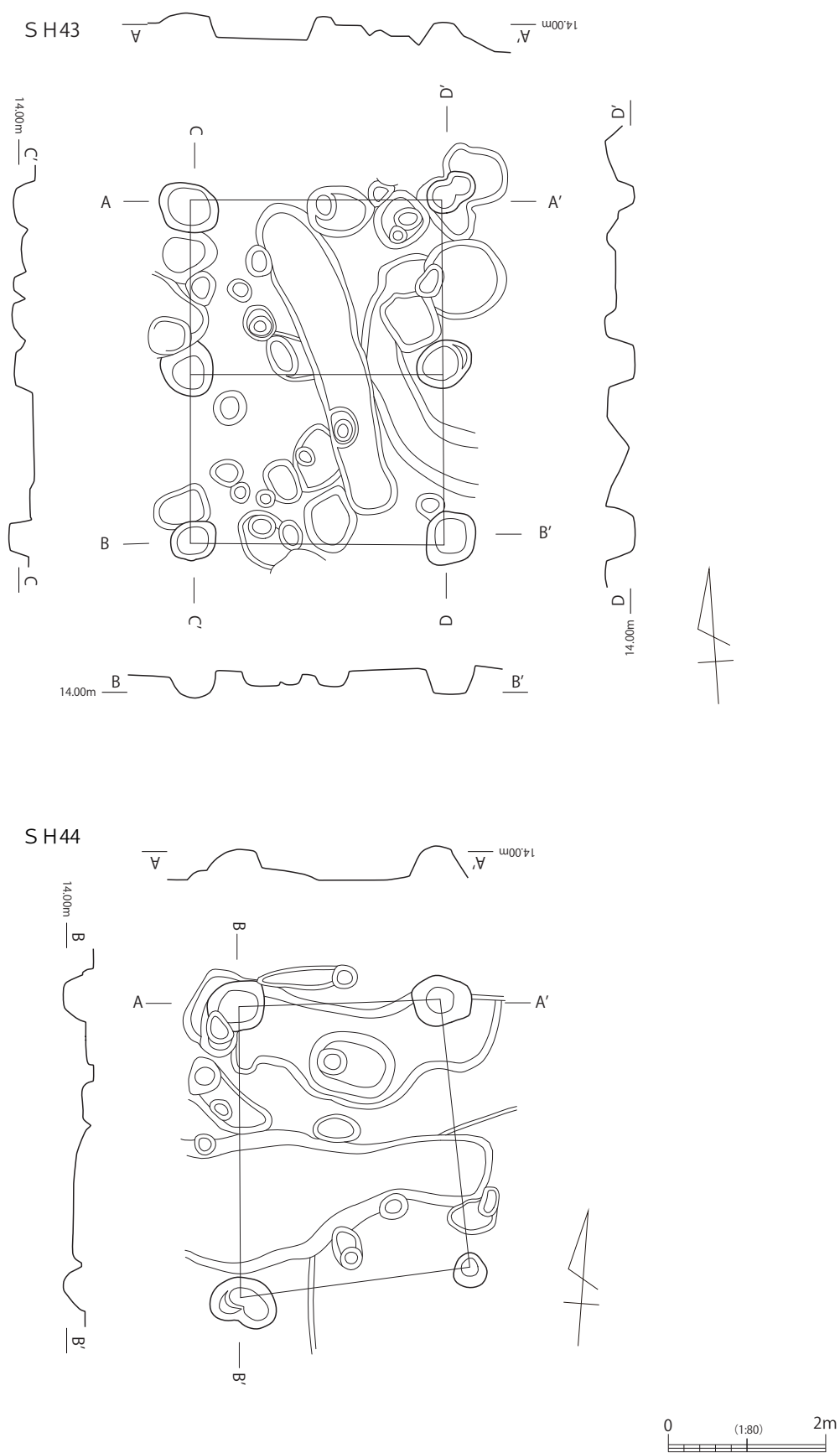
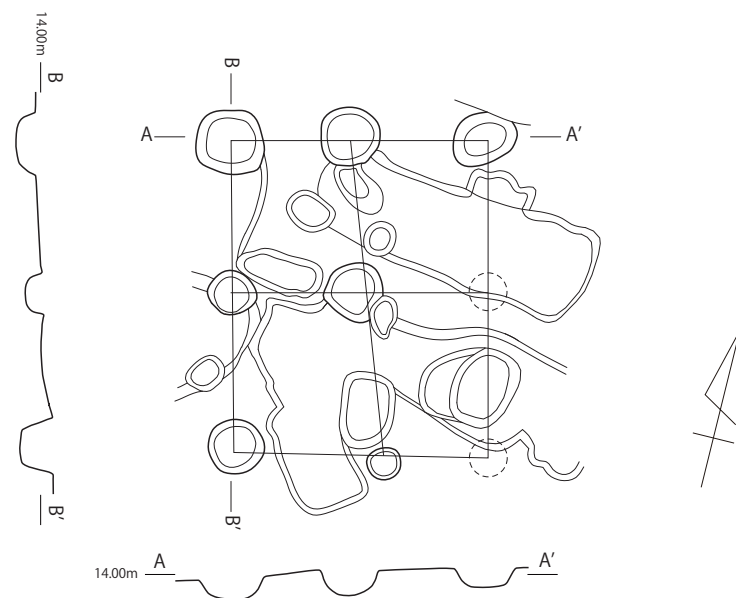


図 39. 第 19 次調査区 SH 43・44

S H45



S H46

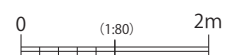
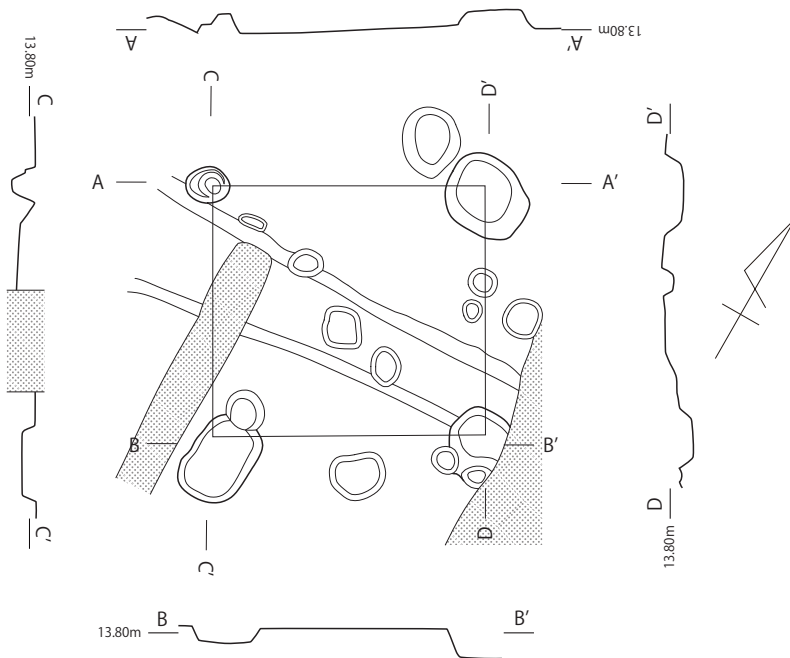


図 40. 第 19 次調査区 S H 45・46

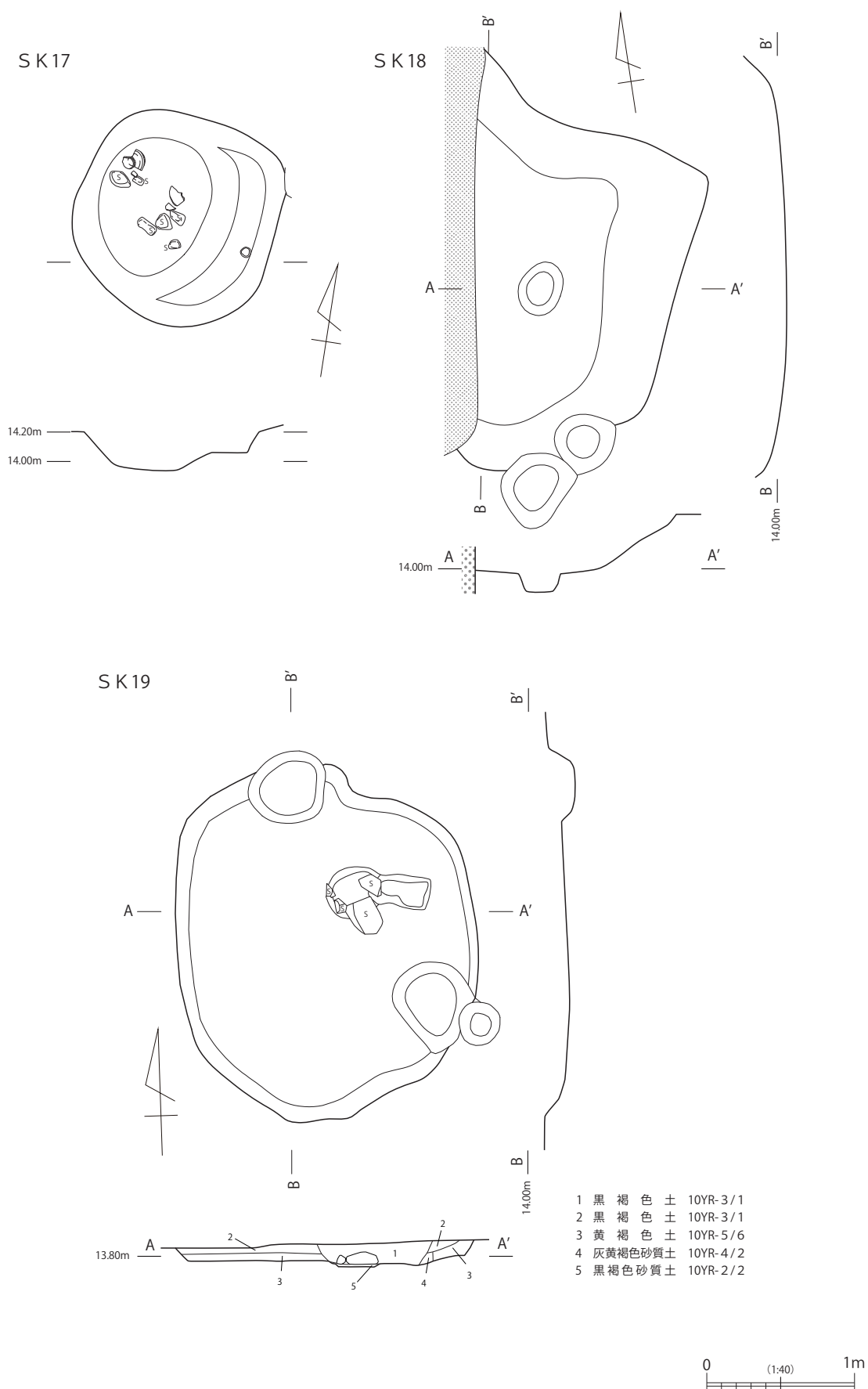


図 41. 第 19 次調査区 SK 17 ～ 19

S D 24 (図 42)

第 24 次・第 20 次調査区と連続する南北方向の溝である。覆土中からは、弥生時代後葉の欠山式とともに弥生時代後期菊川式の土器片が出土している。

S P 19-200 (図 42)

長径 1.0 m、短径 0.85 m、深さ 0.30 m を測る不整円形のピットで、弥生土器細片が出土している。

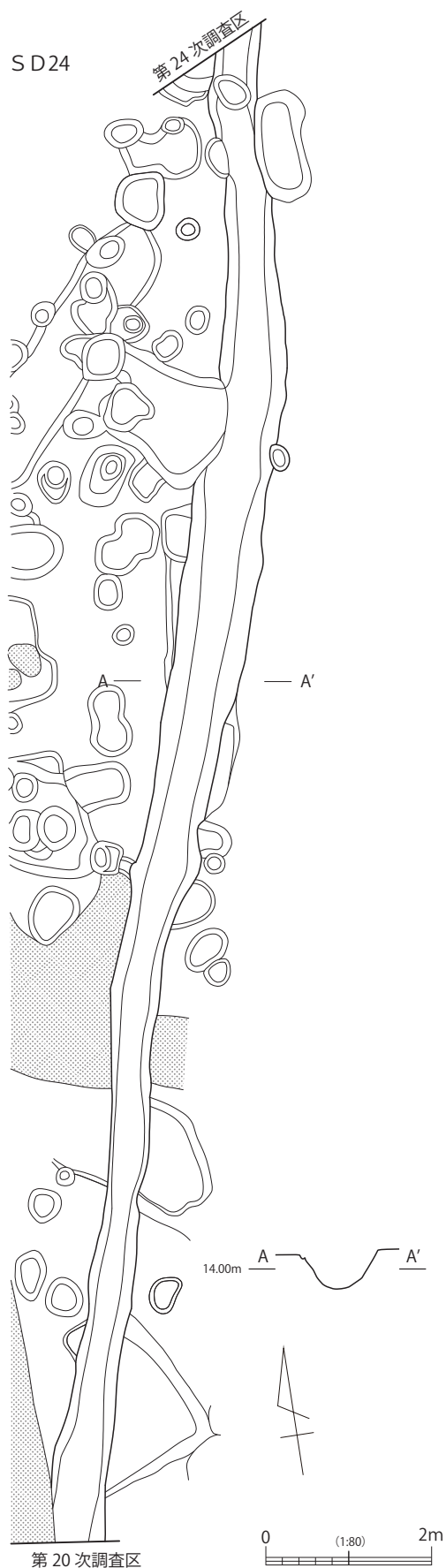
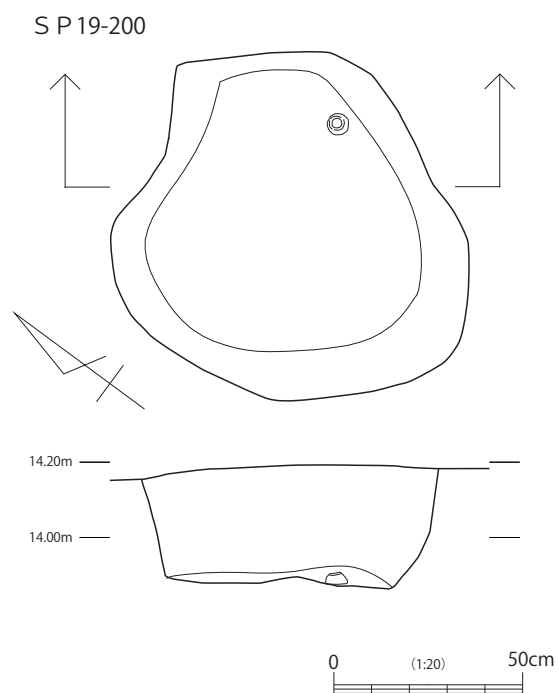


図 42. 第 19 次調査区 S P 19-200 S D 24

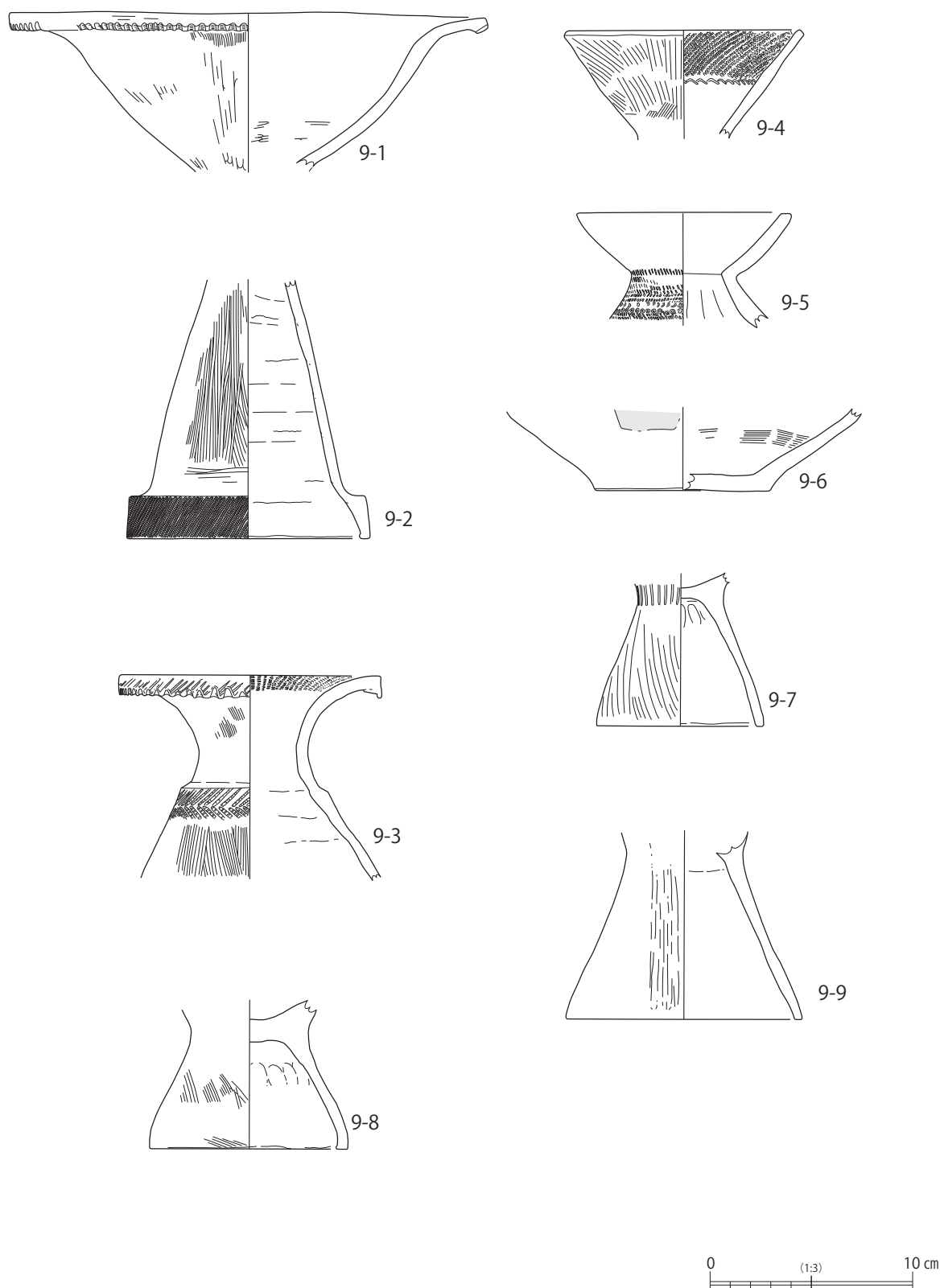


図 43. 第 19 次調査区 遺物実測図 1

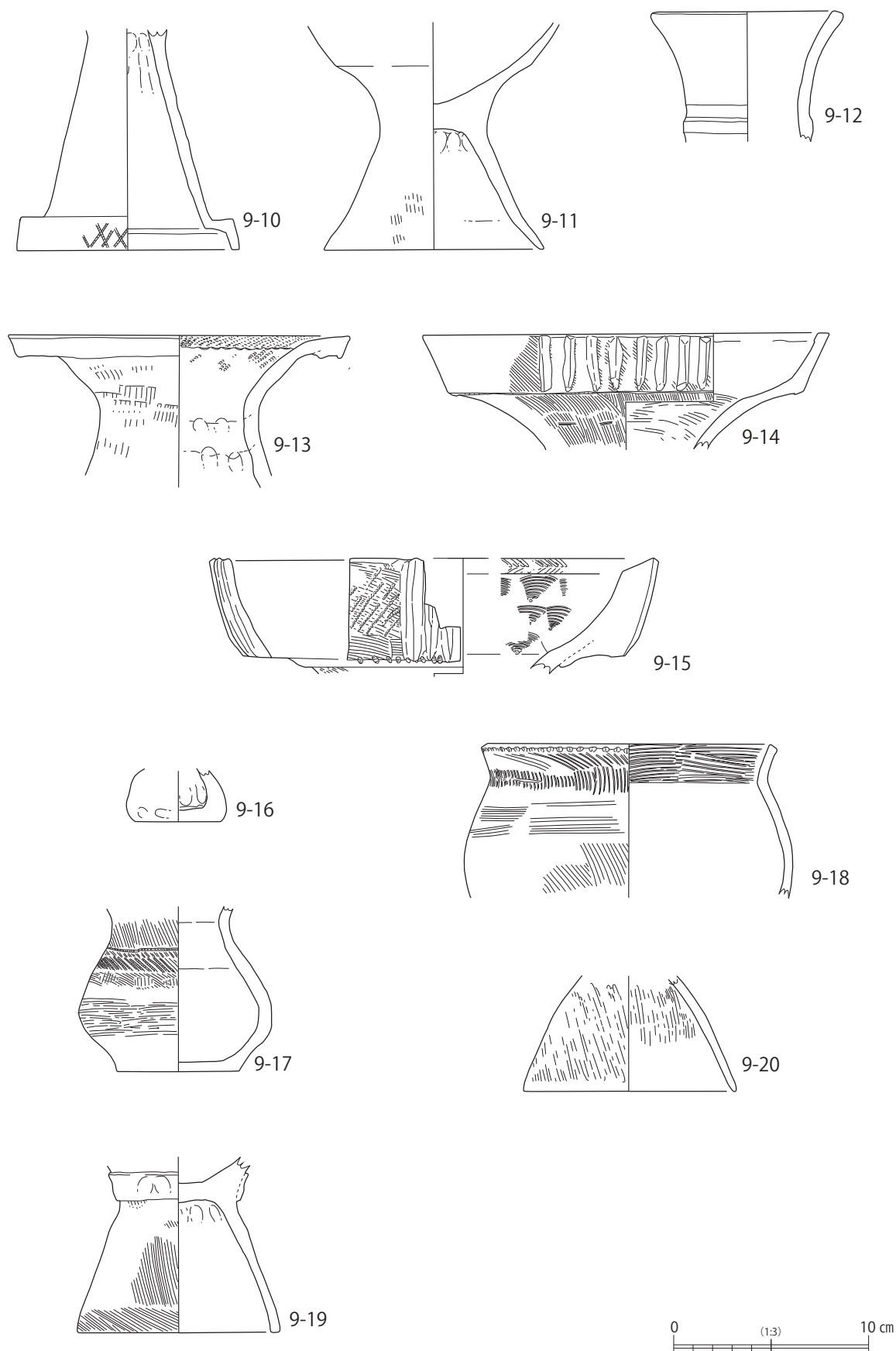


図 44. 第 19 次調査区 遺物実測図 2

6-2. 古墳時代の遺構・遺物

S H47 (図 45)

梁間1間、桁行1間の建物で、遺構主軸はN-8°-Wである。遺構規模は梁行4.4m、桁行6.0mを測り、柱間は3.2～4.8m、柱穴径0.56～0.68m、深さ0.2～0.29mである。柱穴からは土師器片、須恵器片が出土している。

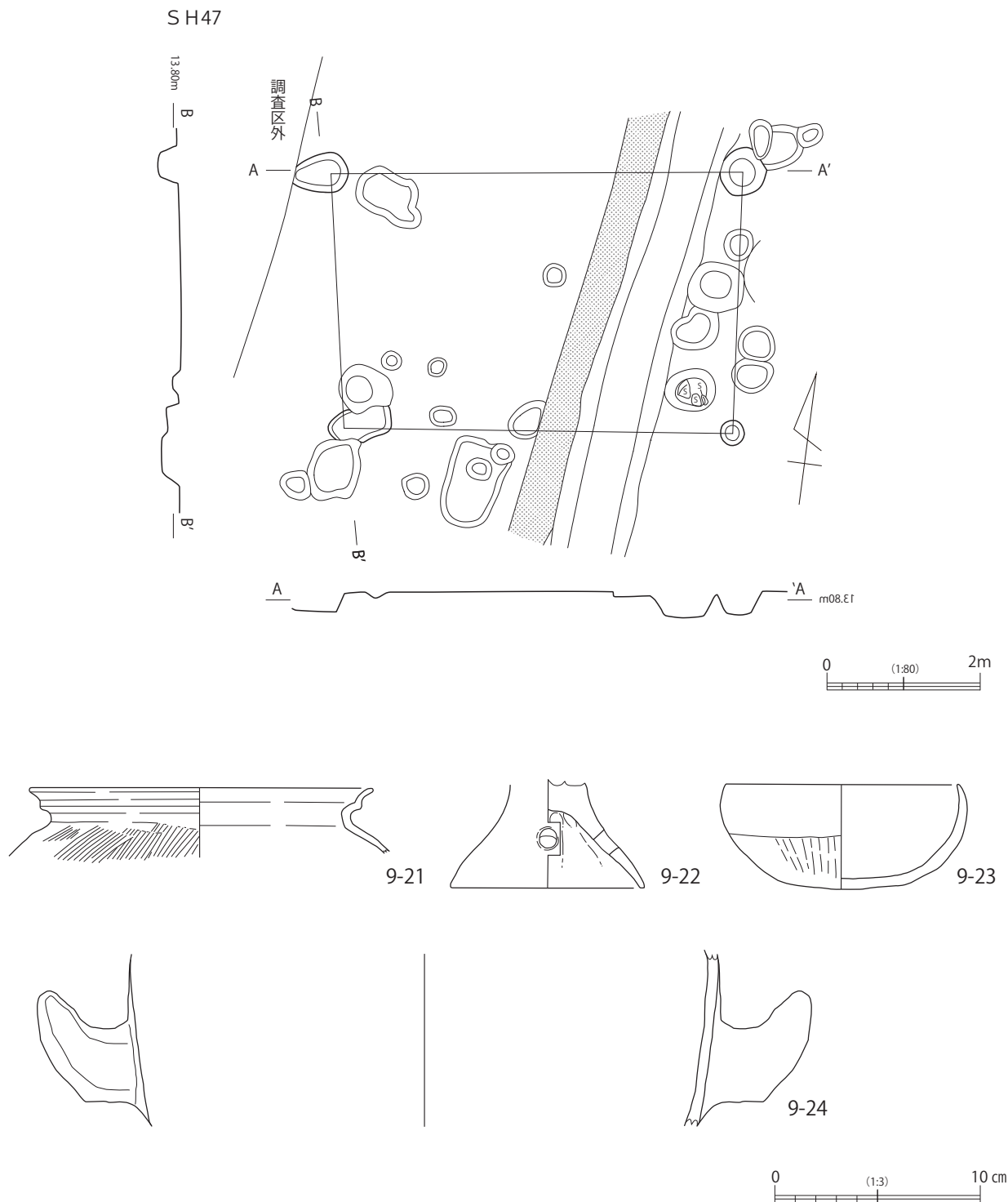


図 45. 第19次調査区 S H 5 遺物実測図 3

6-3. 奈良時代以降の遺構・遺物

S K 20 (図 46)

長径 2.4 m、短径 1.1 m、深さ 0.2 m の土坑である。SK20 の周囲は遺構面がマウンド上に高くなっている。7 世紀以降の須恵器、土師器。須恵器多い。

S D 25・26 (図 46)

第 18 次調査区から連続するこれらの溝からは、高台付きの須恵器坏身や土師器片が出土している。

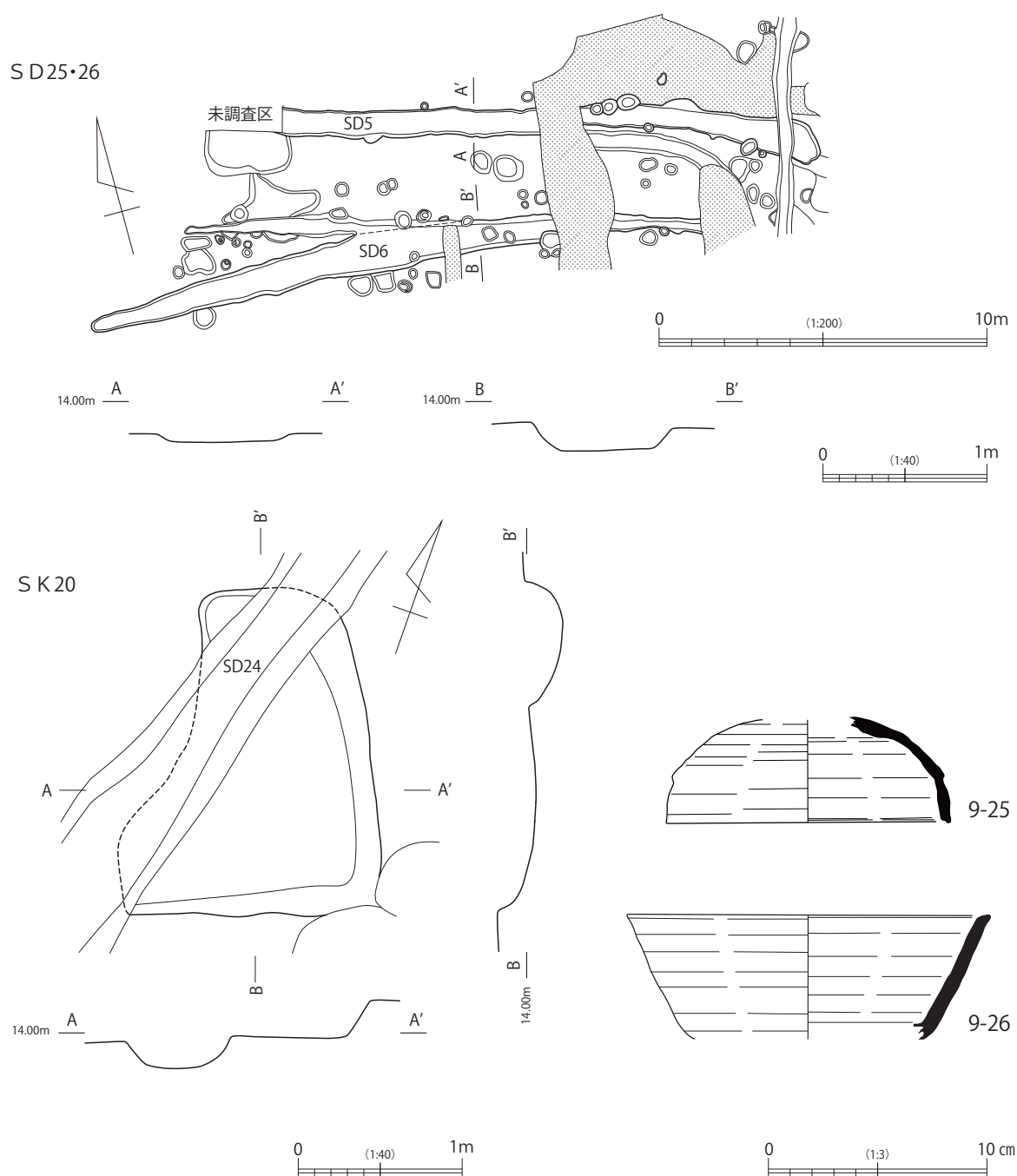


図 46. 第 19 次調査区 S D 25・26 S K 20 遺物実測図 4

7 節 第20次調査区

第19次調査区の東隣に位置する調査区で、調査時期は令和元年12月～令和2年2月、面積は739 m²である。西側に第19次調査区、東側に第15次調査区、南側に第11次調査区が隣接する。

基本層序は概ね以下の通りである。

- I 層 黄褐色土 表土
- II 層 黒褐色土 遺物包含層
- III 層 明黄褐色土 地山 遺構確認面

III層にて遺構を確認するまでに、表土を0.4～0.5 m除去した。遺構確認面の標高は13.8～14.6 mで、北東から南西方向にかけてゆるやかに傾斜をする。主に弥生時代中期から後期の竪穴住居、掘立柱建物、土坑、溝などを確認した。

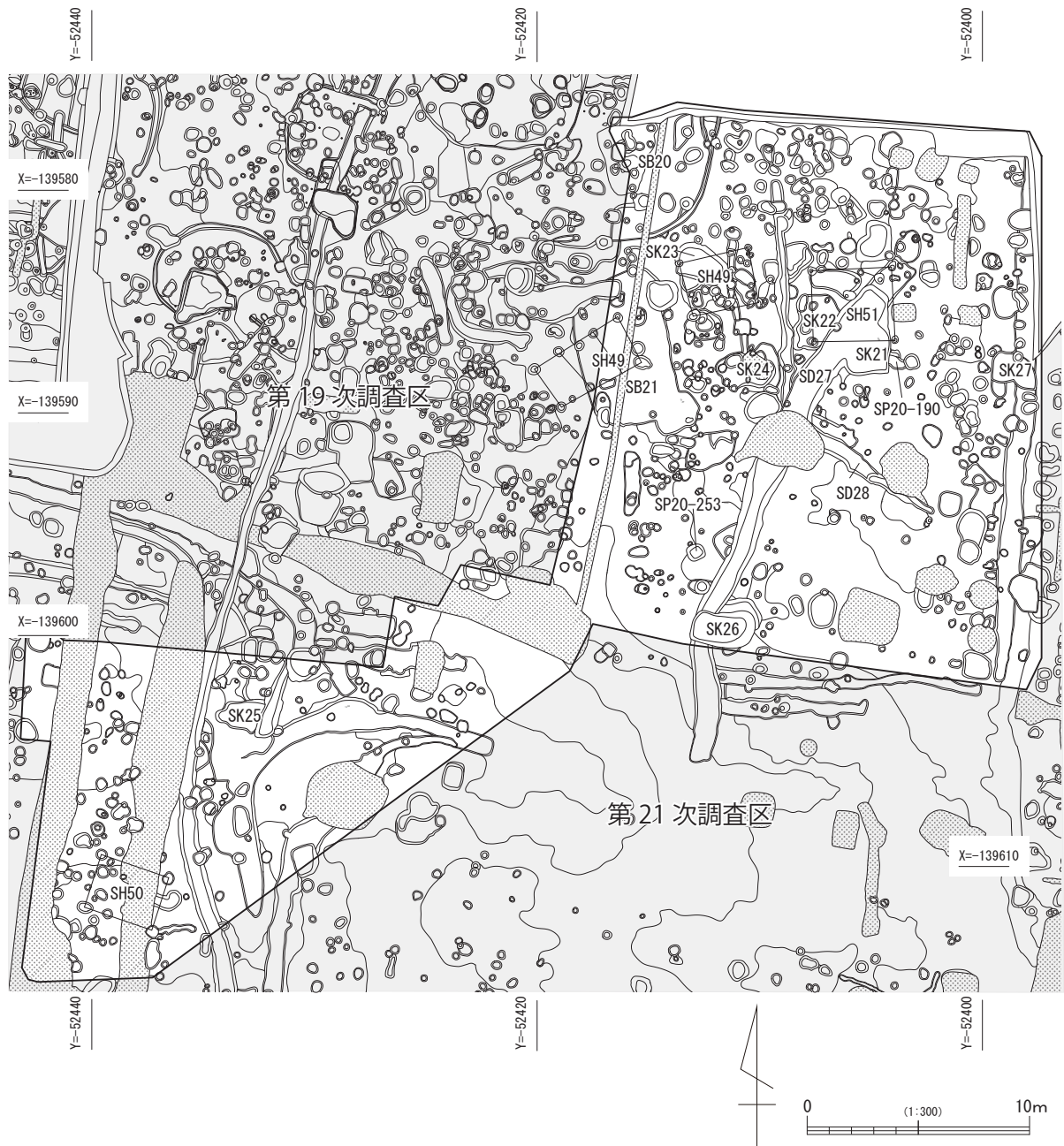


図 47. 第20次調査区全体図 (1:300)

7-1. 弥生時代の遺構・遺物

S B 20 (図 48)

平面形は東西に長い長楕円形で、住居の東端は近世の溝に切られており残存していない。長軸残存 4.65 m、短軸 4.86 m を測る。壁溝と柱穴のみで、掘り方や貼床、炉跡は確認できなかった。壁溝の幅は 0.24 m である。四本柱が四角形に配置されていたと推測する。第 19・20・24 次調査区と 3 つ調査区にまたがって確認された竪穴住居である。壁溝が第 20・24 次調査区で確認されているが、第 19 次調査区では明瞭ではない。壁溝で囲まれた範囲の中央からやや北よりではあるが、地床炉と推測される焼土を確認した。焼土は第 19 次調査区の北壁断面で検出され、焼土の範囲は幅 0.14 m、厚さ 0.04 m を測る。柱穴及び壁溝からは弥生時代後期菊川式の土器片出土している。

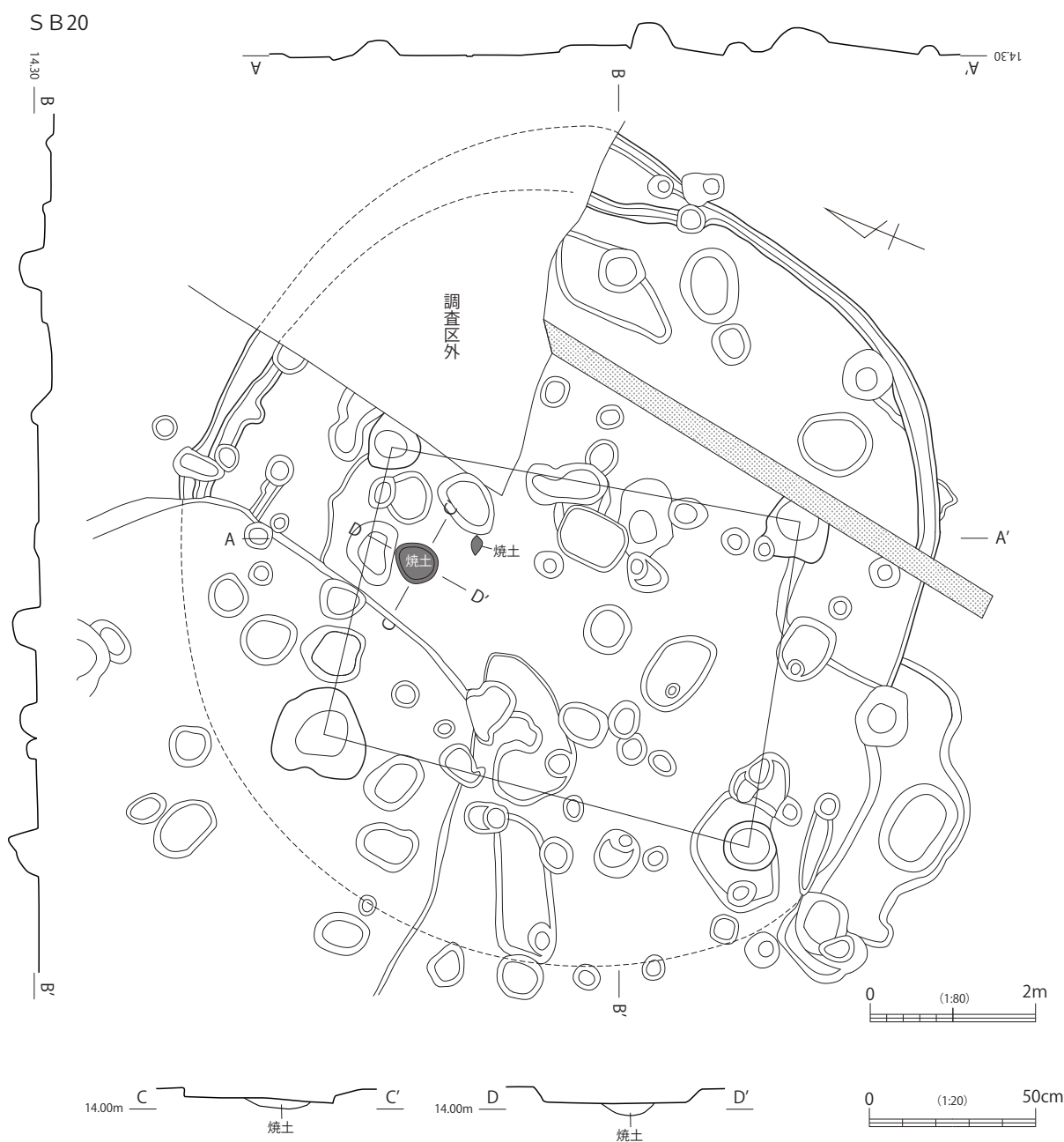


図 48. 第 20 次調査区 S B 20

S B 21 (図 49)

第 19・20 次調査区にまたがる遺構で、長径 6.8 m、短径 4.1 m、深さ 0.2 m を測る。隅丸長方形の遺構である。

S H 48 (図 49)

梁間 1 間、桁行 1 間の建物で、遺構主軸は $N-12^{\circ}-W$ である。遺構規模は梁行 2.8 m、桁行 3.3 m を測り、柱間は 2.1 ～ 2.4 m、柱穴の径 0.29 ～ 0.6 m、深さ 0.14 ～ 0.34 m である。

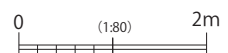
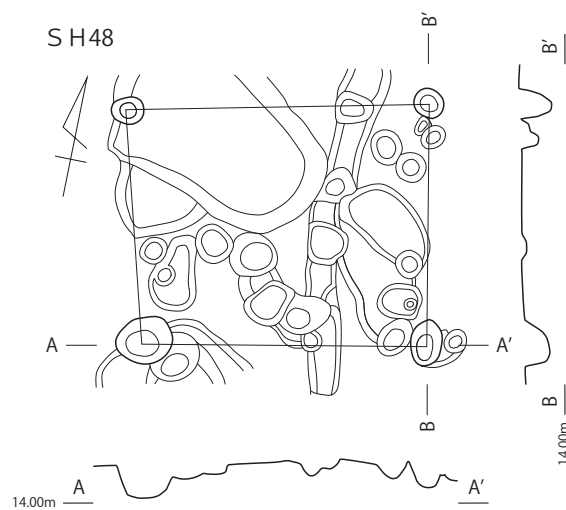
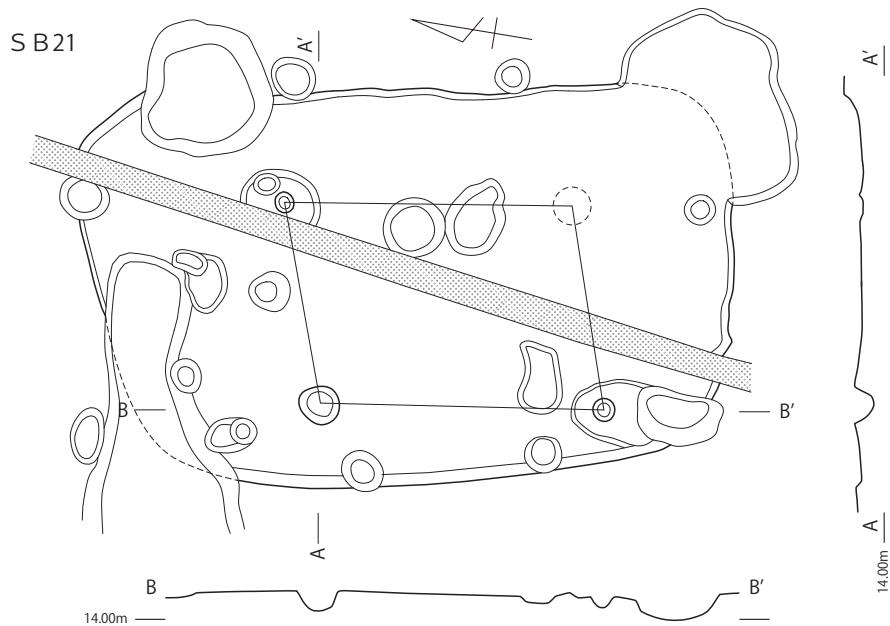


図 49. 第 20 次調査区 S B 21 S H 48

S H49 (図 50)

梁間1間、桁行3間の建物で、遺構主軸はN-32°-Wである。遺構規模は梁行2.4m、桁行4.8mを測り、柱間は0.8～1.6m、柱穴径0.4～0.69m、深さ0.13～0.33mである。第20区範囲内からは出土遺物ない。

S H50 (図 50)

梁間1間、桁行1間の建物で、遺構主軸はN-21°-Eである。遺構規模は梁行2.8m、桁行3.7mを測り、柱間は1.9～2.6m、柱穴の径0.41～0.7m、深さ0.1～0.39mである。柱穴からは弥生時代後期菊川式の土器片が見つかった。

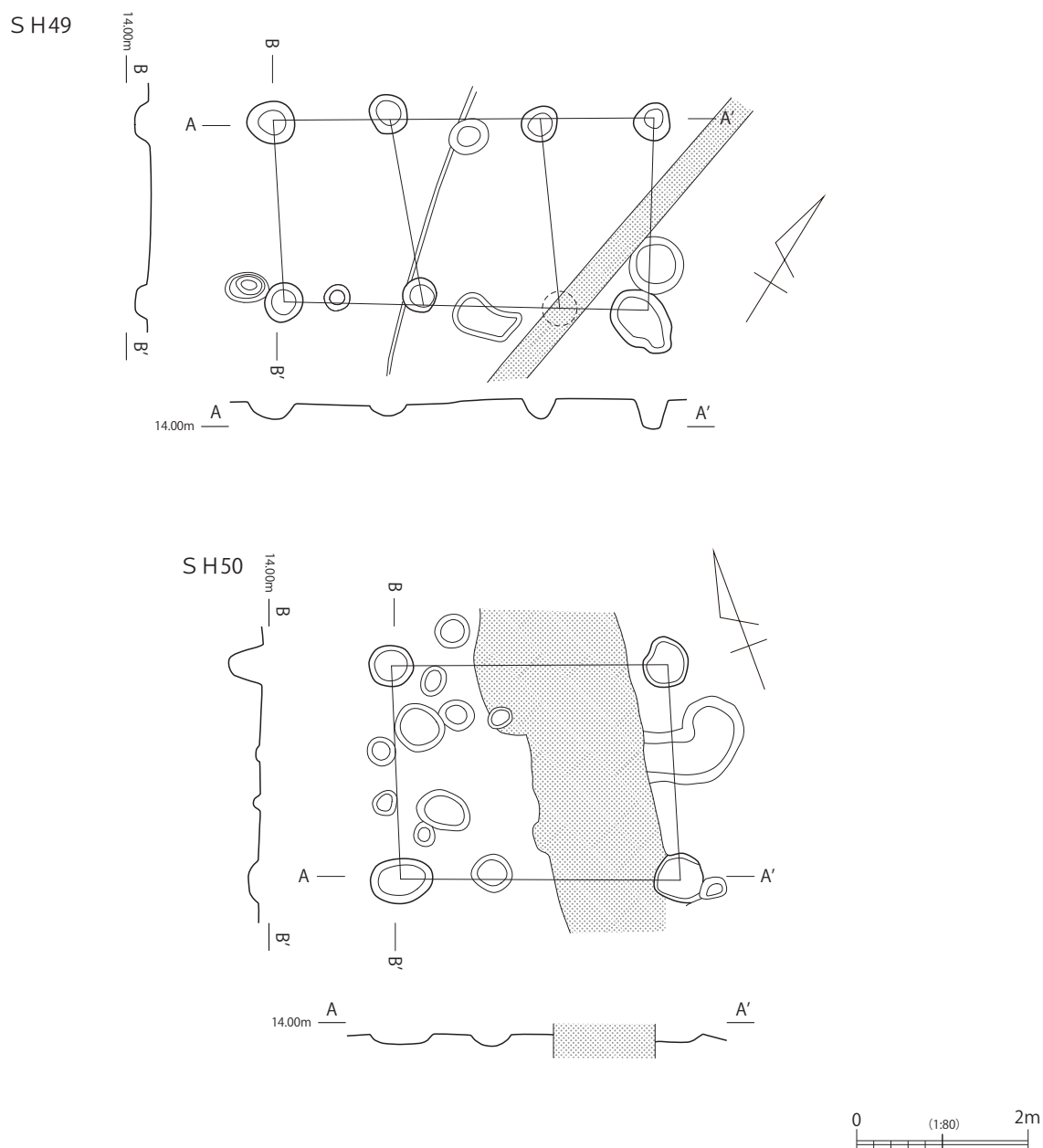


図 50. 第20次調査区 S H 49・50

S K21 (図 51)

SD27 と重なり確認された不整形の土坑で、径 2.1 m、深さ 0.38 m のおよそ正方形の土坑である。中央より弥生時代後期菊川式の土器片が複数出土している。特徴的な台付甕や壺の破片のほか、複数の穴や溝が彫られた軽石製の砥石が出土している。

S K22 (図 51)

SD27 と重なり確認された不整形の土坑で、長径 2.4 m、短径 1.8 m、深さ 0.15 m を測る。床面直上の中央部から、弥生土器の口縁部が出土した。

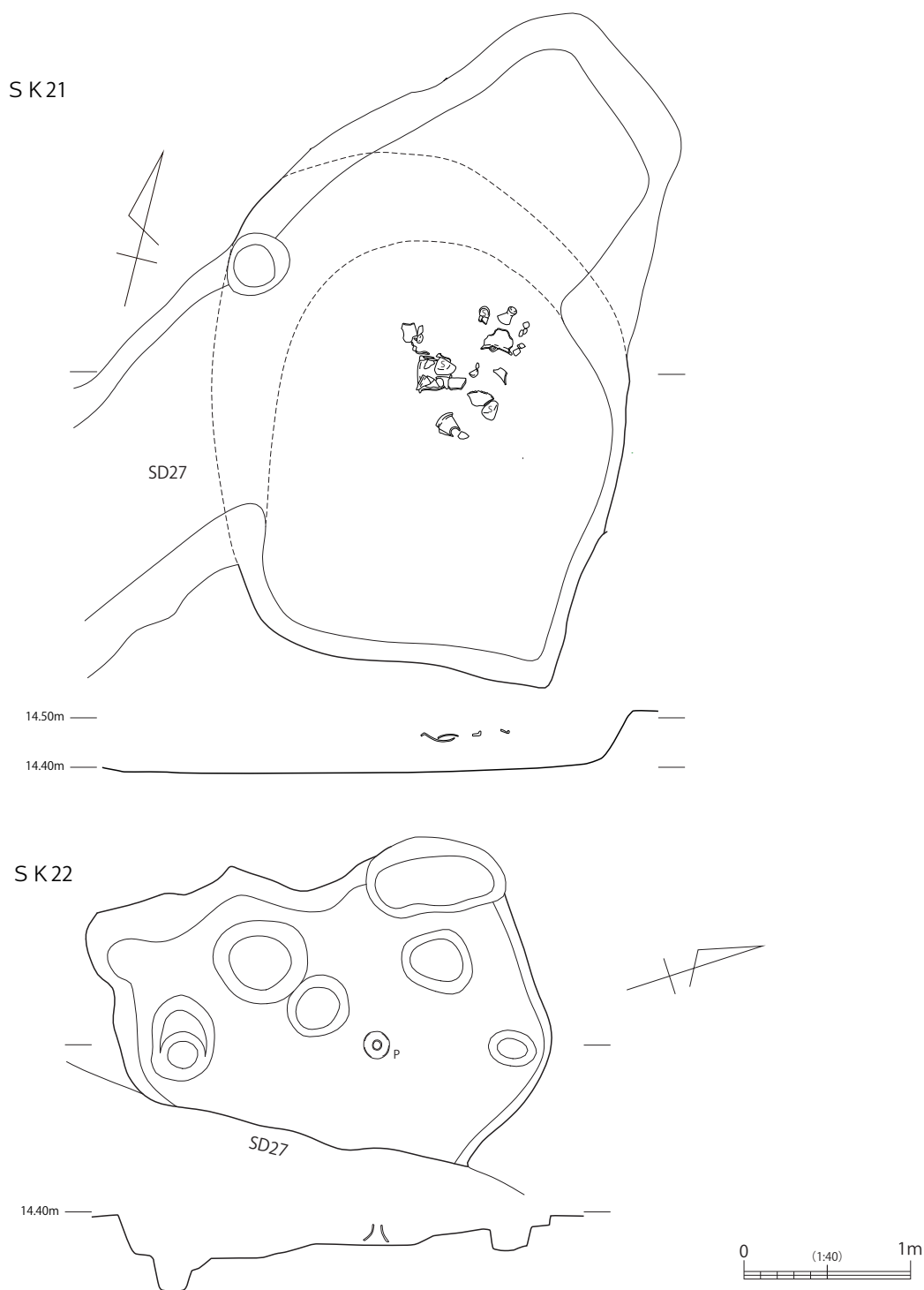


図 51. 第 20 次調査区 S K 21・22

S K23 (図 52)

長径 1.5 m、短径 2.4 m の楕円形の土坑。深さは 0.32 m を測る。出土遺物は弥生時代中期中葉嶺田式の特徴をもつ土器片とともに、弥生時代後期菊川式の壺が出土している。遺構の形状などから、土坑墓の可能性が高い。

S K24 (図 52)

長径 2.6 m、短径 1.4 m の不整形の土坑。深さは 0.32 m を測る。遺構の東側から弥生時代後期菊川式の特徴をもつ土器片とともに炭や粘土塊も出土しているが、周囲で焼土痕を確認できず、土器片や炭化物が遺構床面直上でないことから、別所からの持ち込みの可能性がある。

S K25 (図 53)

短径 1.4 m、長径 2.8 m、深さ 0.3 m の楕円形の土坑。SD27 と重複している。覆土からは弥生土器片が出土している。

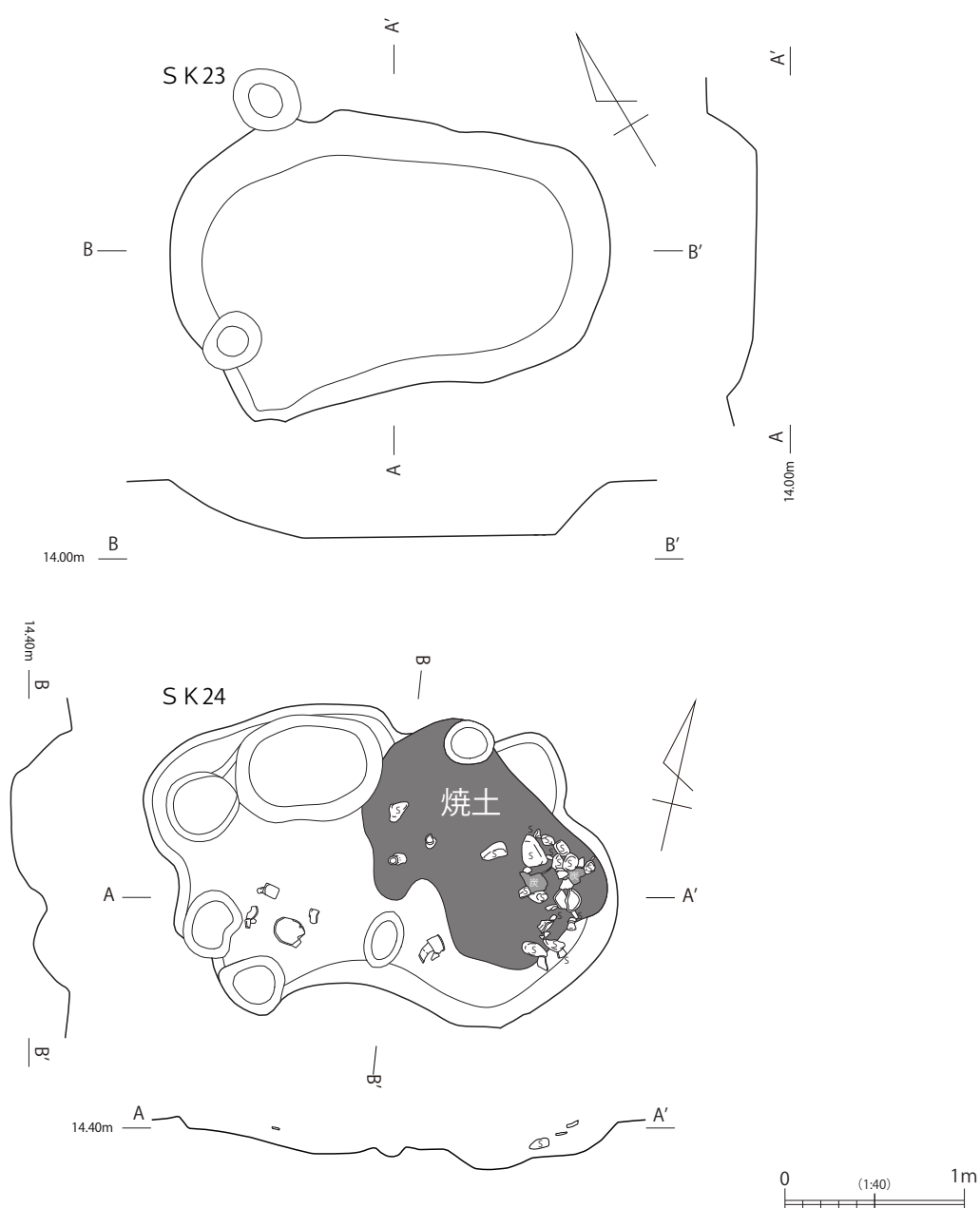


図 52. 第 20 次調査区 S K 23・24

S K26 (図 53)

長径 2.2 m、短径 1.4 m、深さ 0.16 m の浅い土坑である。東端は第 19 次調査区から延びる溝によって切られているため、全体形は不明である。弥生時代中期中葉嶺田式の特徴をもつ土器が出土している。土坑墓の可能性はある。

S D27 (図 54)

第 20 次調査区北側のブロックの中央を通る溝である。SK21 や SK22 など複数の土坑や溝と重なり合っている。弥生時代中期後葉白岩式の土器の出土がある。

S D28 (図 54)

第 20 次調査区北側のブロックの中央にある L 字形の溝。屈曲部で SD27 と重複する。L 字の折れた先から弥生時代後期菊川式の土器片が散らばるように出土している。

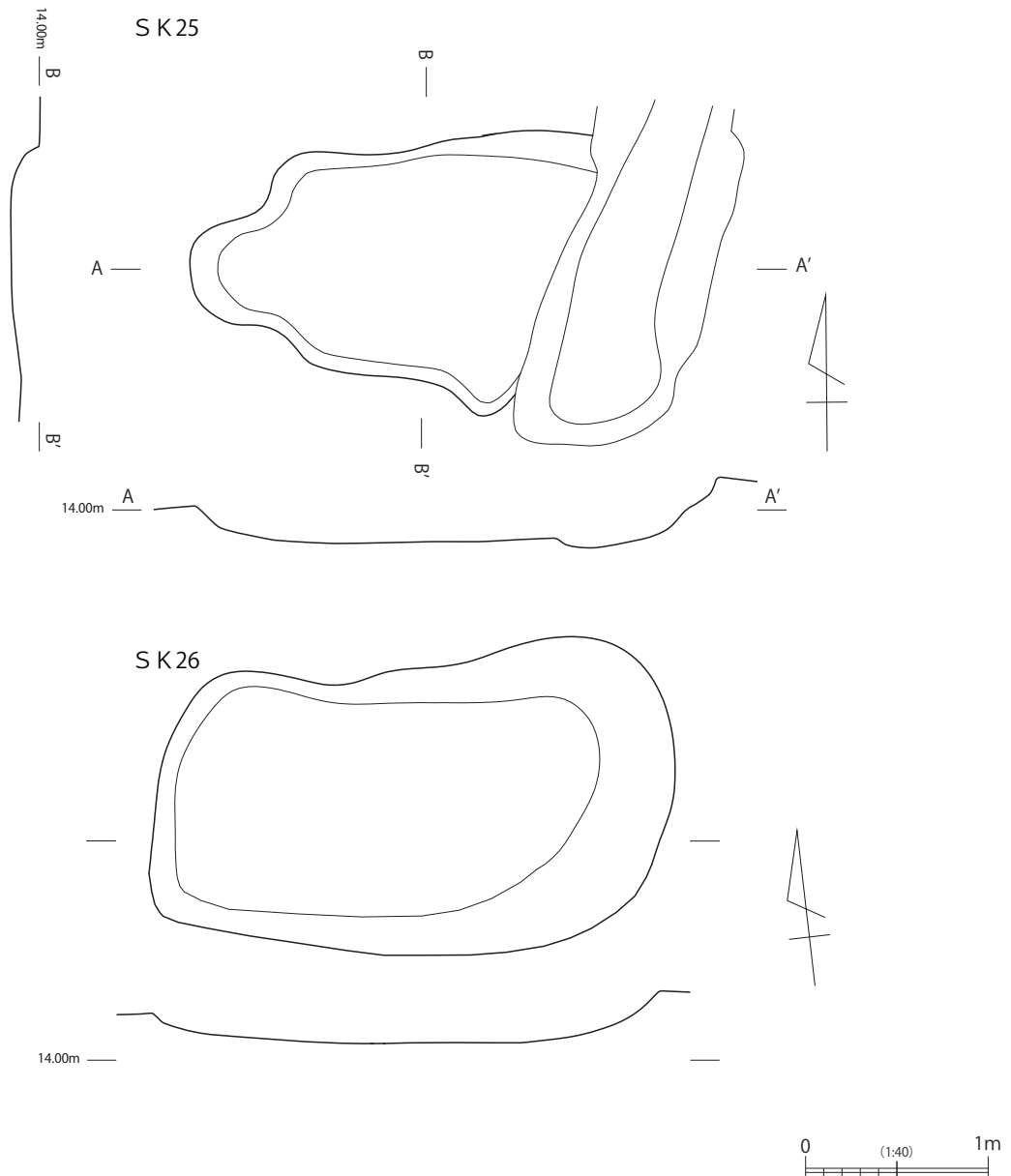


図 53. 第 20 次調査区 S K 25・26

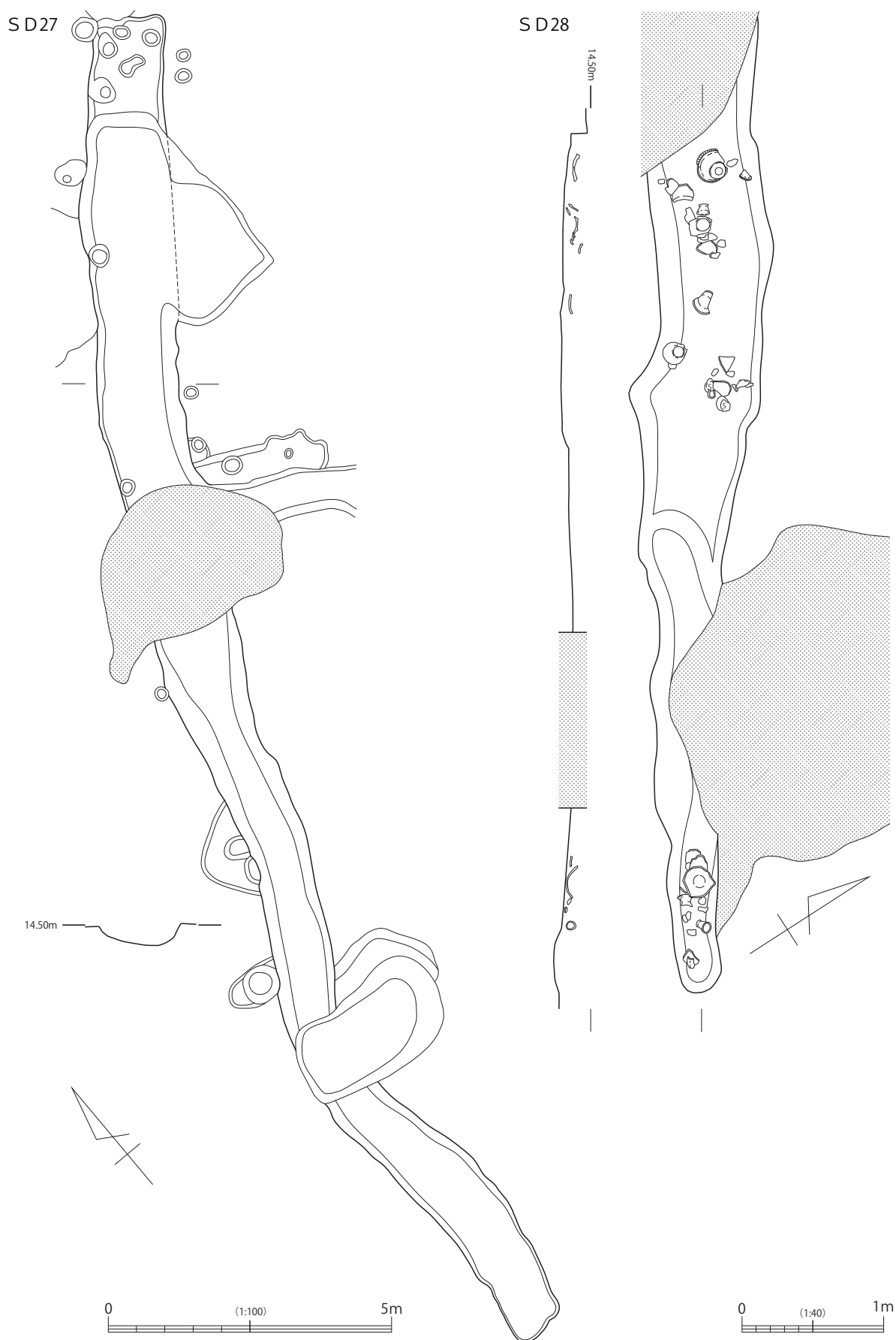


図 54. 第 20 次調査区 SD 27・28

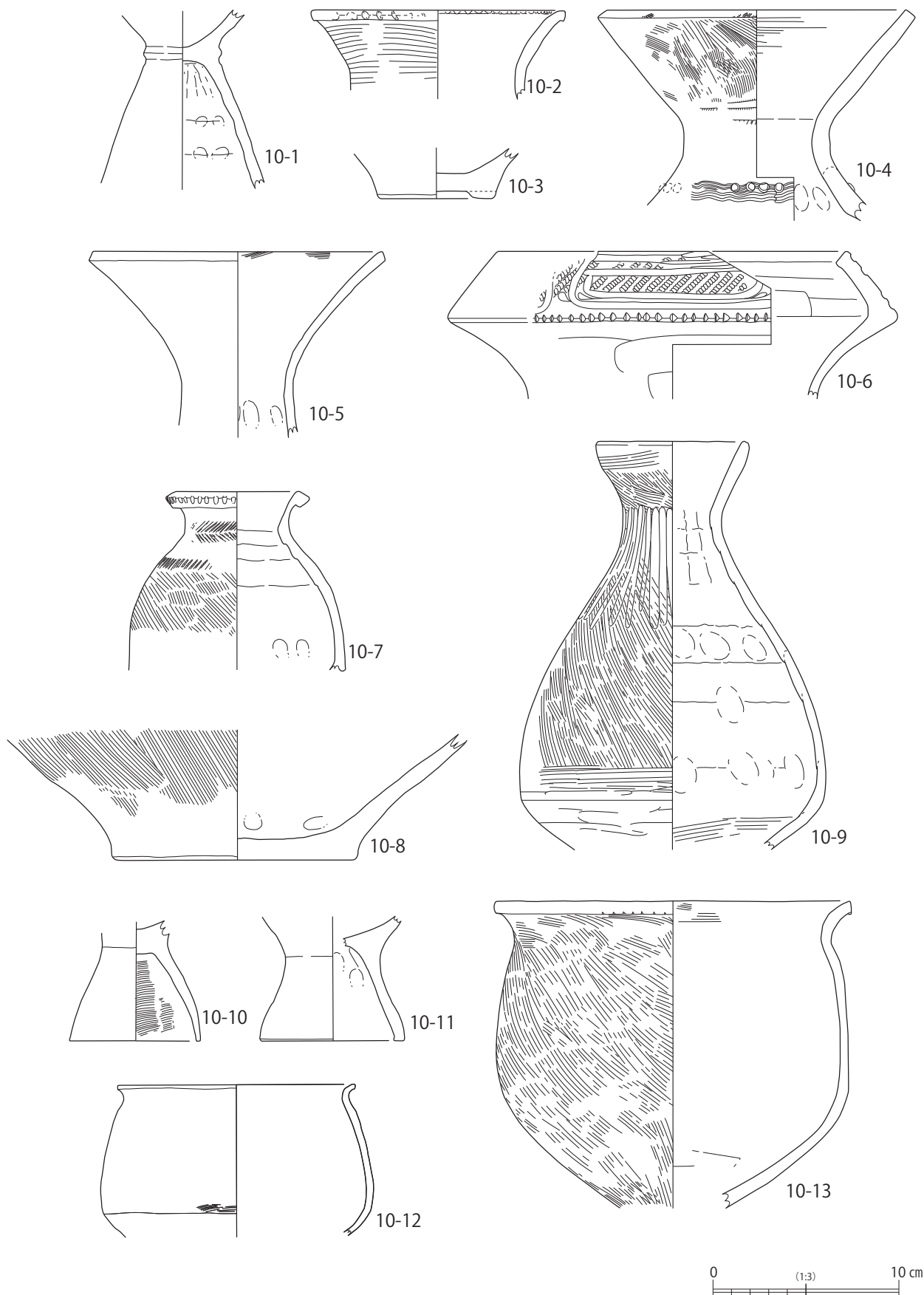


図 55. 第 20 次調査区 遺物実測図 1

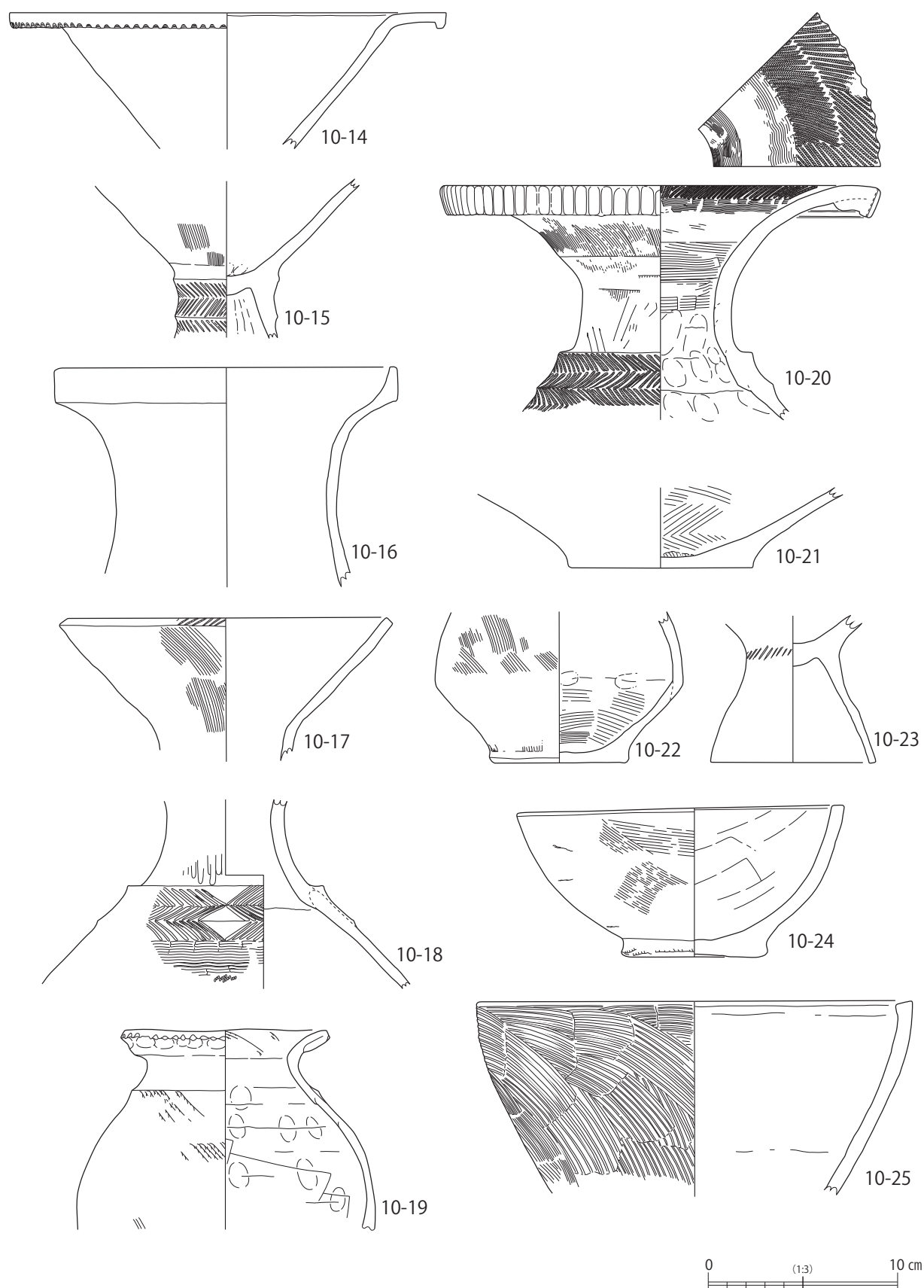


図 56. 第 20 次調査区 遺物実測図 2

7-2. 古墳時代の遺構・遺物

S H 51 (図 57)

梁間 1 間、桁行 1 間の建物で、遺構主軸は $N-3^{\circ}-W$ である。遺構規模は梁行 3.5 m、桁行 4.1 m を測り、柱間は 2.7 ～ 3.2 m、柱穴径 0.28 ～ 0.5 m、深さ 0.24 ～ 0.38 m である。柱穴から土師器片及び須恵器片が出土している。

S K 27 (図 57)

調査区の東端で確認された土坑。土師器の出土があることから古墳時代に属する。

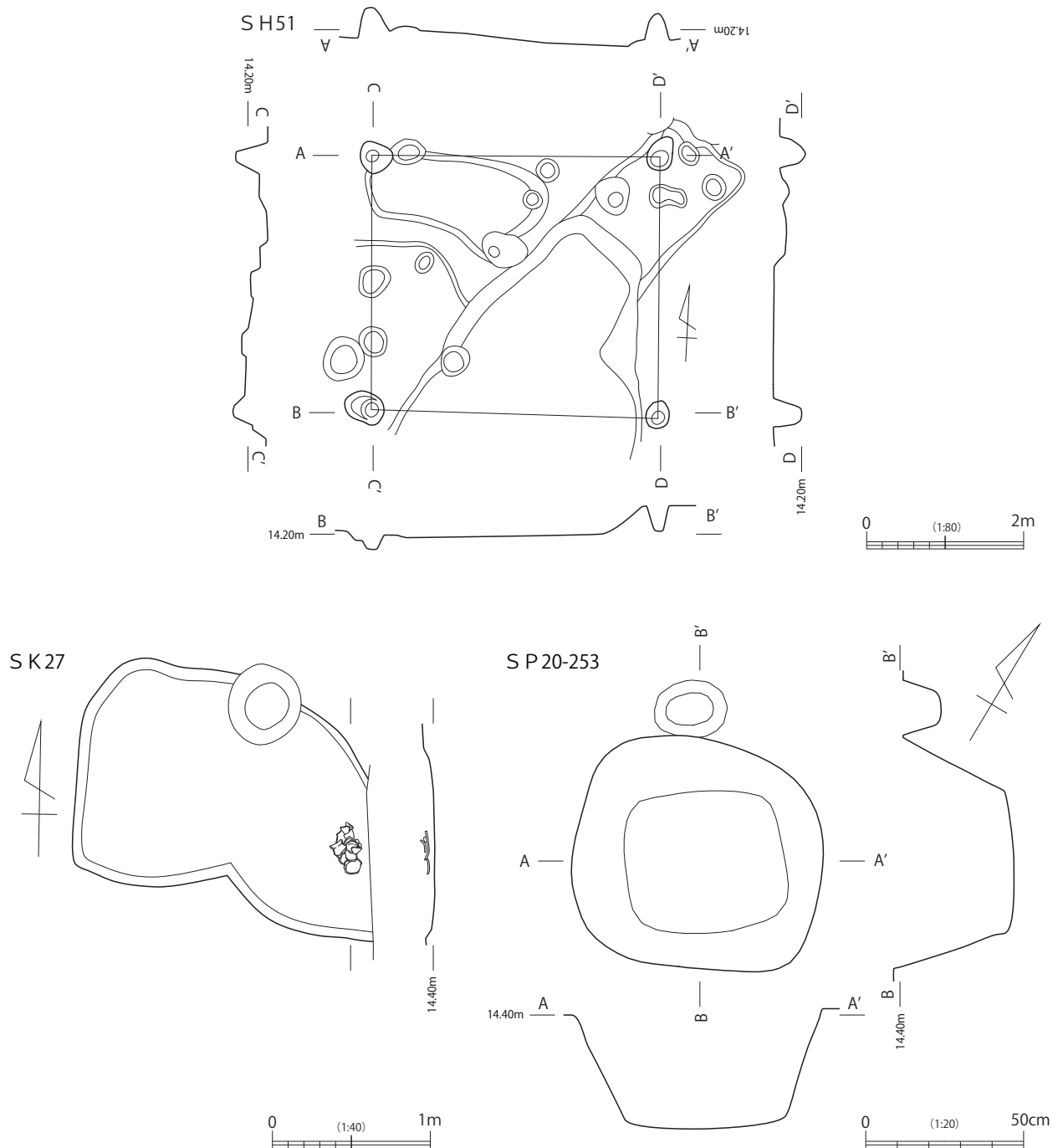


図 57. 第 20 次調査区 S H 51 S K 27 S P 20-253

7-3. 奈良時代以降の遺構・遺物

S P20-253 (図 57)

長径 0.79 m、短径 0.70 m、深さ 0.45 m を測る。隅丸長方形の平面形を持つ。かわらけが出土している。

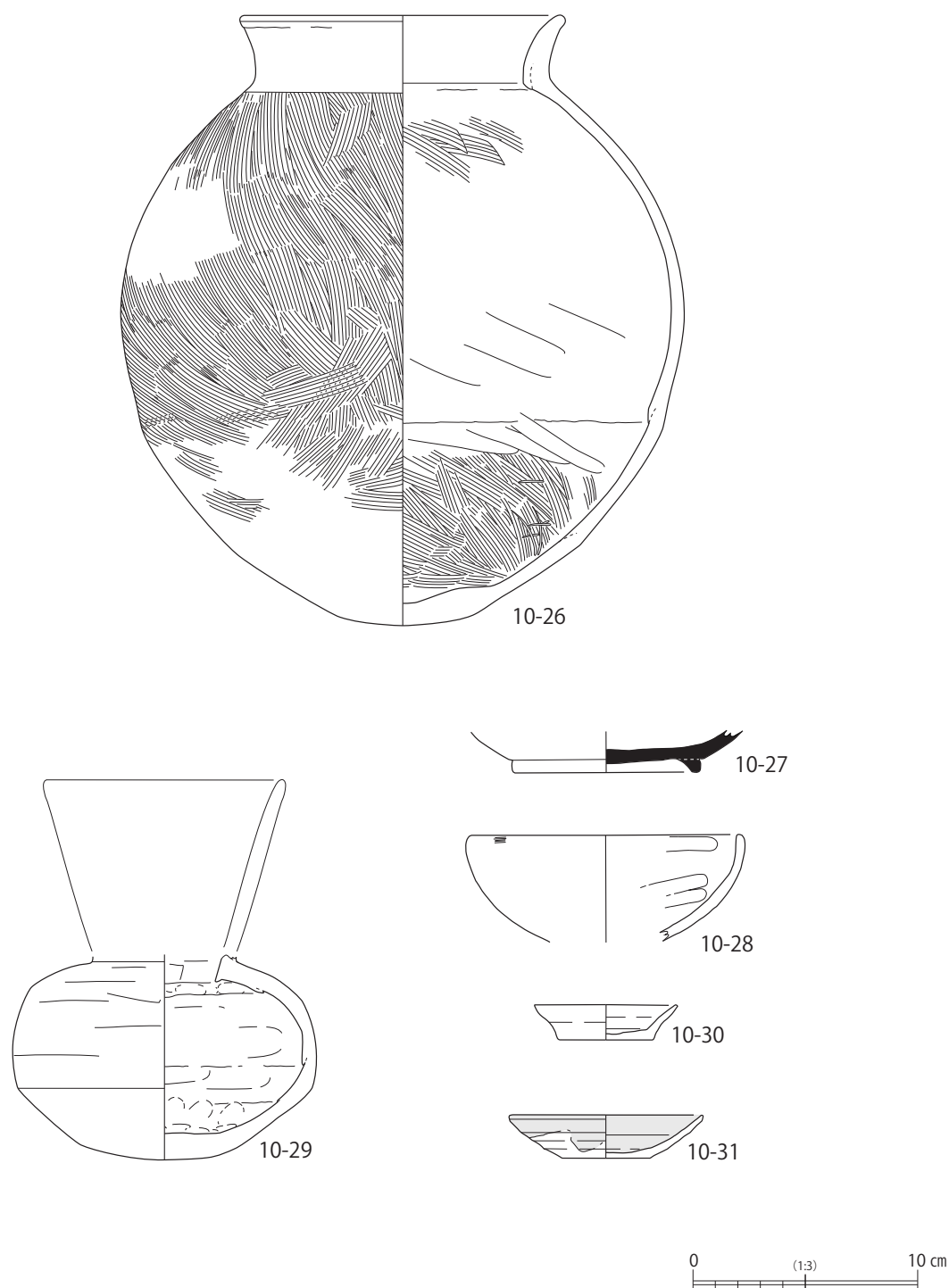


図 58. 第 20 次調査区 遺物実測図 3

8 節 第21次調査区

遺跡の南端部にあたる調査区で、調査時期は令和2年2月～3月、面積は1,231 m²である。東側に第15次調査区が、西側に第19次調査区が、北側に第20次調査区が位置する。

基本層序は概ね以下の通りである。

- I 層 黄褐色土 表土
- II 層 黒褐色土 遺物包含層
- III 層 明黄褐色土 地山 遺構確認面

III層にて遺構を確認するまでに、表土を0.6 m除去した。遺構確認面の標高は13.8～14.6 mで、北東から南西方向にかけてゆるやかに傾斜をする。遺構面は礫層が中心で、粘土層はほぼみられない。

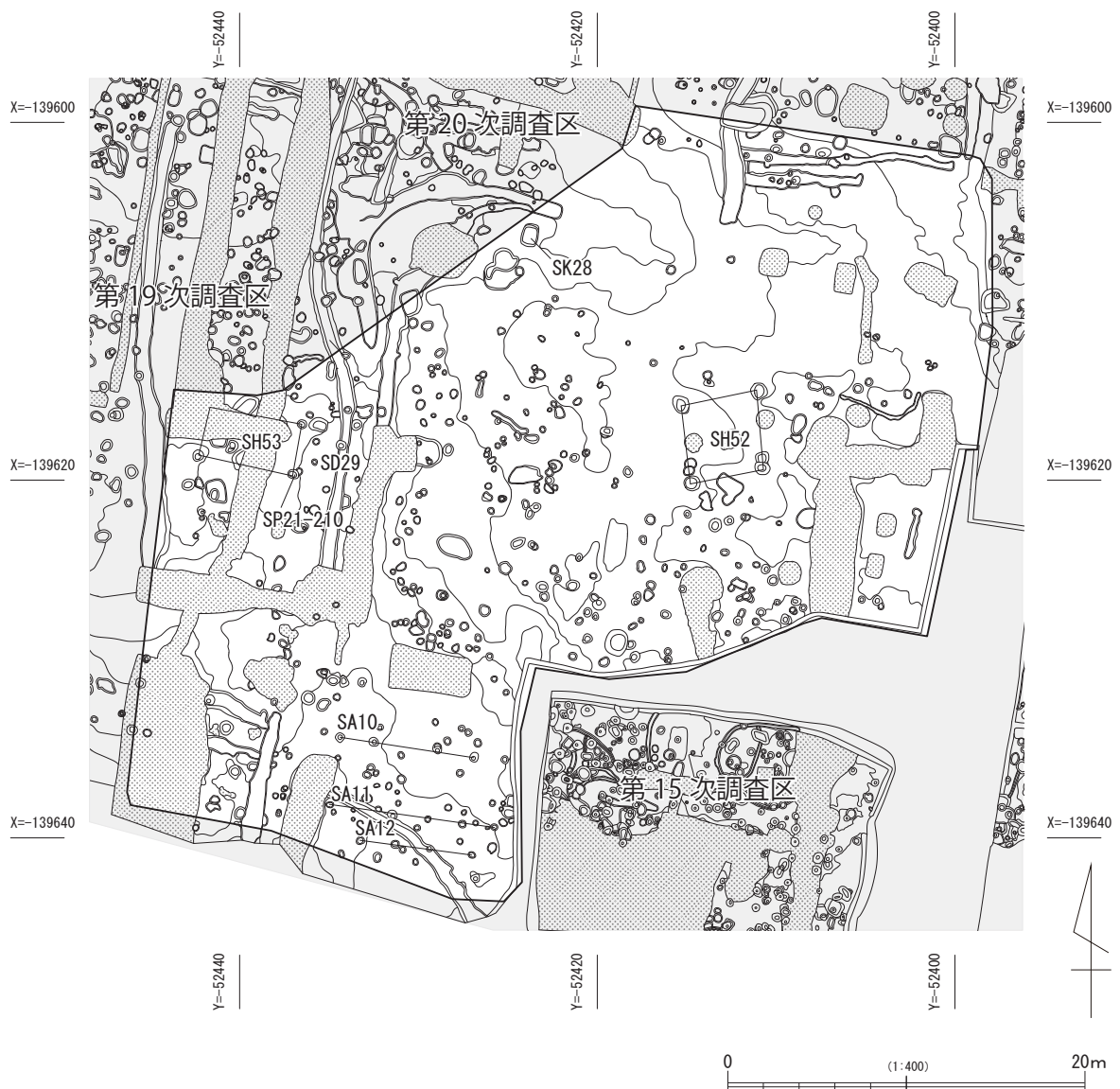


図 59. 第21次調査区全体図

8-1. 古墳時代の遺構・遺物

S H52 (図 60)

梁間1間、桁行1間の建物で、遺構主軸はN-10°-Wである。梁行5.2m、桁行5.2mを測り、柱間は3.2～3.5m、柱穴径0.26～0.48m、深さ0.20～0.38mである。

8-2. 奈良時代以降の遺構・遺物

S H53・S P21-210 (図 61・62)

梁間1間、桁行1間の建物で、遺構主軸はN-11°-Wである。梁行3.3m、桁行6mを測り、柱間は2.3～4.8m、柱穴径0.53～0.63m、深さ0.29～0.34mである。出土遺物から7世紀以降の建物と考えられる。

S A10-12 (図 61)

調査区の南端部で確認された柵列である。最も北側のSA10は4基のピットが東西方向に並び、規模は7.3m、柱間は2.0～3.3m、深さ0.25mを測る。SA11はSA10から0.8m南側に並行して並ぶ5基のピットからなる柵で、規模は8.5m、柱間は2.0～3.4m、深さ0.25mを測る。SA12はSA11に近接して南側に並行して並ぶ4基のピットからなる柵で、規模は6.0m、柱間は2.0m、深さ0.08mを測る。

S K 28 (図 62)

調査区の北西部にある遺構で、長径1.27m、短径0.93m、深さ0.17mを測る隅丸方形の墓壇である。床面直上より冥銭と見られる中国渡来銭（紹聖元宝・嘉祐通宝・紹聖元宝）3枚と覆土中よりかわらけが出土した。江戸時代以前の方形土壇と考えられる。人骨や木棺の痕跡は残されておらず、北頭位と推定されるが詳細な埋蔵形態は不明である。

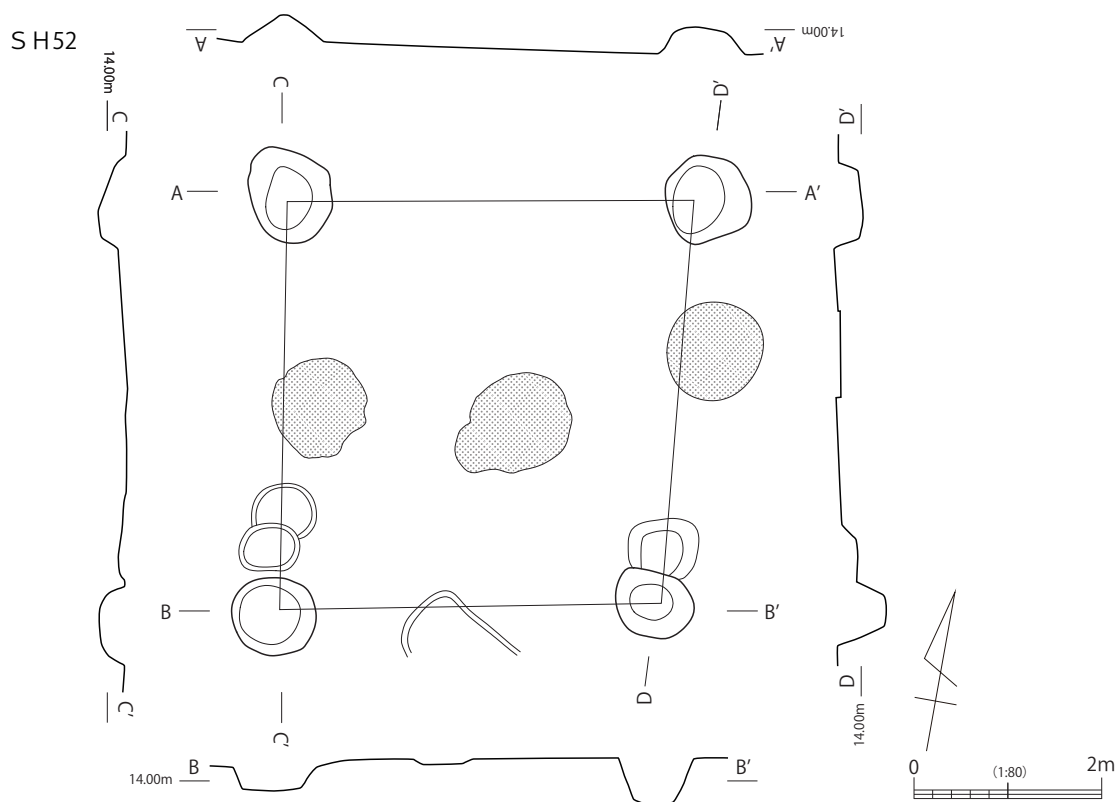


図 60. 第 21 次調査区 S H 52

S H53

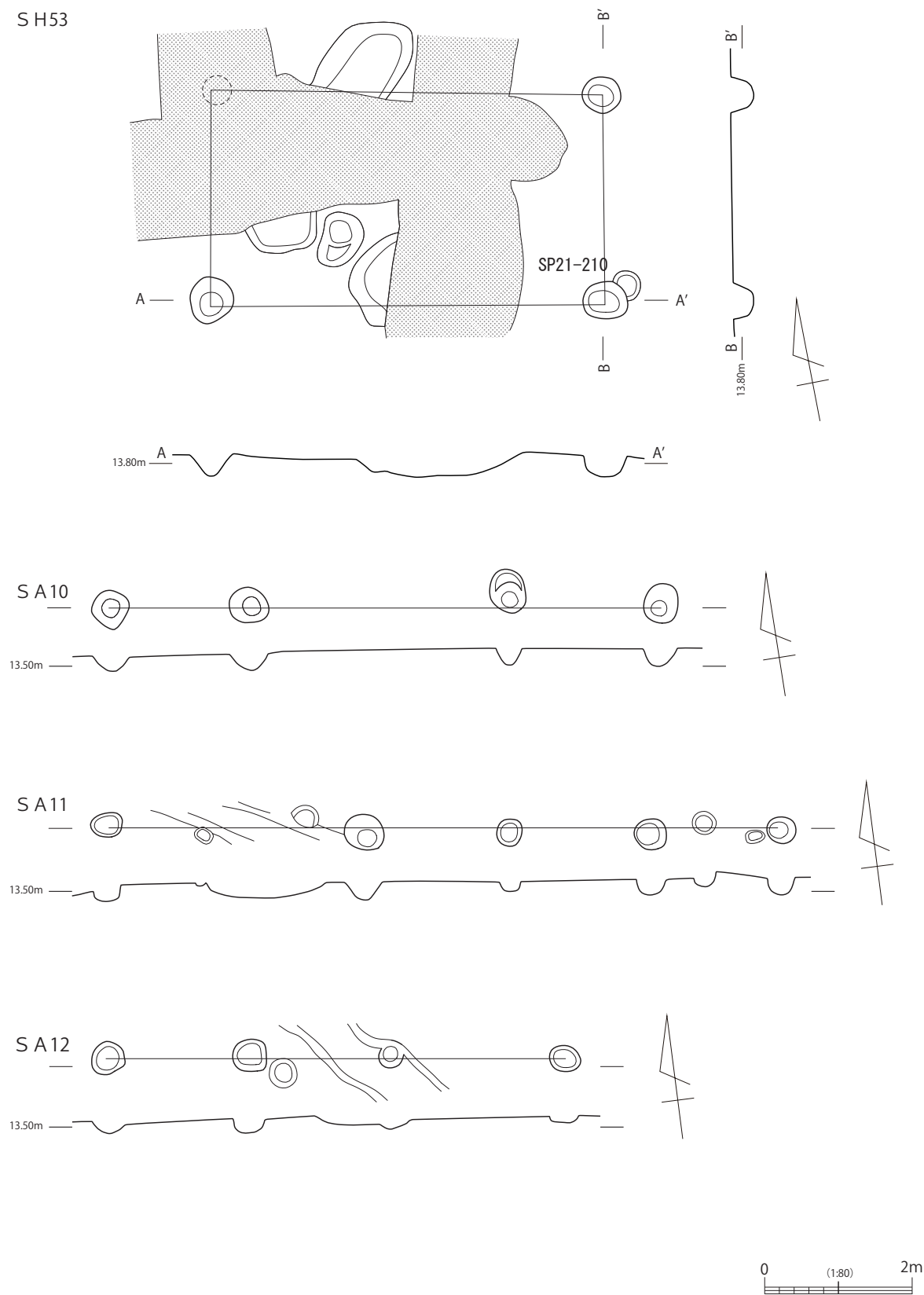


図 61. 第 21 次調査区 SH 53 SA 10～12

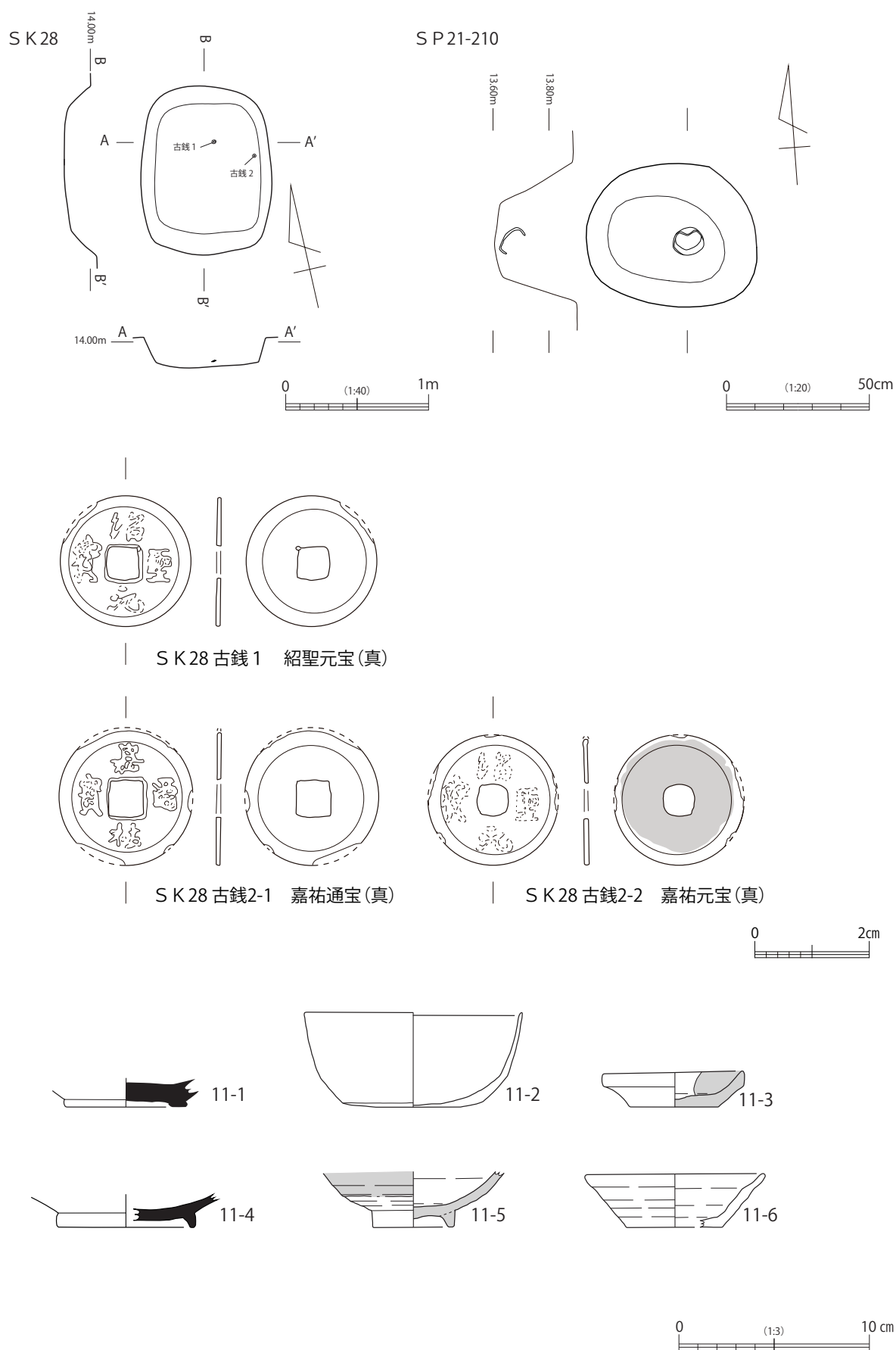


図 62. 第 21 次調査区 SK 28 SP 21-210 出土遺物実測図

9節 第22次調査区

第22次調査区は大門遺跡の南端部に位置し、調査時期は令和2年4月～5月、面積は418㎡である。東側は第32次調査区、西側は第30次調査区、北側は第31次調査区と接する。

基本層序は概ね以下の通りである。

- I層 黄褐色土 表土
- II層 褐色土 遺物包含層
- III層 明黄褐色土 地山 遺構確認面

III層にて遺構を確認するまでに、表土を0.3～0.7m除去した。遺構確認面の標高は15.4～16.0mで、北東から南西方向にかけてゆるやかに傾斜をする。弥生時代の竪穴住居2棟、掘立柱建物2棟、土坑のほか、古墳時代以降の土坑やピットを検出した。

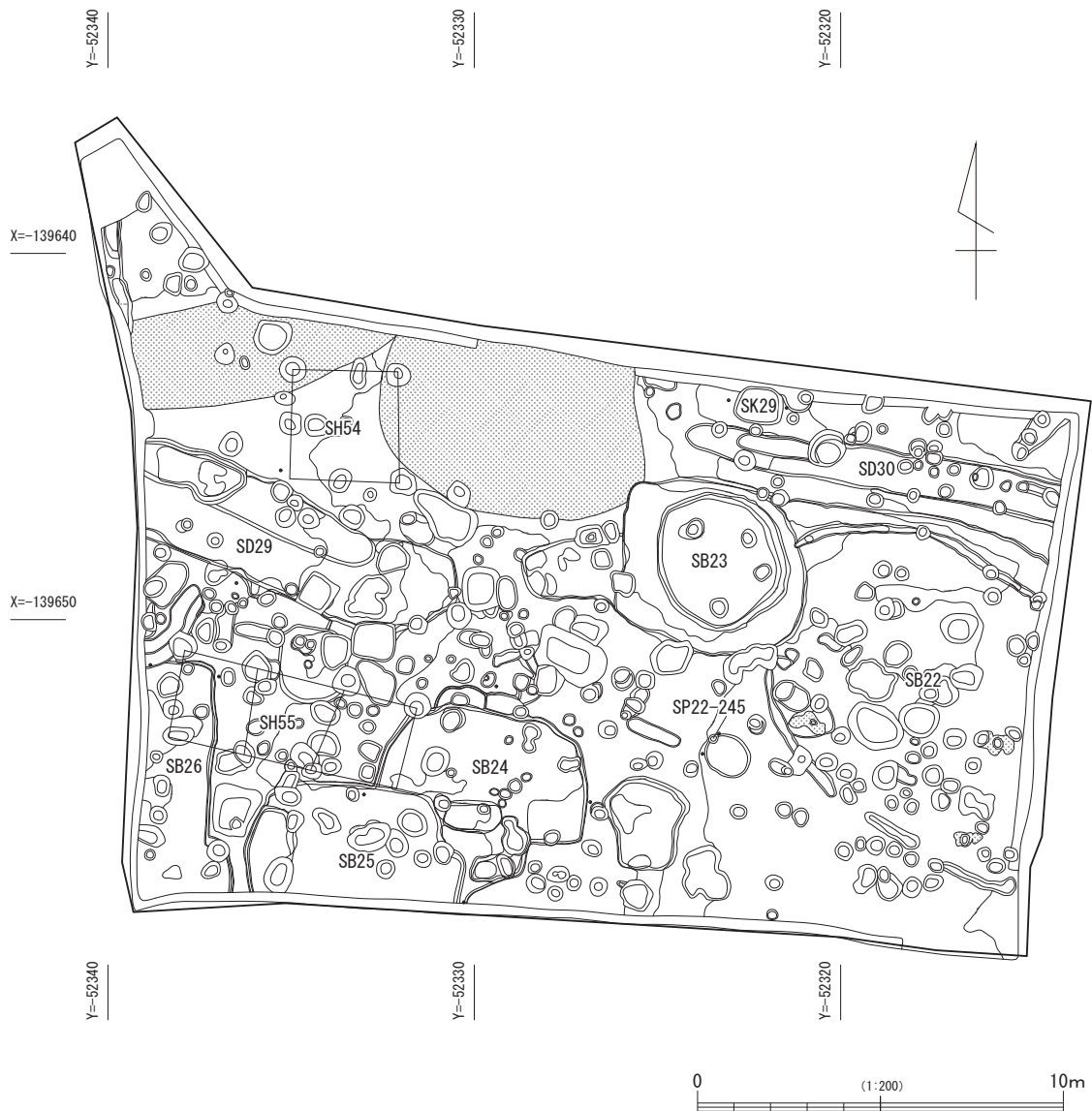


図 63. 第22次調査区全体図 (1:300)

9-1. 弥生時代の遺構・遺物

S B 24 (図 64)

南西側を古墳時代のSB25と切り合い、南東側では掘り込みがきわめて浅い状況となっている。平面形は東西にやや長い楕円形と見られる。長軸 5.96 m、推定短軸 5.53 mを測る。4基の柱穴と見られるピットが確認できる。弥生時代中期後葉白岩式の土器片が出土しているが、図示できるものはない。

S B 22 (図 65)

平面形は南北に約 45 度傾いた長楕円形で、4基の柱穴は南北方向を意識していると思われる。東側が調査区外に伸びるため長軸は推定となるが、9.53 mと見られ、短軸 5.27 mを測る。壁溝と柱穴のみで、掘り方や貼床、炉跡は確認できなかった。壁溝の幅は 0.42 mである。四本柱が四角形に配置されている。弥生時代後期菊川式とみられる壺体部破片ほか細片ばかりで、図示できるものはない。

S B 23 (図 65)

東側がSB22と重複している竪穴住居。平面形は不整形で、4基の柱穴は四角形には並ばない。また、柱穴の付近は一段浅く掘りくぼめられているのが確認された。壁溝は無く、掘り方と柱穴のみで、貼床や炉跡は確認できなかった。弥生時代後期菊川式の羽状文をもつ破片の出土があるが、細片ばかりで図示できるものはない。

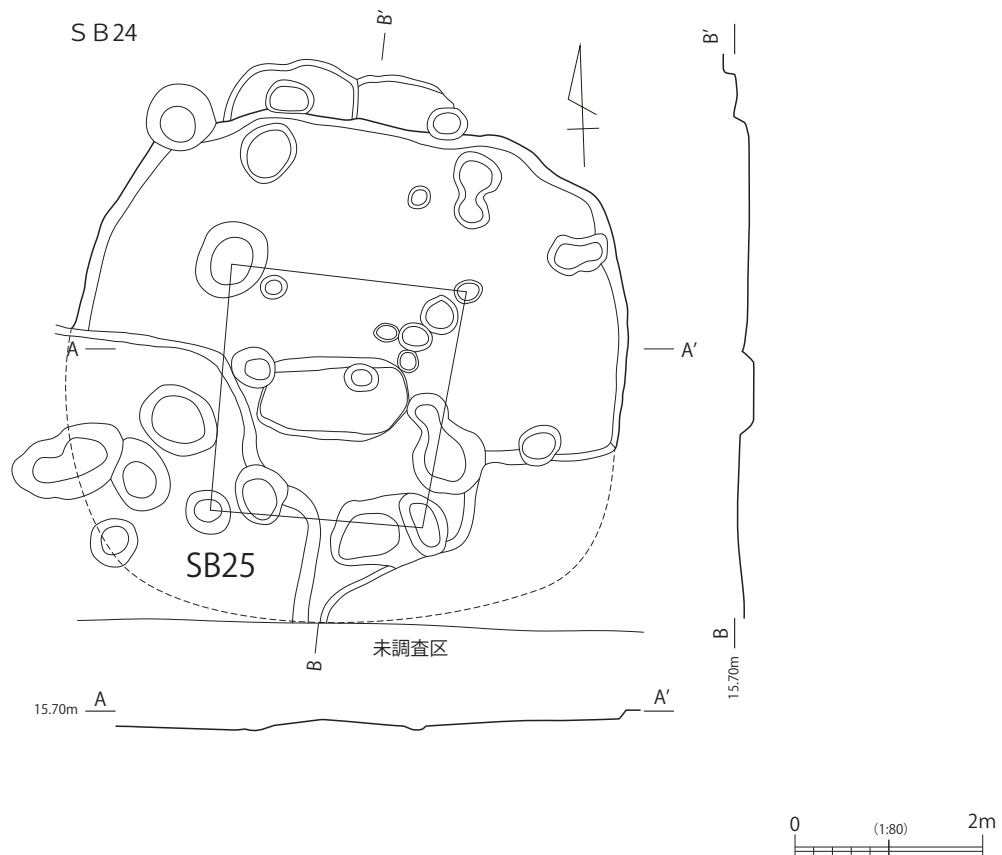


図 64. 第 22 次調査区 S B 24

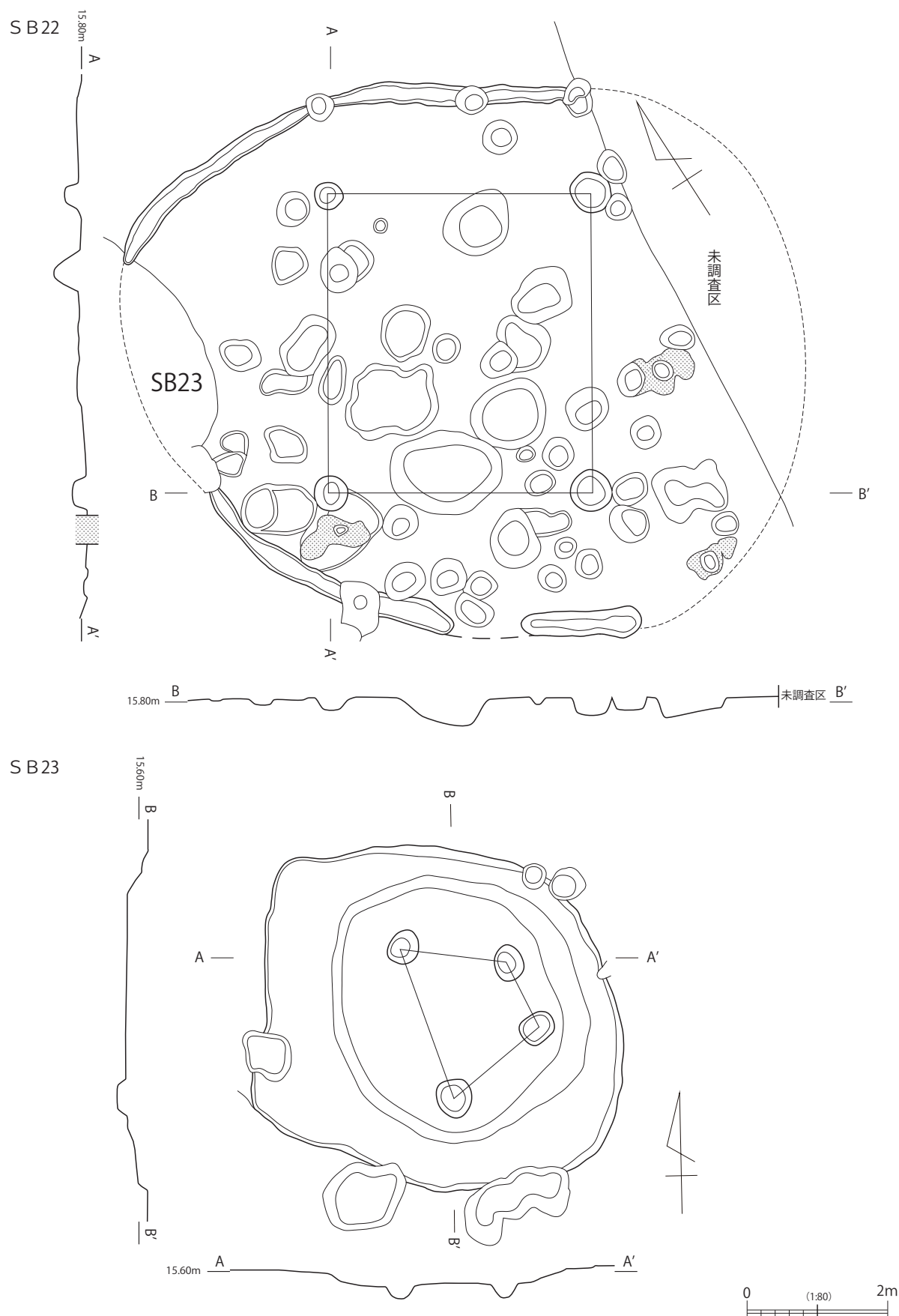


図 65. 第 22 次調査区 S B 22・23

SH54 (図 66)

梁間1間、桁行1間の建物で、遺構主軸はN-8°-Eである。遺構規模は梁行3.06m、桁行3.06mを測り、柱間は2.1m、柱穴径0.68m、深さ0.25～0.51mである。柱穴から弥生土器の細片のみの出土で図示できるものはない。

SH55 (図 67)

梁間3間、桁行1間の建物で、遺構主軸はN-28°-Wである。遺構規模は梁行6.72m、桁行2.38mを測り、柱間は1.6m、柱穴径0.42～0.85m、深さ0.34～0.51mである。柱穴からは弥生時代後期菊川式の折り返し口縁の破片が出土している。

SD29 (図 67)

SH54とSH55の中間で確認された遺構で、複数のピットと重複し、東側はやや北方向に屈曲し、西側は調査区外に延びており全長は不明である。確認長は8.8m、幅2.8m、深さ0.25mを測る。弥生時代中期後葉白岩式の土器の出土がある。また、方形周溝墓の周溝とも考えられるが、調査区周辺が未調査のため、今回は溝として取り扱う。

SK29 (図 68)

SD30北側で確認された土坑で、東西長1.3m、南北長0.95m、深さ0.12mを測る隅丸台形上の平面を呈する。覆土中より弥生時代後期菊川式の土器片が東側にまとまって出土した。

SP22-245 (図 68)

SB22、23の南西側で確認されたピットで、長径0.29m、短径0.3m、深さ0.29mを測る。楕円形の平面を呈する。覆土中から弥生時代中期中葉嶺田式の壺口縁部が出土した。

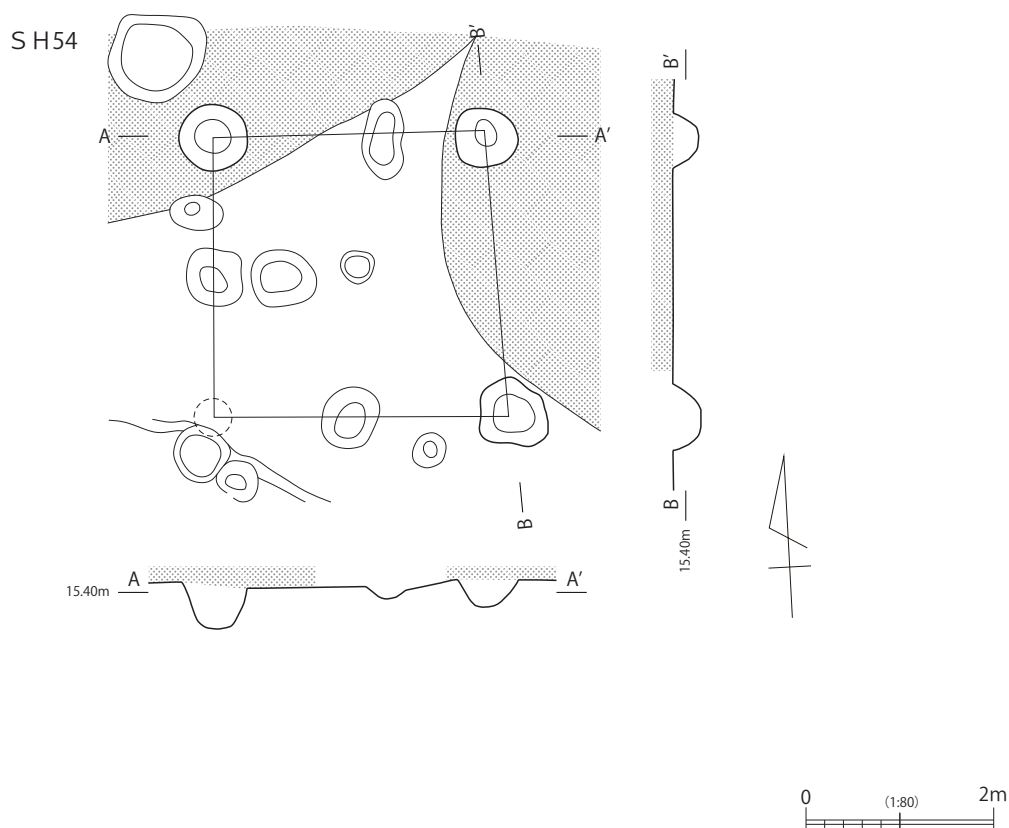


図 66. 第22次調査区 SH54

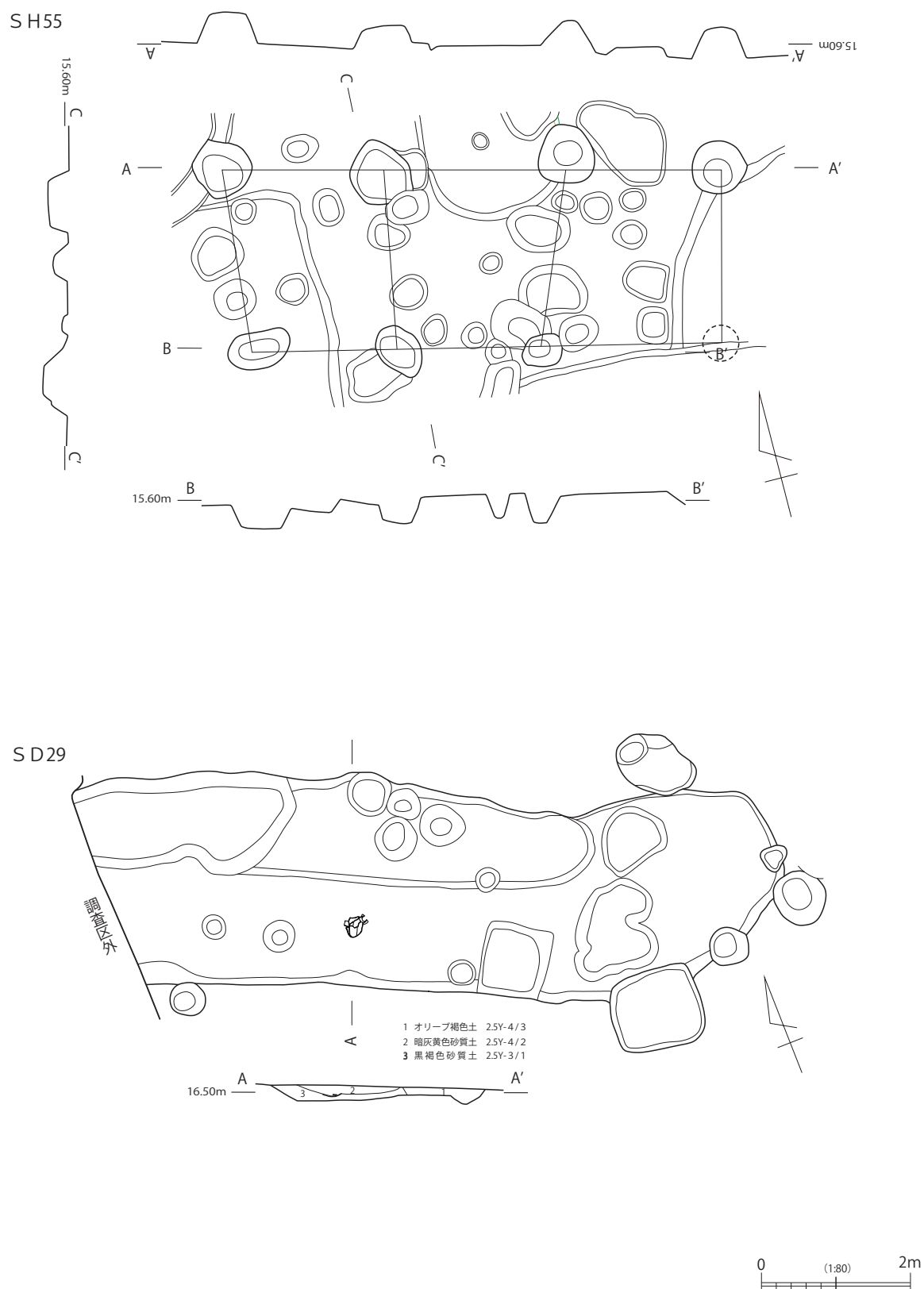


図 67. 第 22 次調査区 SH 55 SD 29

9-2. 古墳時代の遺構・遺物

S B 25 (図 68)

調査区南西側で確認された竪穴住居で、北東側で弥生時代のSB24と重複し、南側が調査区外へと延びる。東西長5.4m、確認できる南北長3.1m、深さ0.16mを測り、胴張型の隅丸方形となる平面形を呈する。掘り方、貼床は確認できない。また、カマドは東壁中程が他時代遺構が重複し失われている可能性が高い。四本柱の北側2本分が確認されている。柱穴径は0.5～0.8m、深さ0.25mを測る。覆土から古墳時代後期とみられる土師器片が出土している。

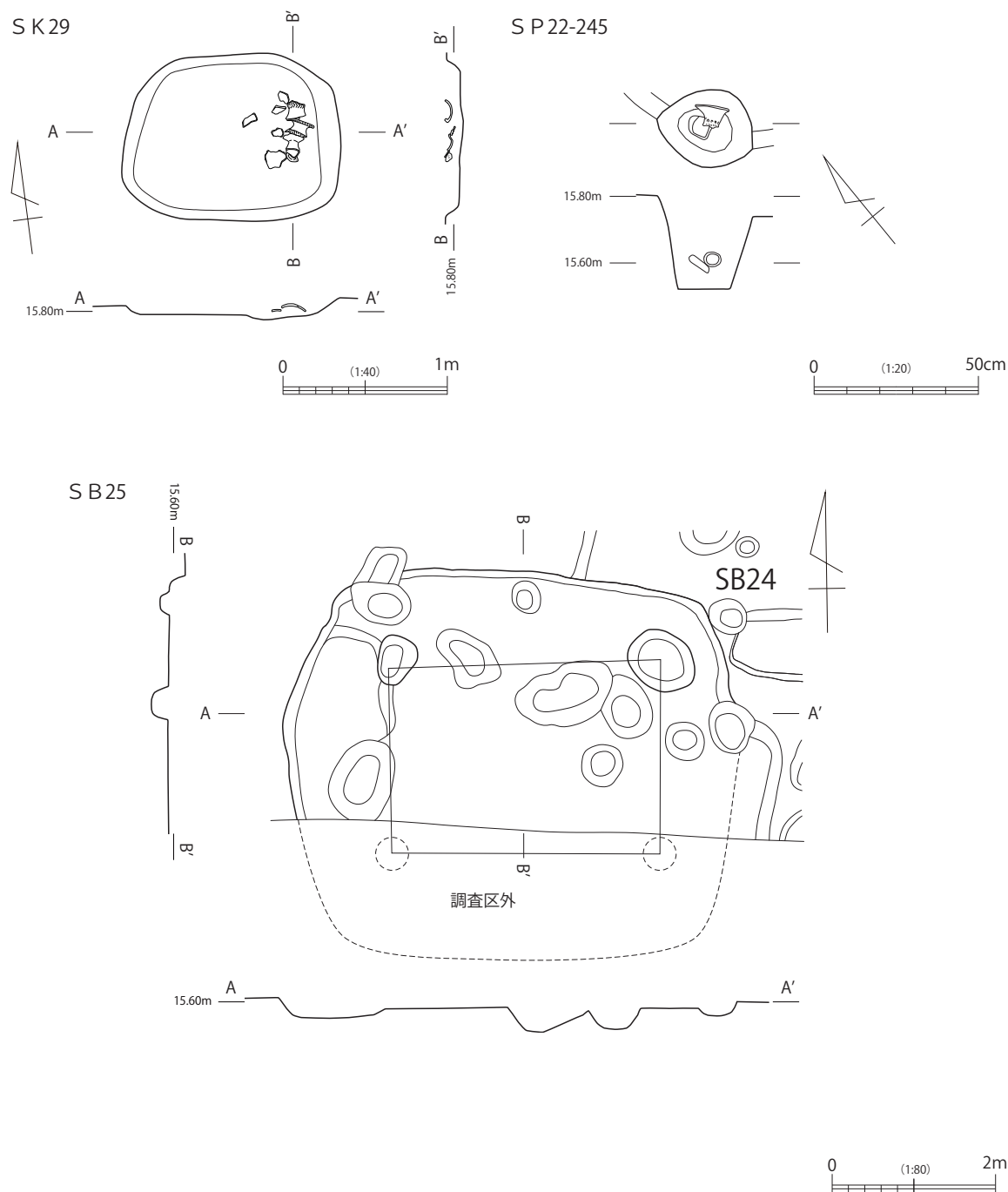


図 68. 第 22 次調査区 S K 29 S P 22-245 S B 25

9-3. 奈良時代遺以降の遺構・遺物

S B 26 (図 69)

調査区南西隅で確認された竪穴住居。北東側で弥生時代の SH55、南側は他時期遺構と重複し、西側が調査区外へと延びる。確認できる東西長 9.6 m、推定南北長 5.3 m、深さ 0.16 m を測る隅丸方形となる平面形を呈する。カマドは確認できない。四本柱の東側 2 本分が確認されている。柱穴径は 0.5 m、深さ 0.41 m を測る。覆土から灰釉陶器の細片と高台付陶器片あり、奈良時代の遺構と考えられるが、土器は細片のため図示できない。

S D 30 (図 69)

SB22・23 北側で、東西方向に伸びる溝で、東側は調査区外に延びるため全長は不明である。確認された全長は 10.2 m、幅は 1.25 m を測る。覆土中から山茶碗底部片が出土している。

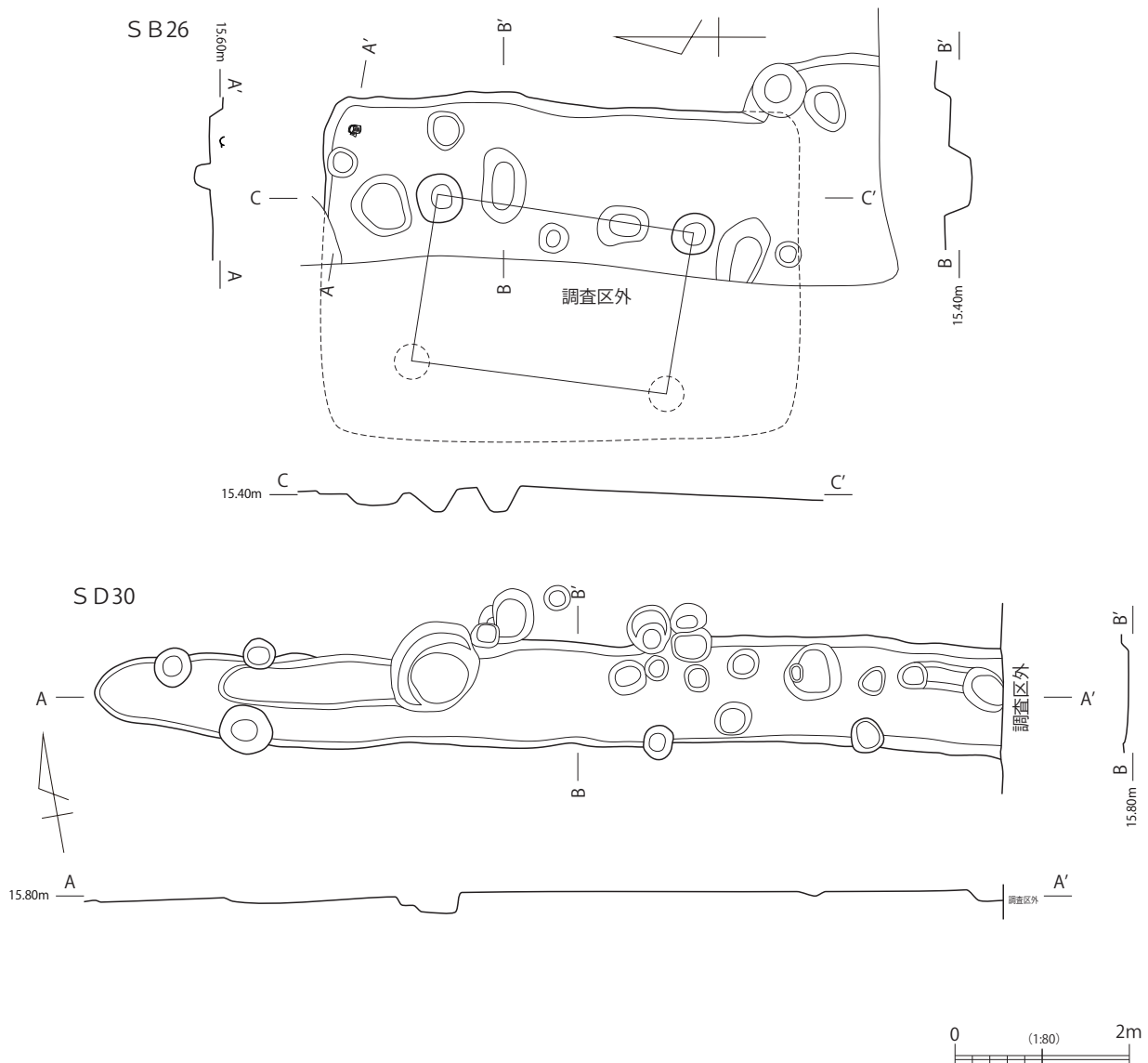


図 69. 第 22 次調査区 S B 26 S D 30

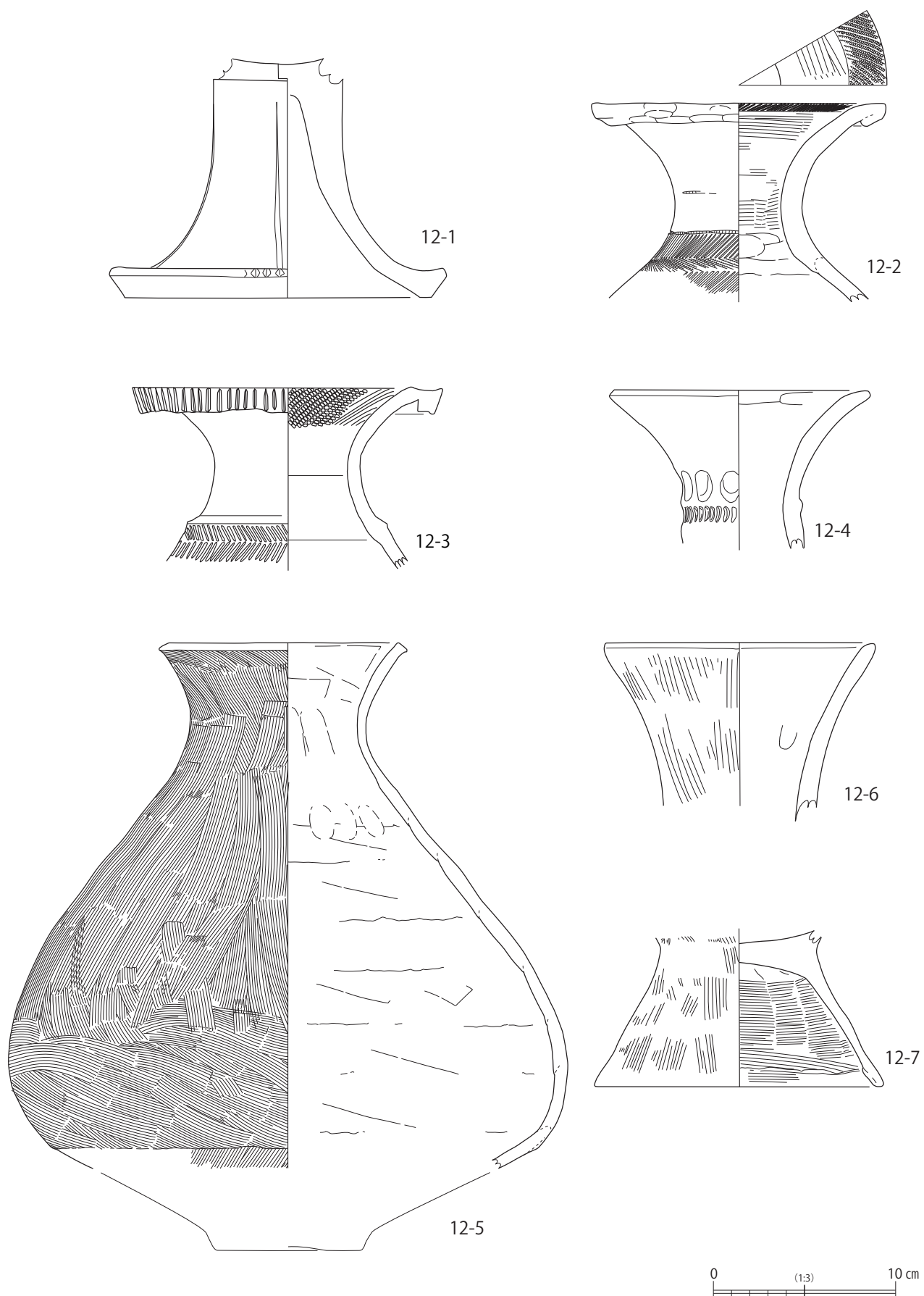


図 70. 第 22 次調査区 遺物実測図

10 節 第23次調査

第23次調査区は大門遺跡の南西部に位置し、調査時期は令和2年5月～8月、面積は680 m²である。東側は第17次調査区、西北側は第28次調査区、北側は第27次調査区と接する。

基本層序は概ね以下の通りである。

- I 層 黄褐色土 表土
- II 層 褐色土 遺物包含層
- III 層 明黄褐色土 地山 遺構確認面

III層にて遺構を確認するまでに、表土を0.3～0.7 m除去した。遺構確認面の標高は13.2～14.9 mで、北東から南西方向にかけてゆるやかに傾斜をする。弥生時代の竪穴住居2棟、掘立柱建物2棟、溝、土坑のほか、古墳時代以降の竪穴住居2棟、溝、土坑やピットを検出した。



図 71. 第23次調査区全体図 (1:300)

10-1. 弥生時代の遺構・遺物

S H56 (図 72)

梁間1間、桁行1間の建物。遺構主軸はN-15°-Eである。遺構規模は梁行3.2m、桁行2.5mを測り、柱間は1.98～2.47m、柱穴径0.51～0.68m、深さ0.17～0.26mである。各柱穴から弥生土器片が出土するが細片で図示できない。

S H57 (図 72)

調査区西北側、SH56南側で確認された遺構で、梁間1間、桁行1間の建物。遺構主軸はN-22°-Eである。遺構規模は梁行4.6m、桁3.4mを測り、柱間は2.13～3.40m、柱穴径0.94～1.36m、深さ0.17～0.34mである。柱穴からは弥生時代中期白岩式の土器片とともに弥生時代後期菊川式の土器片が出土している。

S H58 (図 73)

調査区西側中央部で確認された遺構で、梁間1間、桁行1間の建物。遺構主軸はN-30°-Eである。遺構規模は梁行3.7m、桁4.0mを測り、柱間は2.89～3.06m、柱穴径0.77～0.93m、深さ0.17～0.34mである。柱穴から弥生土器片が出土するが細片のため図示できない。

S K30 (図 73)

調査区北東側中央付近で確認された土坑で、長径1.96m、短径1.13m、深さ0.16mの長楕円形の土坑である。北西側の柱穴を他の遺構に切られている。覆土中から弥生時代後期菊川式の壺、高坏、小型壺、台付甕片が出土している。

S K31 (図 73)

調査区北東側で、SH56とSH57に中間地点にSK32に並んで西側で確認された土坑で、中央部に焼土が確認された。南側の溝、北東側にSH56の柱穴と近接する。長径4.7m、短径2.8m、深さ0.64mを測る不整形な土坑である。弥生土器片出土するが細片のため図示できない。

S K32 (図 74)

調査区北東側で、SH56とSH57に中間にあるSK31の東側で確認された土坑で、長径3.4m、短径2.4m、深さ0.14mを測る楕円形で、長軸の中央部がややへこむ土坑である。土塊4点とともに、弥生土器片出土するが細片のため図示できない。

S K33 (図 74)

調査区南側で確認され、一部が第17次調査区へとおよぶ土坑で、長径3.5m、短径2.0m、深さ0.30mを測る不整形な楕円形な土坑である。覆土中からは、炭化物とともに弥生時代中期後葉白岩式の土器片多数と磨製石斧が出土している。

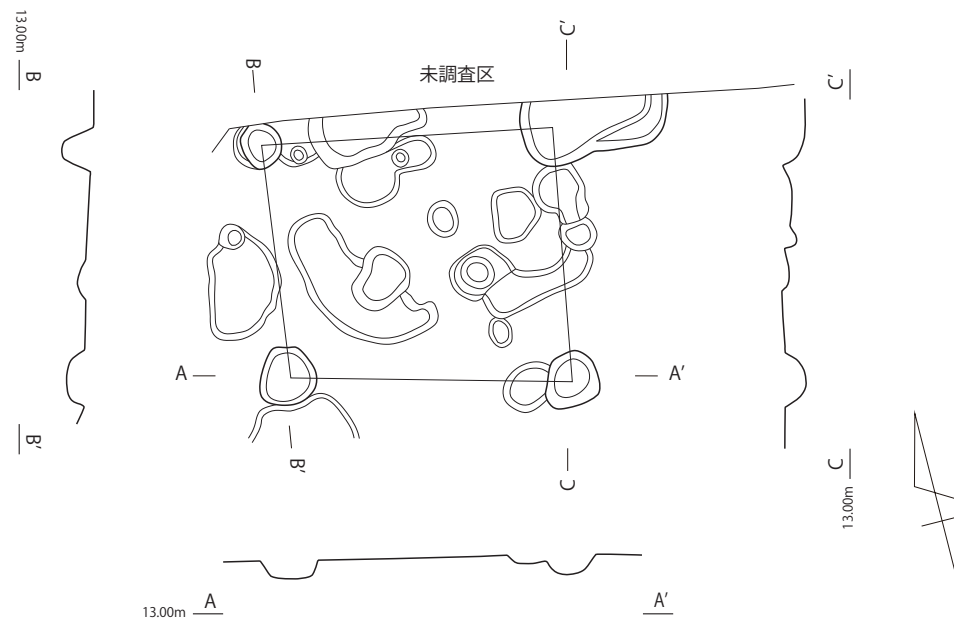
S K34 (図 74)

調査区中央部北側で確認された土坑で、第27次調査区へとおよぶSZ4西周溝や北側のピットと重複し、短径1.2m、深さ0.13mを測る不整形な土坑である。土坑中央部の覆土中からは、弥生時代後期菊川式の壺が出土している。

S K35 (図 74)

調査区中央部北側で確認された土坑で、SK34同様に第27次調査区へとおよぶSZ4西周溝や東側のピットと重複し、形状が不明な土坑で、長径1.7m、短径1.1m、深さ0.29mを測る不整形な土坑である。土坑中央部の覆土中からは、弥生時代後期菊川式の壺が出土している。

S H56



S H57

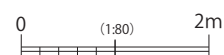
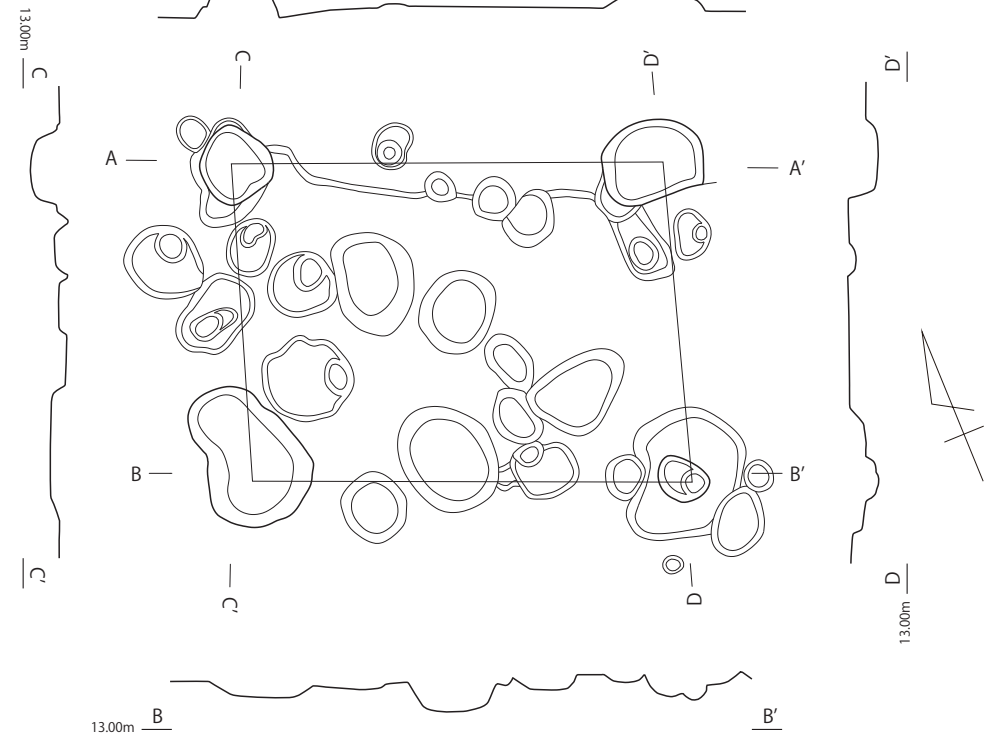


図 72. 第 23 次調査区 S H 56 ・ 57

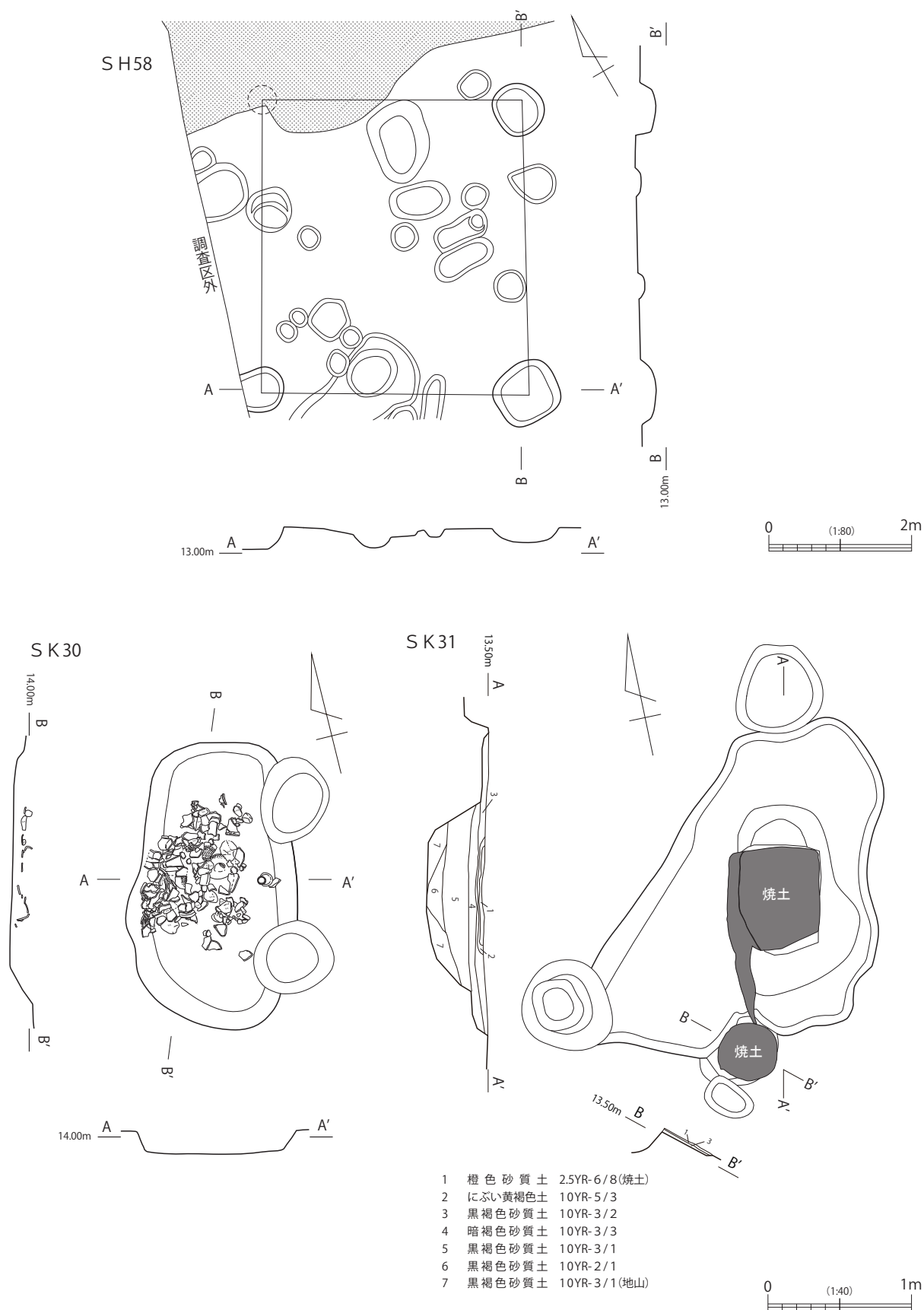


図 73. 第 23 次調査区 SH 58 SK 30・31

S D 31 (図 79)

調査区南側の SB28 の中ほどを南北に分断するような場所で確認された西北から東南方向への溝で、西側は土坑状掘り込みと重複し、SK33 に向けてやや湾曲している。確認全長は 5.0 m、幅 0.93 m、深さ 0.16 m を測る。覆土中からは弥生時代中期後葉白岩式の土器片が出土している。

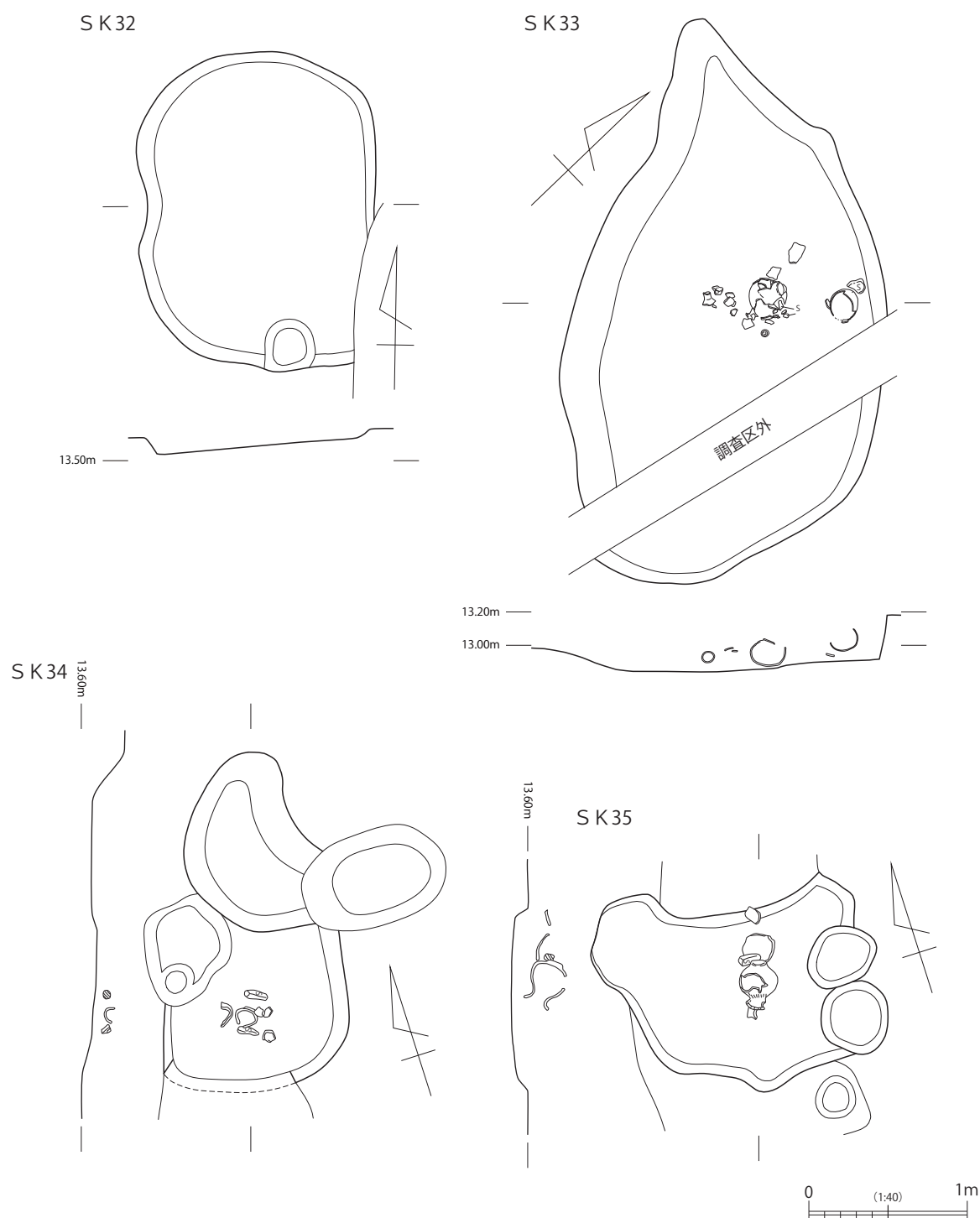


図 74. 第 23 次調査区 SK 32 ～ 35

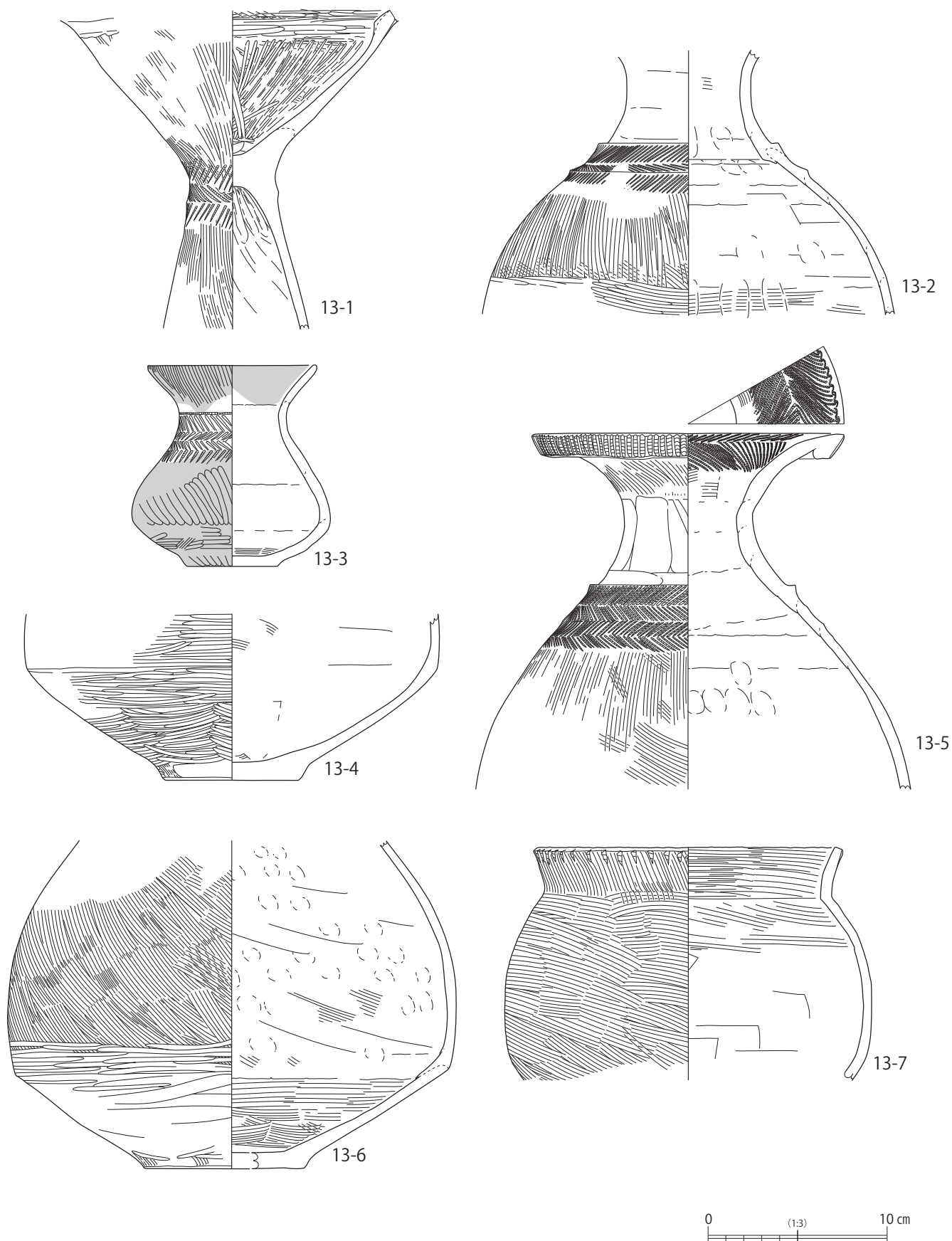


図 75. 第 23 次調査区 遺物実測図 1

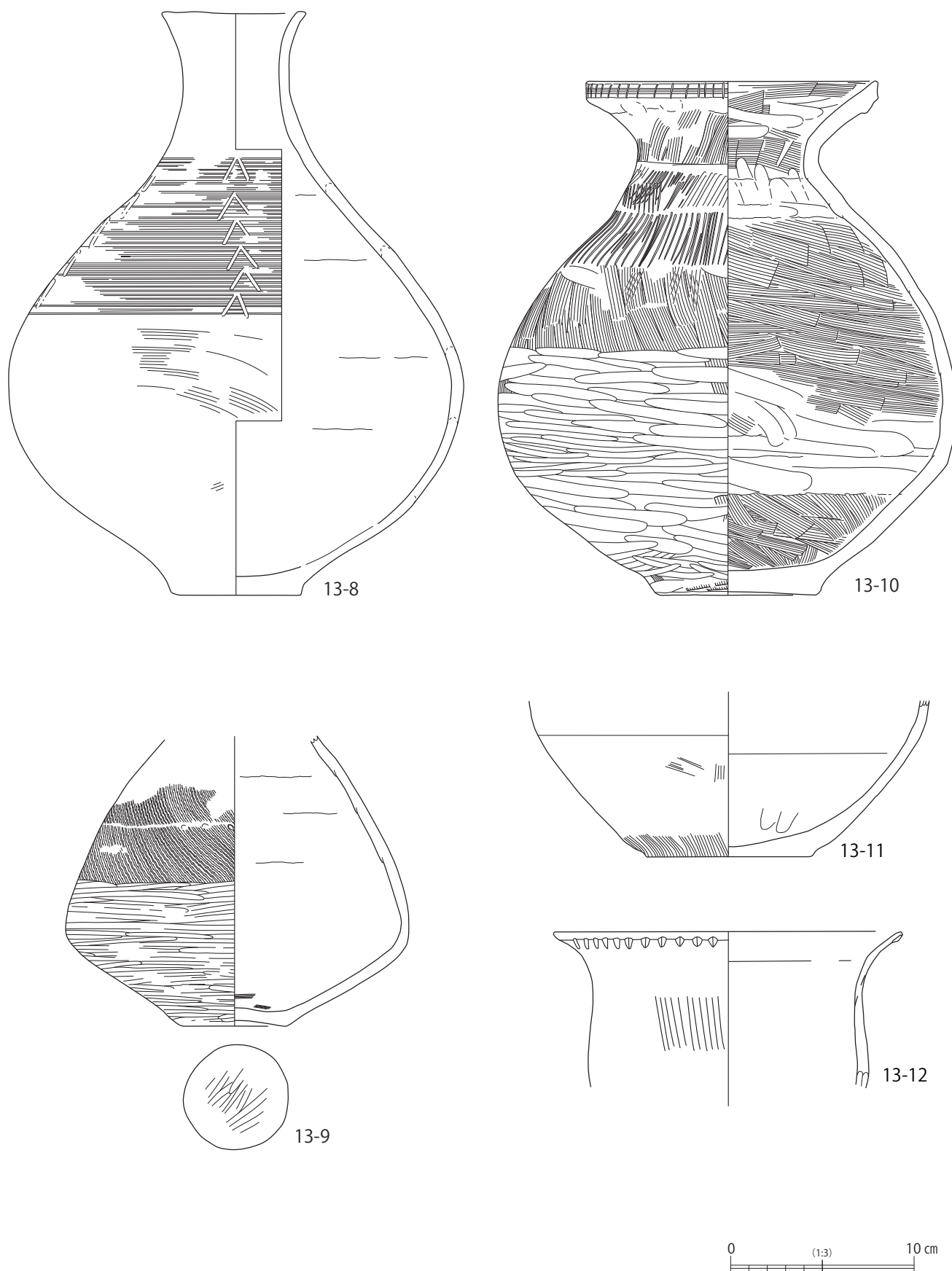


図 76. 第 23 次調査区 遺物実測図 2

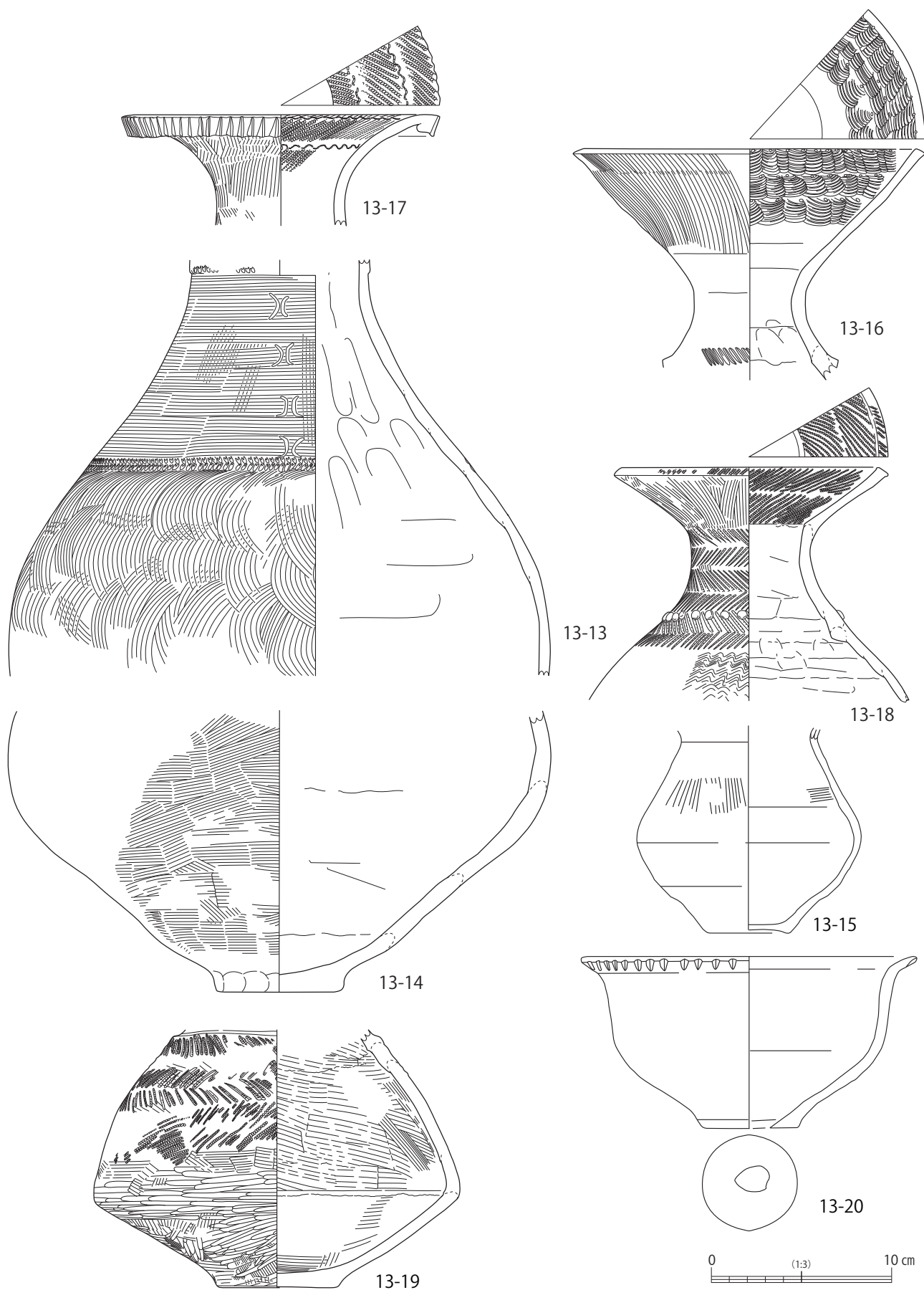


図 77. 第 23 次調査区 遺物実測図 3

10-2. 古墳時代の遺構・遺物

S B 27 (図 78)

調査区北東側で確認された竪穴住居で、平面形は隅丸長方形で柱穴や掘り方、貼床は確認できない。東壁のやや南側にカマド跡が確認されている。長軸 4.42 m、短軸 3.57 m、深さ 0.17 m を測る。カマド跡は東西方向の長楕円形で、長軸 1.70 m、短軸 0.68 m を測る。焚口や煙道等は損壊しており、住居廃棄時に解体した可能性が高い。覆土からは土師器や須恵器片が出土している。

S B 28 (図 79)

調査区南西側で確認された竪穴住居で、平面形は隅丸長方形で、カマドや掘り方、貼床は確認できない。重複している弥生時代の SD31 以南で連続するはずの遺構が確認できない。また、西側も調査区外におよぶため確認できていない。推定南北幅 6.81 m、推定東西幅 7.23 m、深さ 0.13 m を測る。柱穴は北東側のみ確認できないが、四本柱が四角形に配されている。覆土からは須恵器片が出土している。

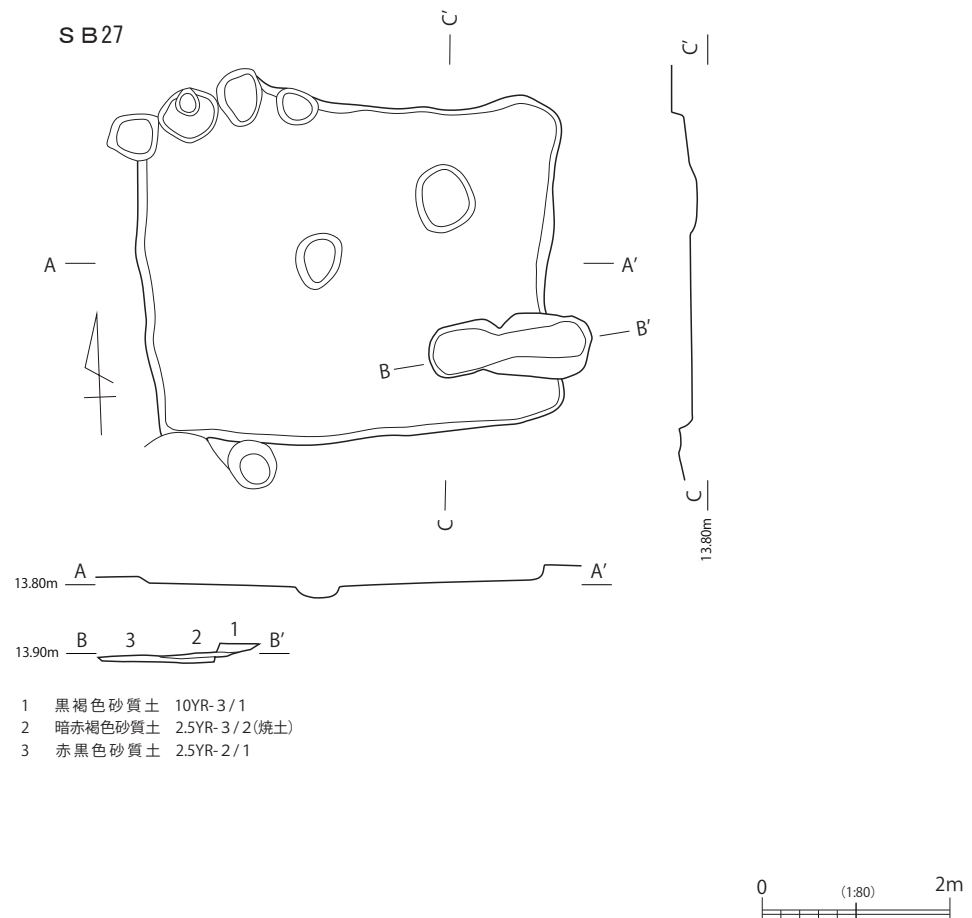


図 78. 第 23 次調査区 S B 27

S B28 · S D31

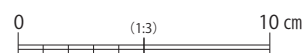
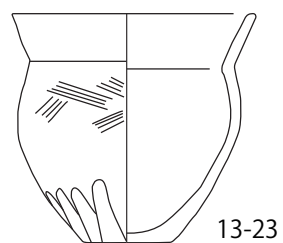
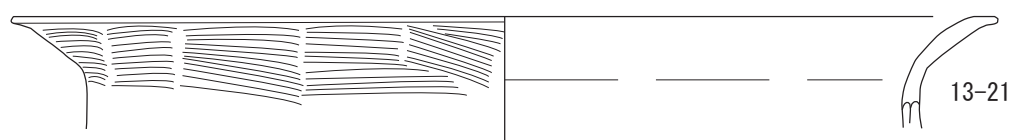
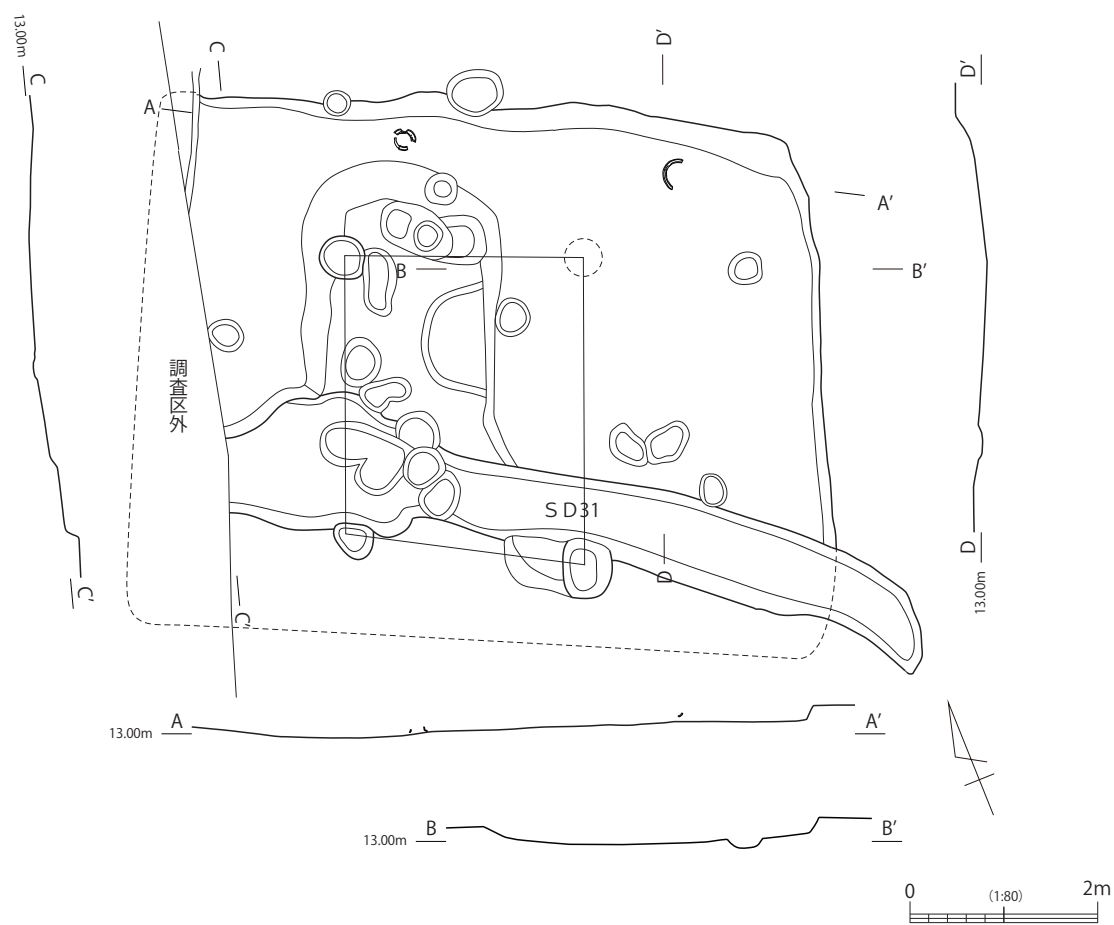


図 79. 第 23 次調査区 S B 28 S D 31 遺物実測図 4

11 節 第24調査区

第24次調査区は大門遺跡の南西部に位置し、調査時期は令和2年6月～10月、面積は680㎡である。西側は第27次調査区、南側は第19次調査区と接する。

基本層序は概ね以下の通りである。

- I 層 黄褐色土 表土
- II 層 褐色土 遺物包含層
- III 層 明黄褐色土 地山 遺構確認面

III層にて遺構を確認するまでに、表土を0.3～0.7m除去した。遺構確認面の標高は13.2～14.9mで、北東から南西方向にかけてゆるやかに傾斜をする。弥生時代の竪穴住居2棟、掘立柱建物2棟、溝、土坑のほか、古墳時代以降の竪穴住居2棟、溝、土坑やピットを検出した。



図 80. 第24次調査区全体図 (1:200)

11-1. 弥生時代の遺構・遺物

S B 29 (図 81)

平面形は円形と見られ、1度の建て直しが行われ、北側から西側に立て直し時の拡張痕が残る。西北側で若干近代の溝と切り合うが依存状態は良好である。内側は歪であるが南北幅 7.65 m、東西幅 6.97 m、深さ 0.16 mで、外側は南北幅 8.51 m、東西幅 8.25 m、深さ 0.14 mを測る。壁溝や掘り方や貼床は確認できない。四本柱中央部に若干の焼土が確認できるため、中央部に炉が設けられていたと考えられるが確認できない。弥生時代後期菊川式の土器片が出土しているが、細片ばかりで図示できるものはない。

S B 30 (図 81)

平面形は隅丸方形と見られ、西側の壁溝が確認されていない。南北幅 4.32 m、東西幅 4.65 mを測る。4基の柱穴の内、北東の柱穴は後の時代の遺構によって失われている。掘り方や貼床は確認できなかった。四本柱中央部に炉跡が残る。弥生時代の土器片が出土しているが、細片ばかりで図示できるものはない。

S B 31 (図 82)

平面形は楕円形と見られ、中央部に S K 3 が重複する。南東側の壁溝が確認されていない。南北幅 3.28 m、東西幅 4.00 mを測る。4基の柱穴の内、南東の柱穴は SK37 によって失われている。掘り方や貼床は確認できなかった。四本柱中央部に炉跡が残るが、こちらも SK37 と重複する。弥生時代の土器片が出土しているが、細片ばかりで図示できるものはない。

S B 32 (図 82)

平面形は楕円形と見られ、中央部は調査区外となる。北西側の壁溝が確認されていない。南北幅 4.60 m、東西幅 5.83 mを測る。4基の柱穴の内、西北側、西南側の柱穴は調査区外のため確認されていない。掘り方や貼床は確認できなかった。炉跡も調査区外のため確認できない。弥生時代の土器片が出土しているが、細片ばかりで図示できるものはない。

S H 59 (図 83)

梁間 2 間、桁行 1 間の建物。遺構主軸は N-2°-W である。遺構規模は梁行 4.25 m、桁行 2.38 mを測り、柱間は 1.61 ~ 2.38 m、柱穴径 0.51 ~ 0.68 m、深さ 0.17 ~ 0.42 mである。各柱穴から弥生土器片が出土するが、細片で図示できない。

S H 60 (図 83)

梁間 1 間、桁行 1 間の建物。遺構主軸は N-8°-E である。遺構規模は梁行 3.83 m、桁行 3.06 mを測り、柱間は 2.46 ~ 2.98 m、柱穴径 0.59 ~ 0.76 m、深さ 0.17 ~ 0.26 mである。各柱穴から弥生土器片が出土するが、細片で図示できない。

S K 36 (図 84)

東側を近世の溝に切られているが、隅丸長方形の平面形を持っていたと考えられる。残存長は 2.11 m、幅 1.24 m、深さ 0.20 mを測る。覆土中からは、炭化物・礫とともに弥生時代中期後葉白岩式の土器片が出土しているが、細片で図示できない。

S K 37 (図 84)

隅丸 L 字形の平面形を持っていたと考えられる。南北長は 2.23 m、東西長 2.18 m、深さ 0.34 mを測る。覆土中からは、礫とともに弥生時代後期菊川式の壺ほか出土しているが、細片で図示できない。

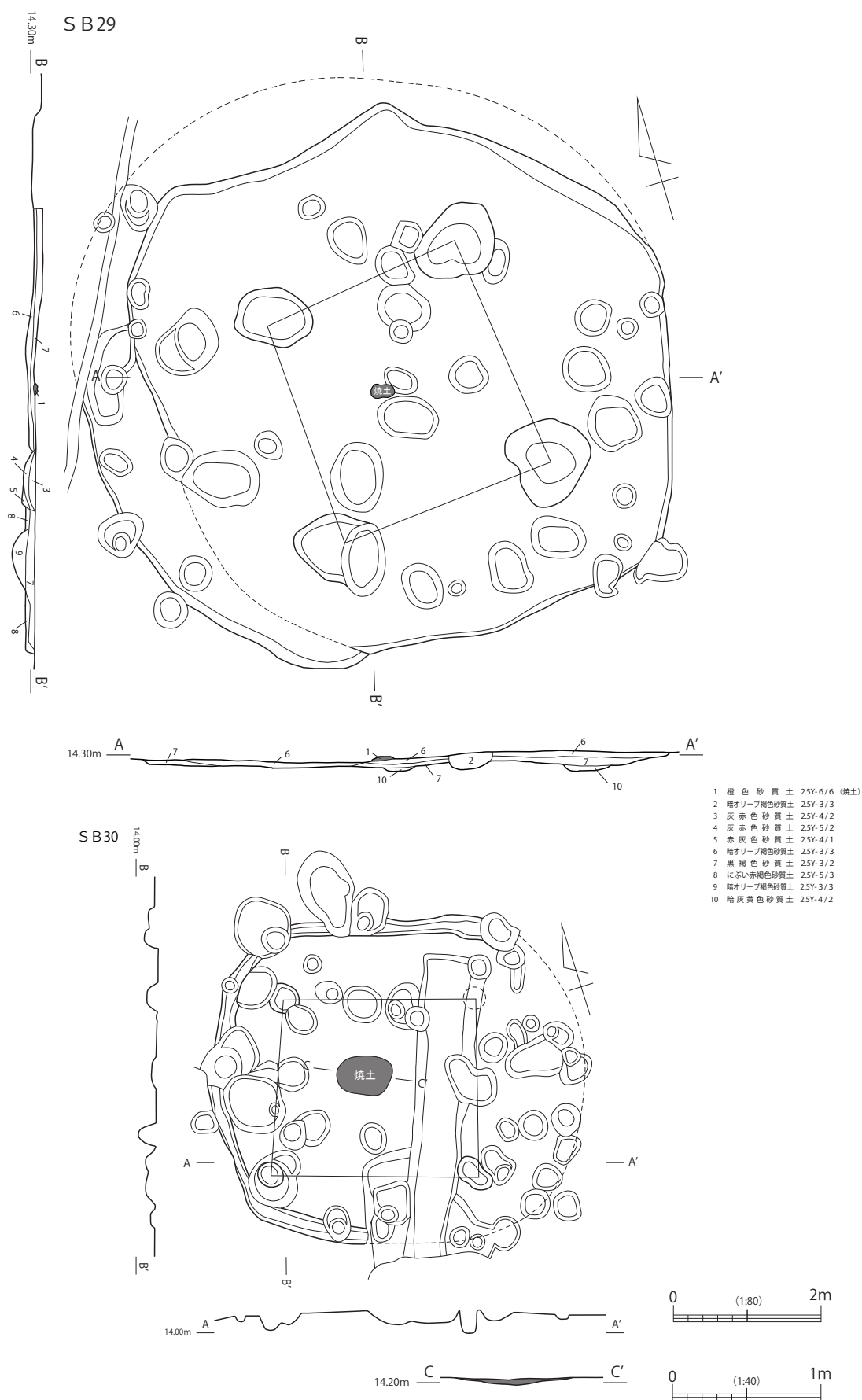


図 81. 第 24 次調査区 SB 29・30

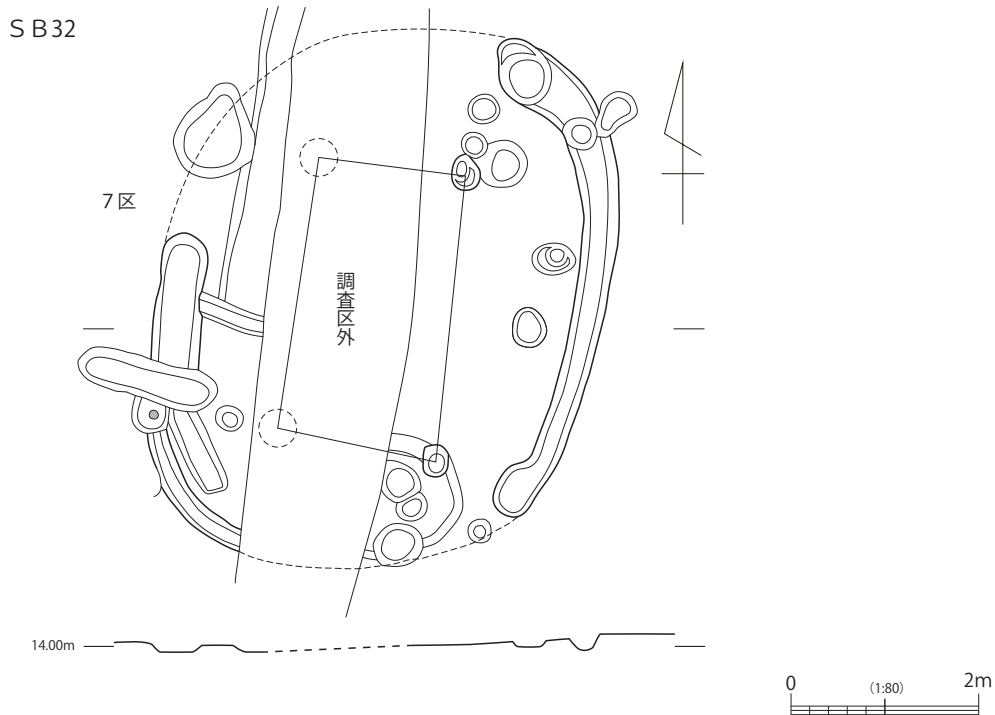
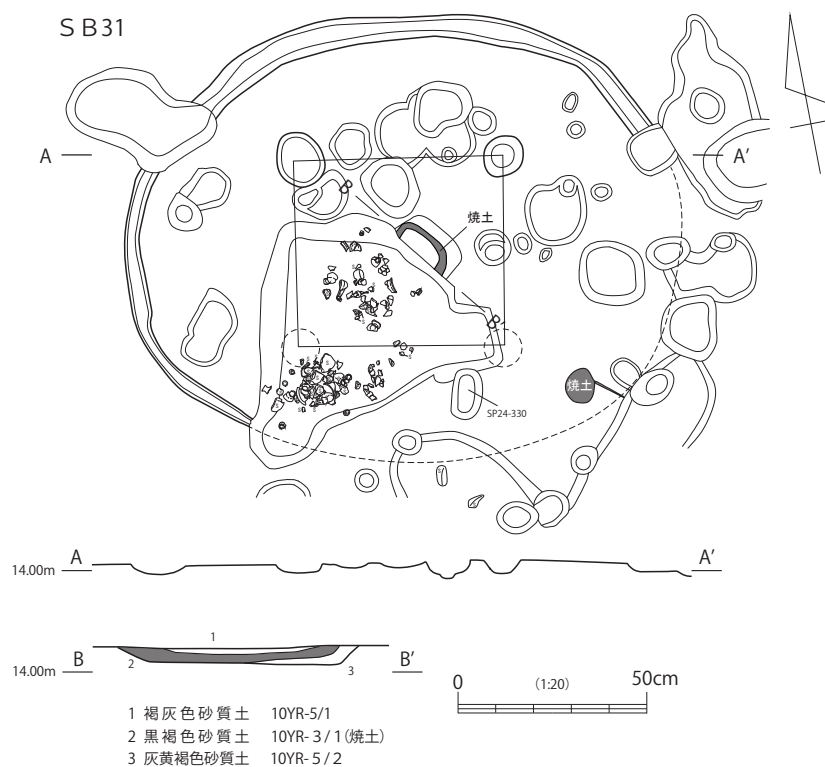


図 82. 第 24 次調査区 SB 31・32

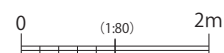
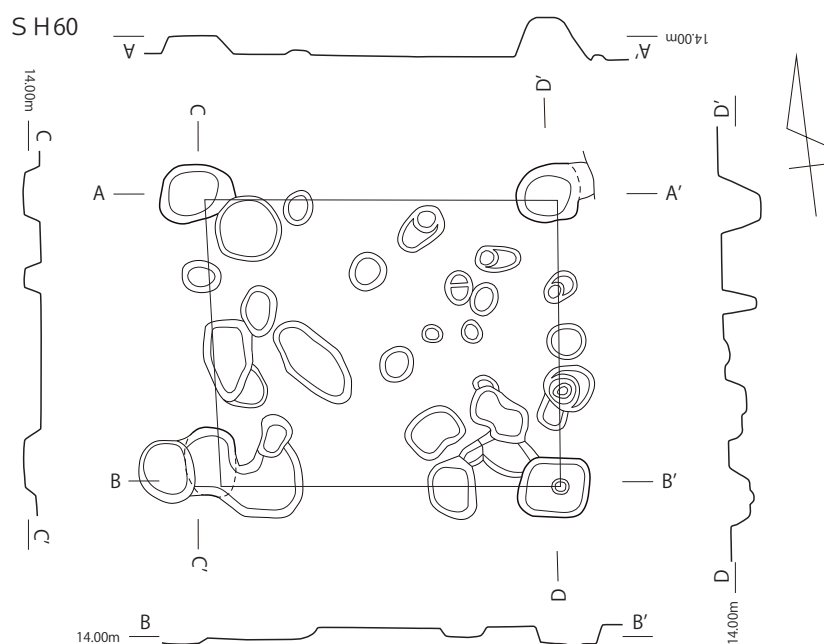
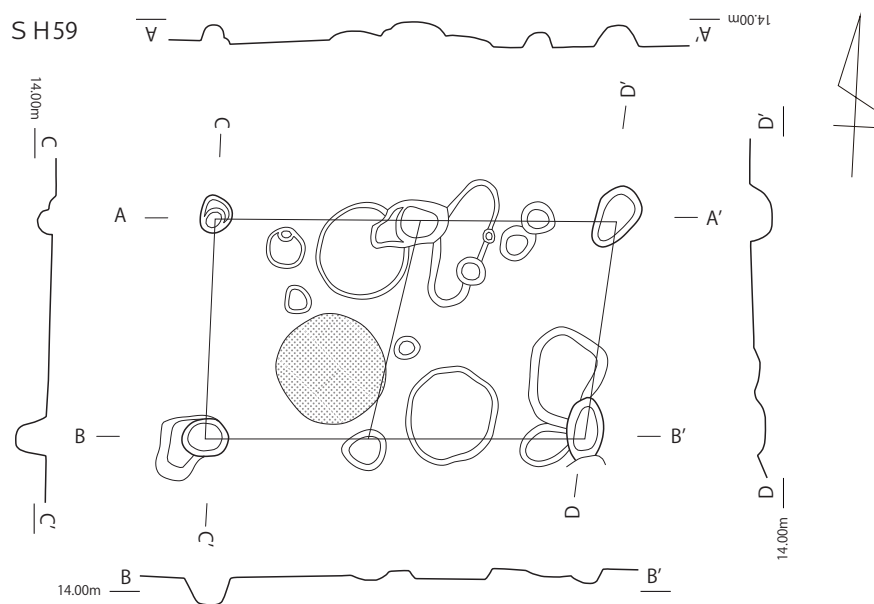


図 83. 第 24 次調査区 SH 59・60

S K 38 (図 84)

S B 31 と重複し、隅丸三角形の平面形を持つと考えられるが、ピットと切り合い正確な形状は不明である。南北長は 2.21 m、残存東西長 2.76 m、深さ 0.19 m を測る。覆土中からは、礫とともに弥生時代後期菊川式の壺ほかが出土している。

S P 24-001・S P 24-330 (図 84)

S P 24-001 は調査区中央部で確認された円形ピットで、弥生時代後期菊川式の壺ほか出土している。また、S P 24-330 は S B 31 内で確認された楕円形ピットで、底部が 2 段となっていることから、2 基のピットである可能性が高い。覆土中からは、磨製石斧が出土している。

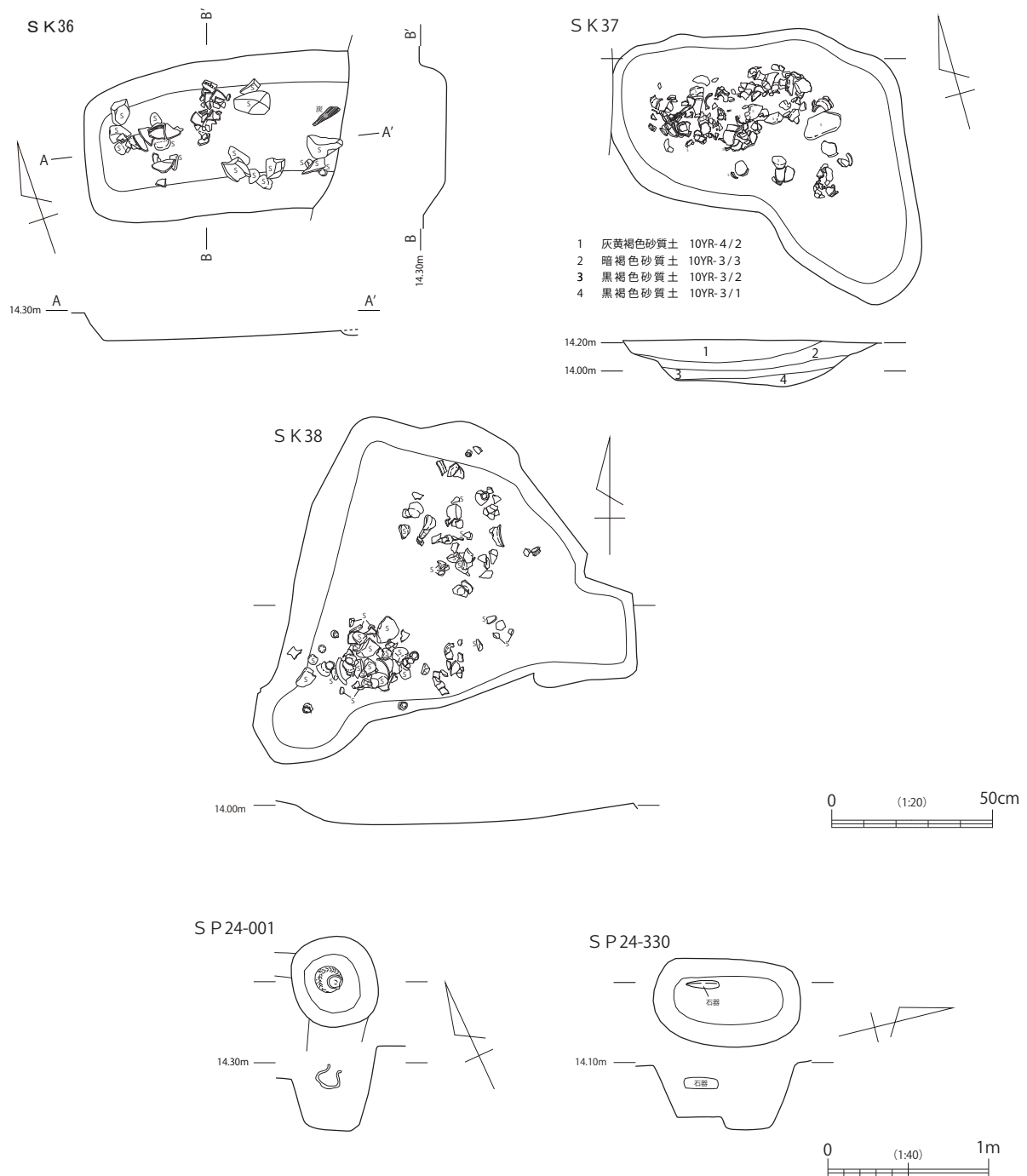


図 84. 第 24 次調査区 S K 36 ~ 38 S P 24-001・24-330

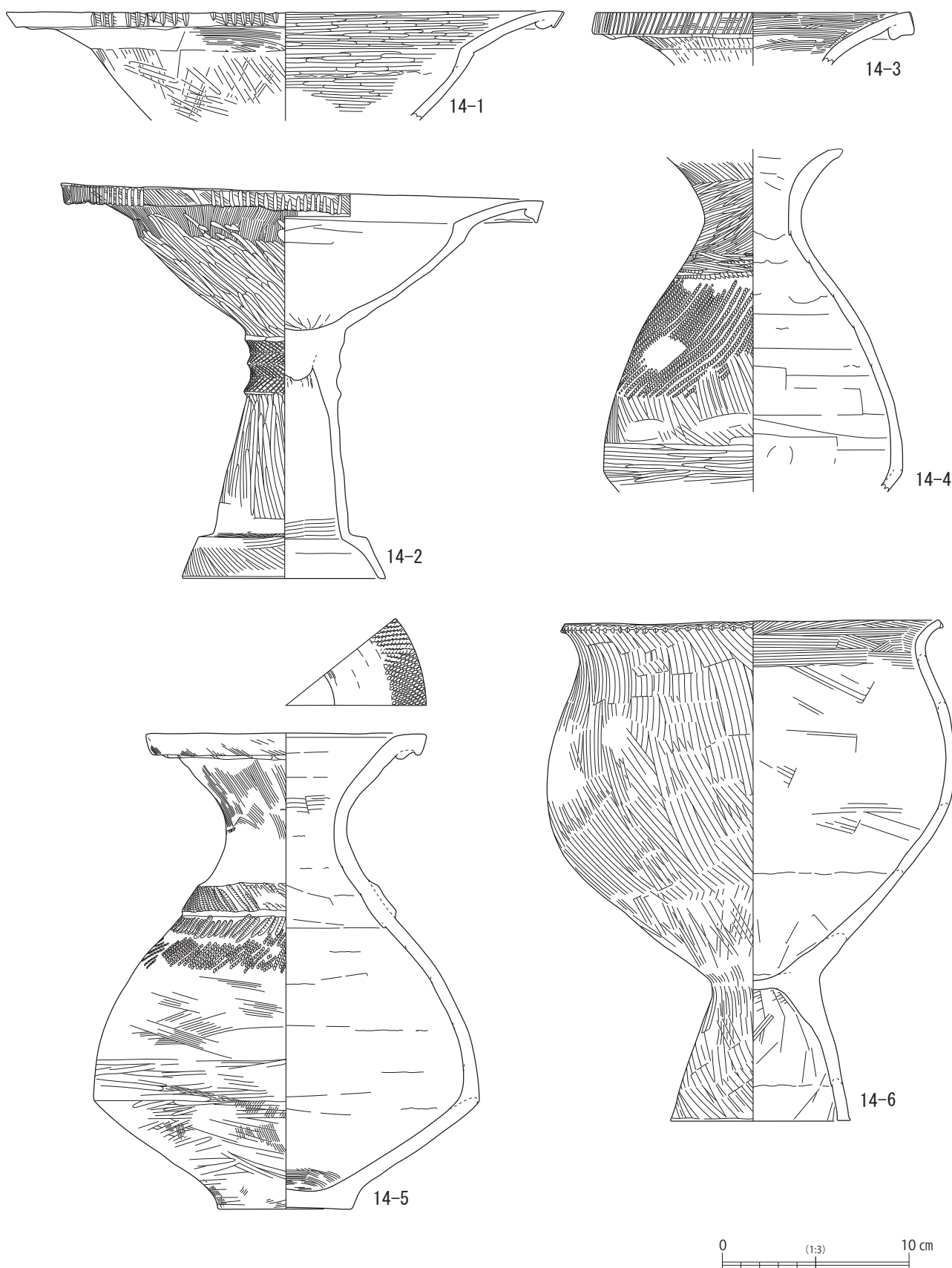


図 85. 第 24 次調査区 遺物実測図 1

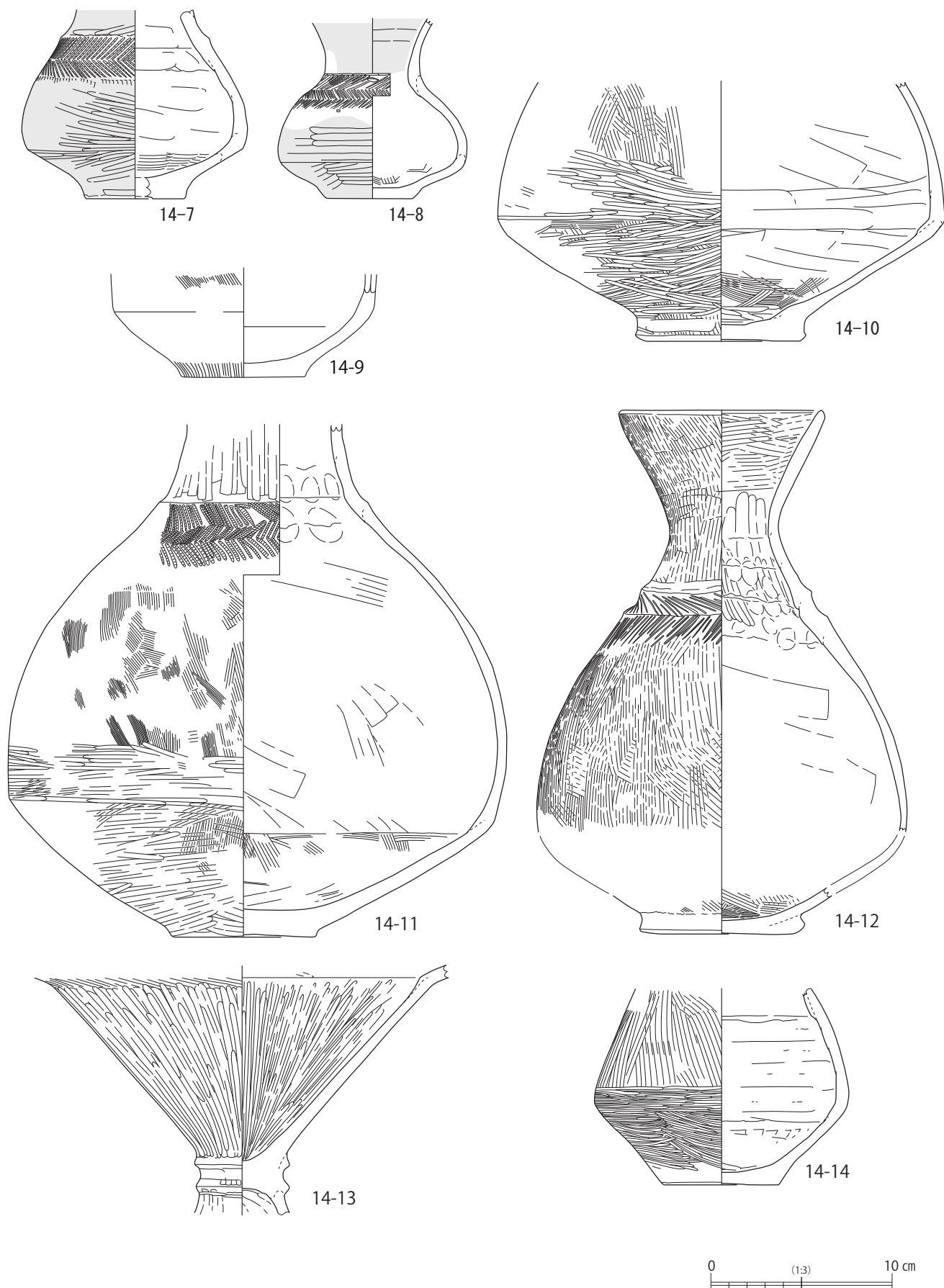


図 86. 第 24 次調査区 遺物実測図 2

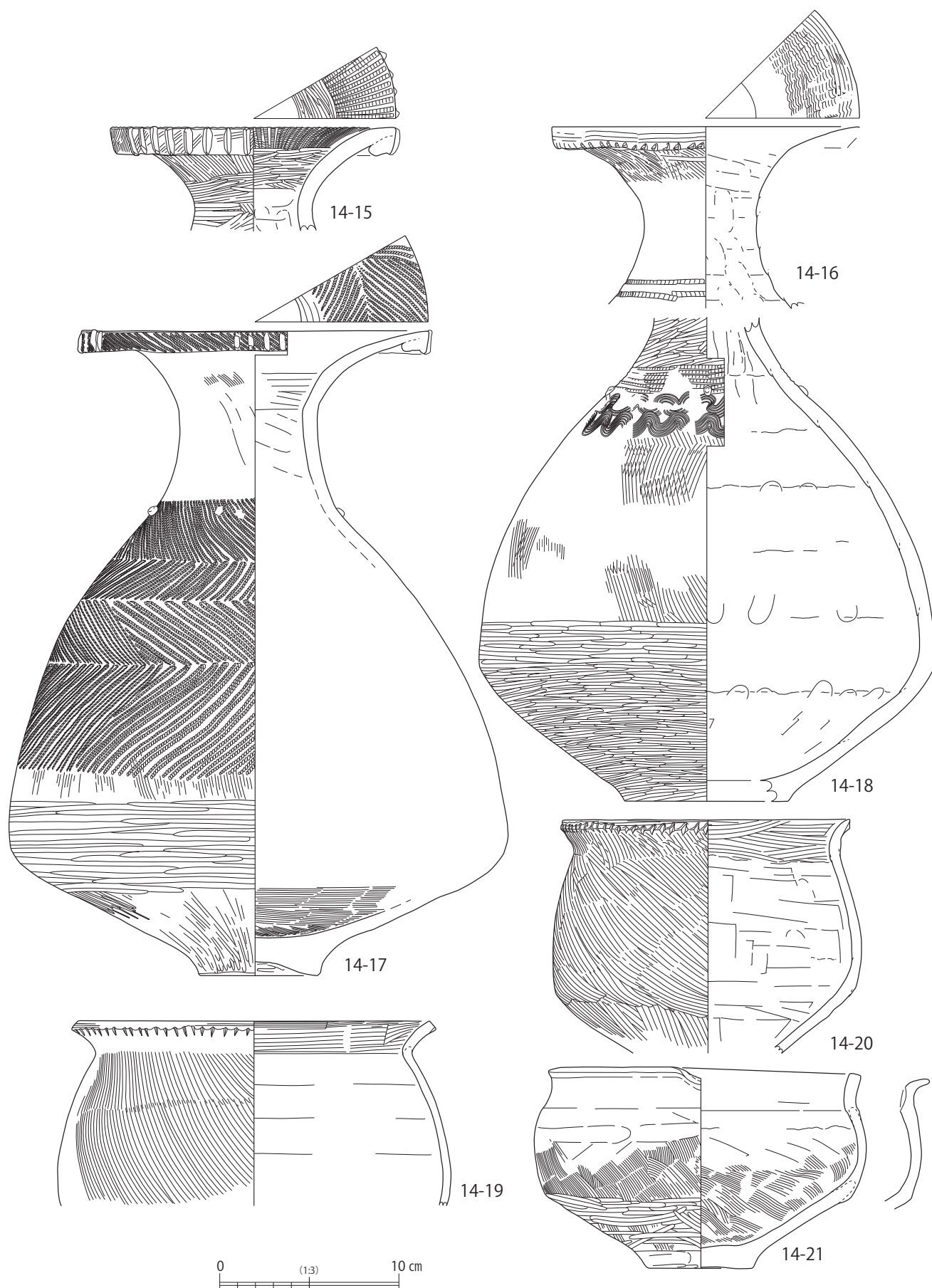


図 87. 第 24 次調査区 遺物実測図 3

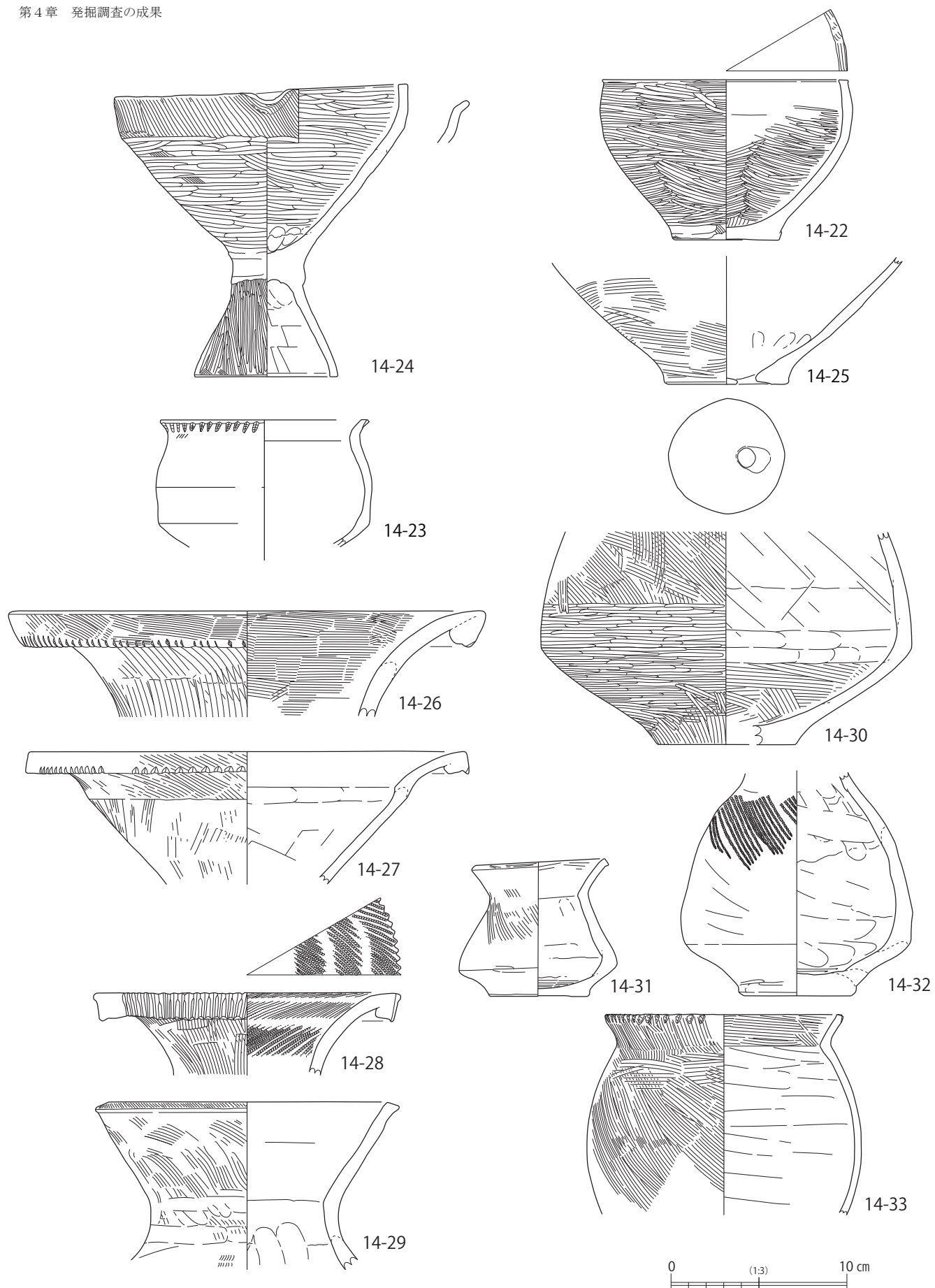


図 88. 第 24 次調査区 遺物実測図 4

12 節 第25次調査区

調査前は田端地区を縦断する南北道が通っていた地区で、面積は382 m²を測る。令和2年8月～11月にかけて発掘調査を実施した。西側には第20次調査区が、南側には第13次調査区、東側には第26次調査区が接合する。

基本層序は概ね以下の通りである。

I 層 黄褐色土 表土

II 層 褐色土 遺物包含層

III 層 明黄褐色土 地山 遺構確認面

III層にて遺構を確認するまでに、表土を0.3～0.7 m除去した。遺構確認面の標高は14.6～14.9 mで、北東から南西方向にかけてゆるやかに傾斜をする。弥生時代の竪穴住居1棟、掘立柱建物2棟、溝、土坑のほか、古墳時代以降の掘立柱建物2棟やピットを検出した。北側に住居跡とそれに伴うと考えられる焼土痕やその周囲の土坑やピットでは、焼土塊や被熱した石なども確認されている。南半は遺構面が礫層に変わるとともに遺構の数が少なくなる。

12-1. 弥生時代の遺構・遺物

S B33 (図90)

平面形は円形に近い楕円形と見られる。柱穴は南北方向を意識していると見られ、北西側及び北側と柱穴1基が調査区外におよぶが依存状態は良好である。南北幅は確認できた幅が4.68 mで、推定幅が5.95 m、東西は確認できた幅が6.97 mで、推定幅7.23 mで、壁溝のみの確認で掘り方や貼床は確認できなかった。また、中央部に炉が設けられていたと考えられるが明確な炉跡は確認できない。南東側で焼土塊であるSX15が確認されている。弥生時代後期菊川式の土器片が出土しているが、細片ばかりで図示できるものはない。

S H61 (図90)

梁間1間、桁行1間の建物。遺構主軸はN-9°-Wである。遺構規模は梁行2.72 m、桁行2.72 mを測り、柱間は2.12～2.46 m、柱穴径0.42～0.59 m、深さ0.21～0.34 mである。柱穴から弥生土器片が出土するが、細片で図示できない。

S H62 (図91)

梁間2間、桁行3間の建物。遺構主軸はN-1°-Wである。遺構規模は梁行3.65 m、桁行2.38 mを測り、柱間は0.93～2.38 m、柱穴径0.51～0.68 m、深さ0.17～0.42 mである。柱穴から弥生時代後期菊川式の土器片が出土するが、細片で図示できない。

S X15 (図91)

SB33の南東端で四本柱の南東隅に接して確認された焼土痕。焼土の範囲は東西幅1.76 m、南北幅1.23 m、高さ0.04 mを測るにも及ぶ。SB33四本柱の南東柱の掘方壁面も比熱していることから、ピットが開口している状態で火を焚いたようである。被熱度合いはピットの内側～北側上面、ピットからみて西側の高まりが最も強い。SB33の壁溝覆土の上面も被熱しているのが確認できる。この焼土の性格について検討するために、排土を洗ってふるいにかけて鉄サイなどの混入物は確認できなかった。弥生時代後期菊川式の壺片が出土しているが、焼土面から浮いていて焼土との関係性を証明できない。

S K39 (図91)

2基の土坑が重なった状態と見られ、南北に長い楕円形の平面形を持つ。南北幅は4.25 m、東西幅2.18 m、深さ0.42 mを測る。覆土中からは、紡錘車の破片とともに多くの弥生土器（壺・高坏）片が出土しており、完形にものが多いことから、廃棄土坑と考えられる遺構である。



図 89. 第 25 次調査区全体図 (1:200)

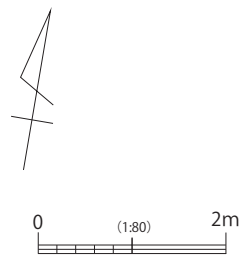
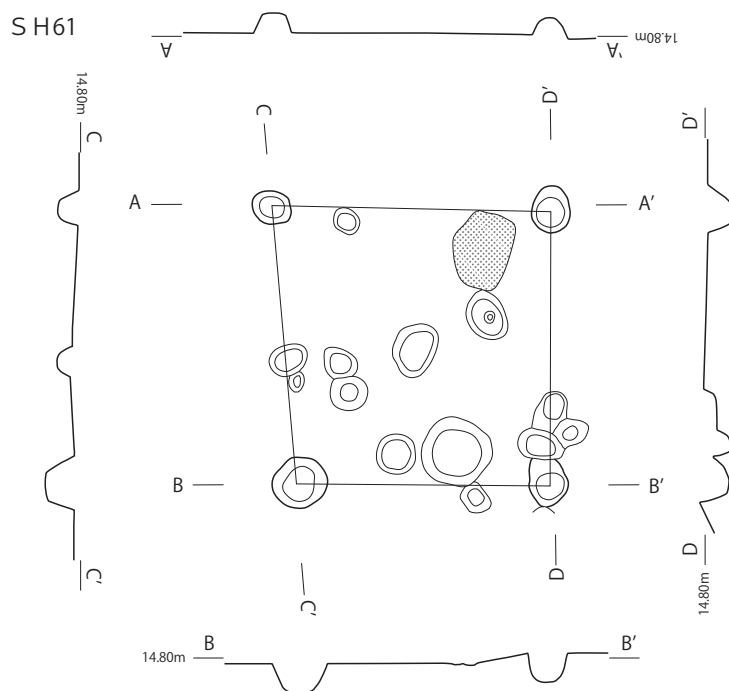
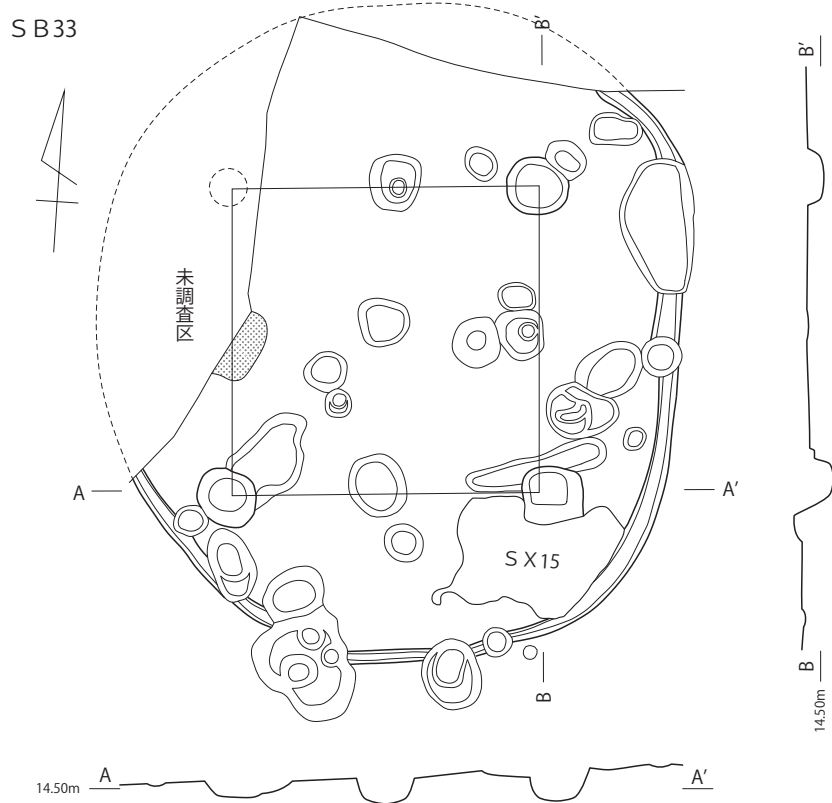


図 90. 第 25 次調査区 SB 33 SH 61

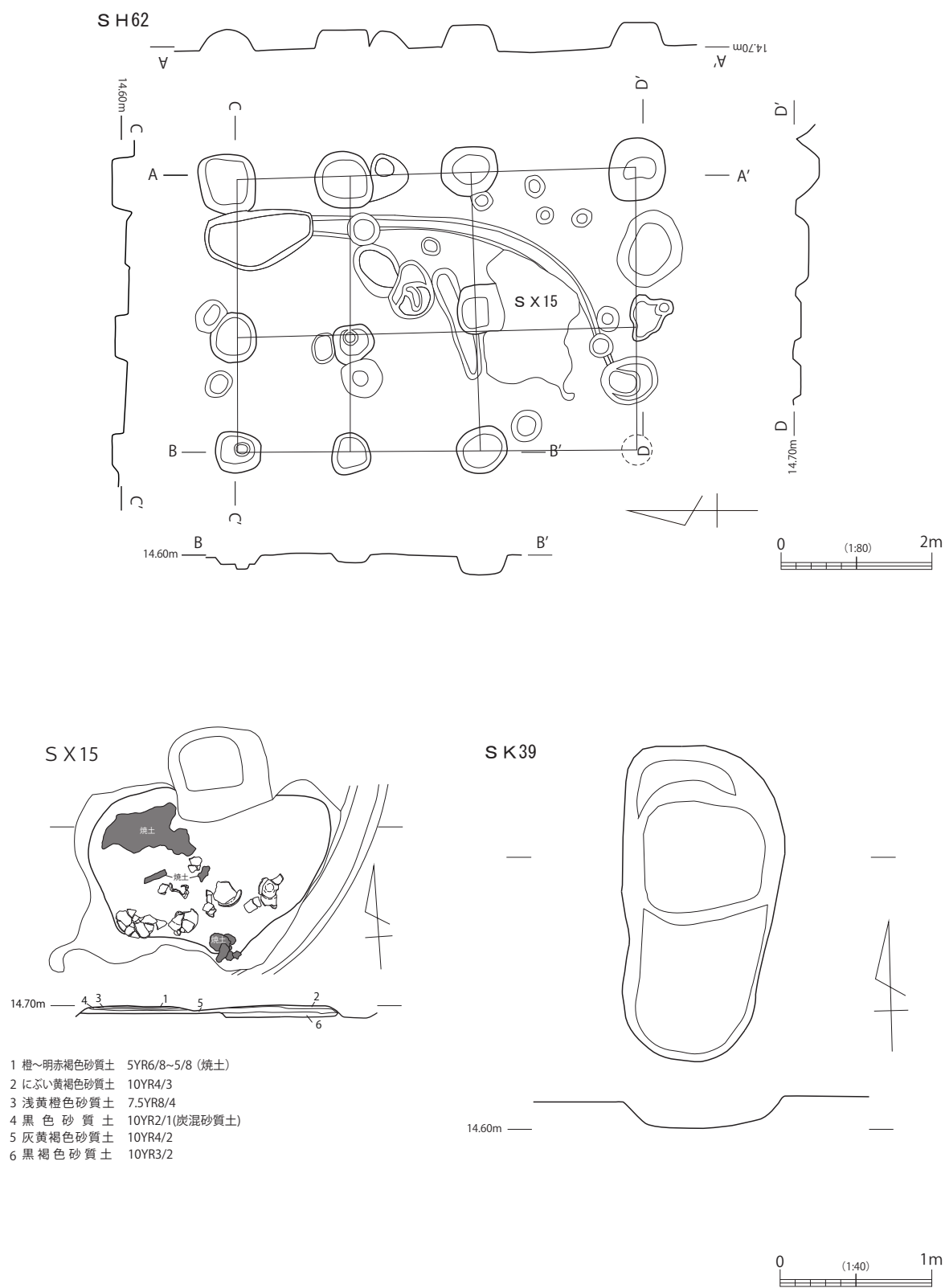


図 91. 第 25 次調査区 SH 62 SX 15 SK 39

12-2. 古墳時代の遺構・遺物

S H 63 (図 92)

S H 62 と重複し、梁間 2 間、桁行 1 間の建物。遺構主軸は N-1°-W である。遺構規模は梁行 3.65 m、桁行 2.38 m を測り、柱間は 0.93 ～ 2.38 m、柱穴径 0.51 ～ 0.68 m、深さ 0.17 ～ 0.42 m である。柱穴から須恵器甕体部片が出土するが、細片で図示できない。古墳時代後期に属すると考えられる。

S P 25-090 (図 92)

S H 3 南側で確認され、南北幅 0.43 m、東西幅 0.49 m、深さ 0.24 m を測る楕円形の平面形を持つピット。よく被熱した礫がピット内いっばいに組むように確認された。礫の隙間から土師器高坏脚片が出土している。近く焼土や焼土塊があるが、いずれも弥生時代後期菊川式の土器を伴っており、それらとの関係性は不明である。

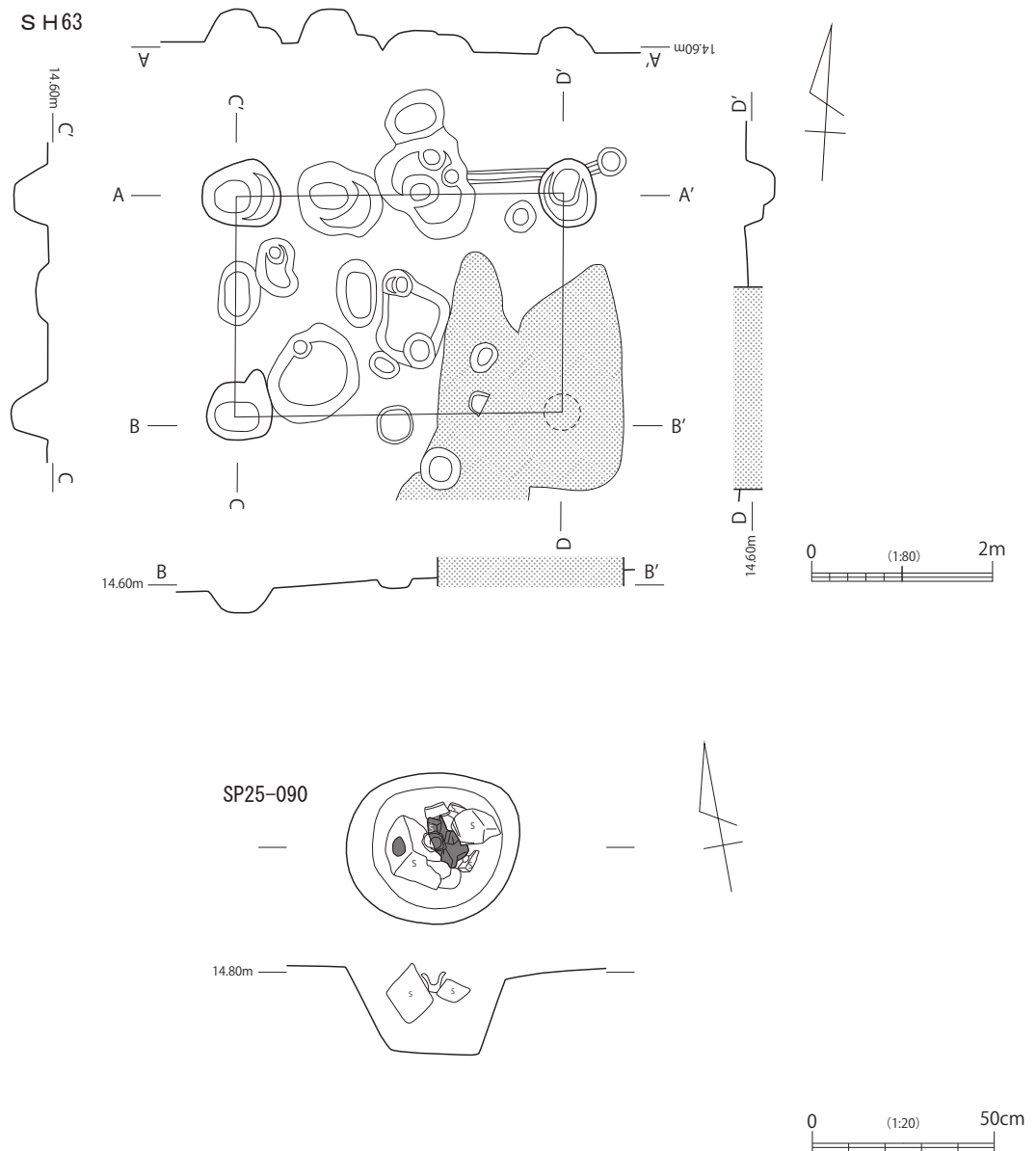


図 92. 第 25 次調査区 S H 63 SP25-090

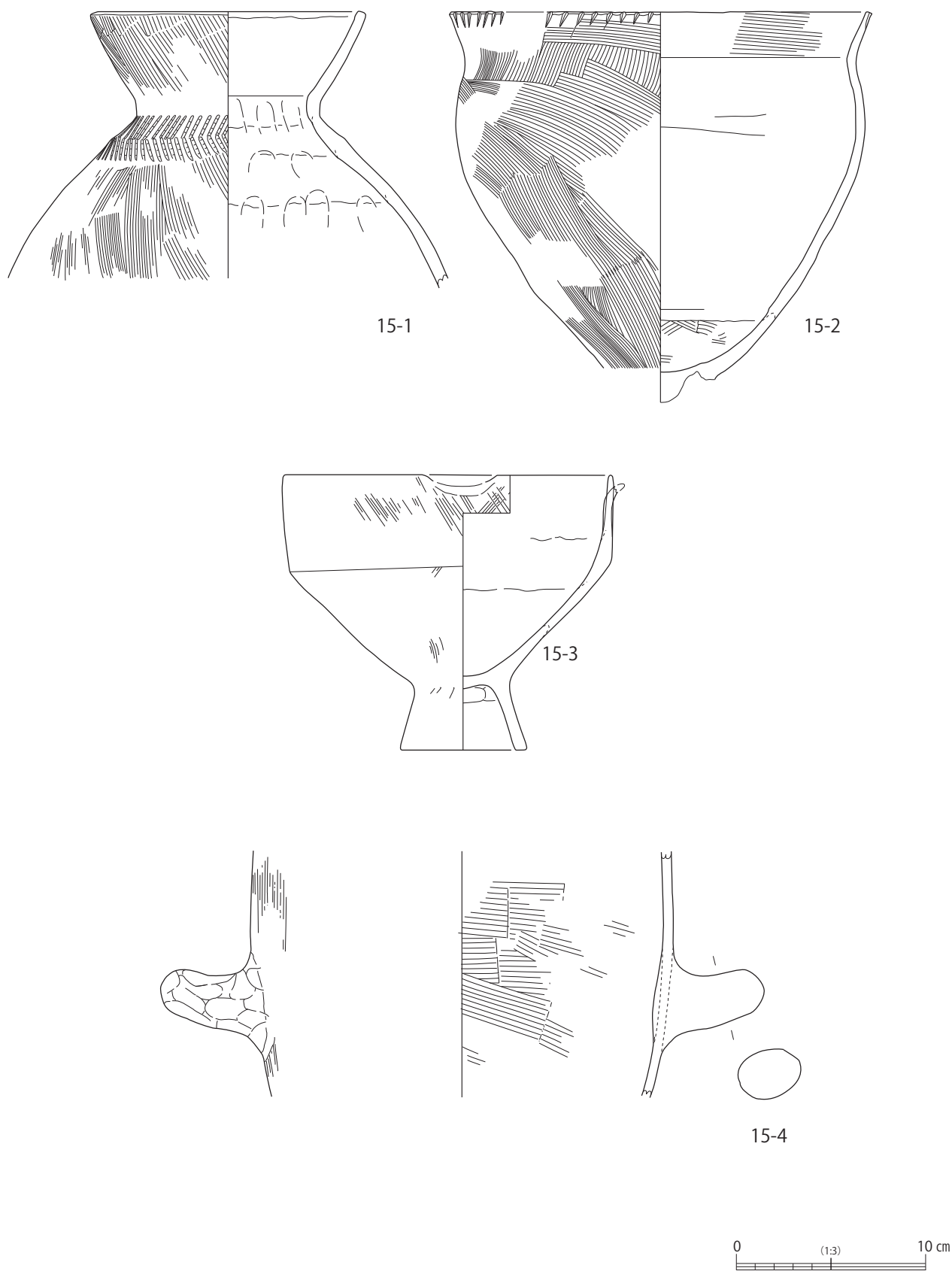


図 93. 第 25 次調査区 遺物実測図

13 節 第26調査区

第26次調査区は大門遺跡の南部に位置し、調査時期は令和2年10月～11月、面積は697㎡である。東側は第29次調査区、南側は第32次調査区、西側は第23次調査区と接する。

基本層序は概ね以下の通りである。

- I 層 黄褐色土 表土
- II 層 褐色土 遺物包含層
- III 層 明黄褐色土 地山 遺構確認面

III層にて遺構を確認するまでに、表土を0.3～0.7m除去した。遺構確認面の標高は14.8～15.0mで、北から南方向にかけてゆるやかに傾斜をする。遺跡の南端部に近い場所で、遺構の数は少なく、弥生時代の掘立柱建物4棟、ピットのほか、古墳時代以降のピット等を検出した。



図 94. 第26次調査区全体図（1:300）

13-1. 弥生時代の遺構・遺物

S H64 (図 95)

梁間1間、桁行1間の建物。南東側の柱穴は確認できない。遺構主軸はN-10°-Eである。遺構規模は梁行3.57m、桁行4.42mを測り、柱間は2.80～3.65m、柱穴径0.51～0.76m、深さ0.34～0.42mである。柱穴から弥生時代後期菊川式の壺片が出土するが、細片で図示できない。

S H65 (図 96)

S H66 と重複し、梁間1間、桁行1間の建物。遺構主軸はN-29°-Wである。遺構規模は梁行3.57m、桁行3.83mを測り、柱間は2.80～3.14m、柱穴径0.51～0.76m、深さ0.17～0.34mである。柱穴から弥生時代後期菊川式の土器片が出土するが、細片で図示できない。

S H66 (図 96)

S H65 と重複し、梁間1間、桁行1間の建物。南東側の柱穴は確認できない。遺構主軸はN-29°-Wである。遺構規模は梁行3.91m、桁行3.91mを測り、柱間は3.23～3.23m、柱穴径0.51m、深さ0.34mである。柱穴から弥生時代後期菊川式の土器片が出土するが、細片で図示できない。

S H67 (図 97)

梁間1間、桁行1間の建物。遺構主軸はN-8°-Eである。遺構規模は梁行3.06m、桁行2.89mを測り、柱間は2.63m、柱穴径0.34～0.51m、深さ0.17～0.29mである。柱穴から弥生時代後期菊川式の土器片が出土するが、細片で図示できない。

S P26-210 (図 97)

S H67 南南西側で確認された遺構。南北幅0.42m、東西幅0.78m、深さ0.05mを測り、楕円形の平面形を持つピットで、弥生時代後期菊川式の壺が出土している。

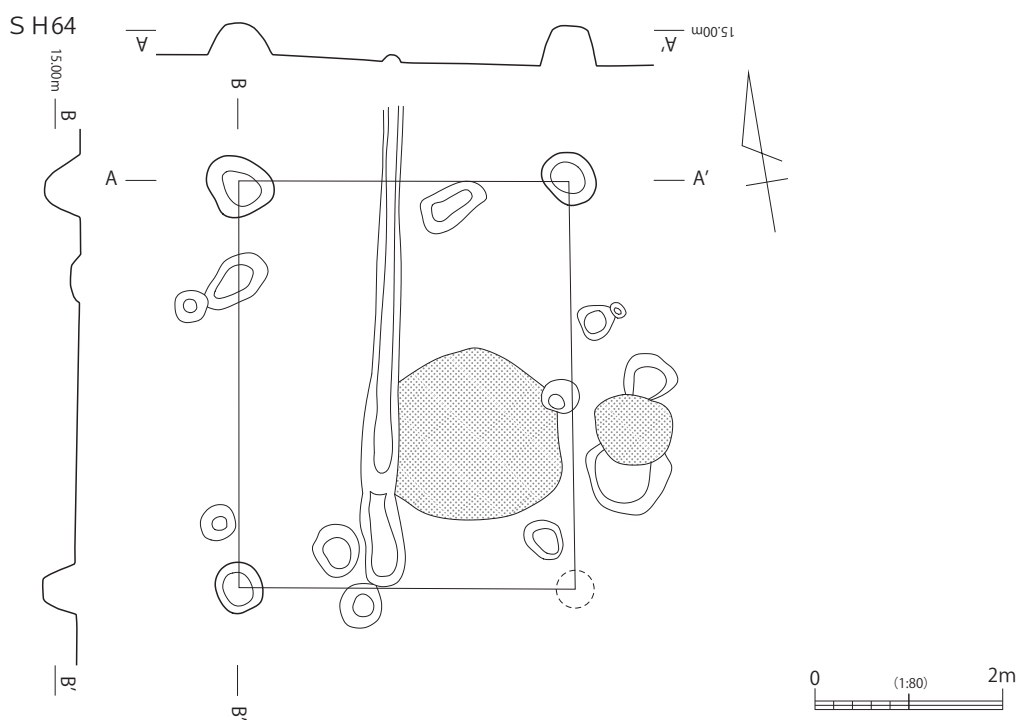


図 95. 第26次調査区 S H 64

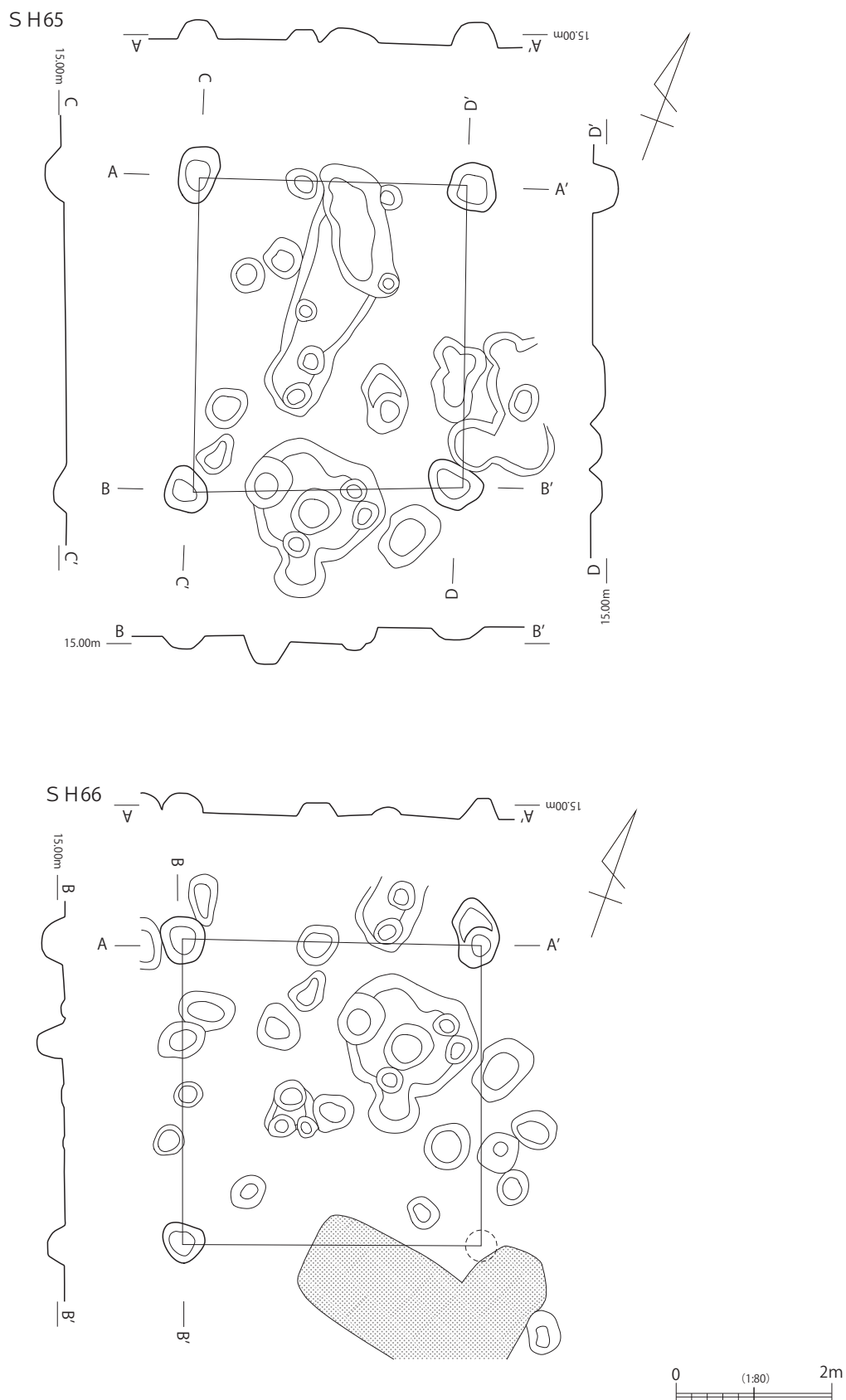


図 96. 第 26 次調査区 SH 65・66

13-2. 奈良時代遺以降の遺構・遺物

S P 26-290 (図 97)

S H64 と重複して確認された遺構。南北幅 0.39 m、東西幅 0.73 m、深さ 0.12 ～ 0.20 m を測り、やや不整形な楕円形の平面形を持つピットで、陶器碗が出土している。

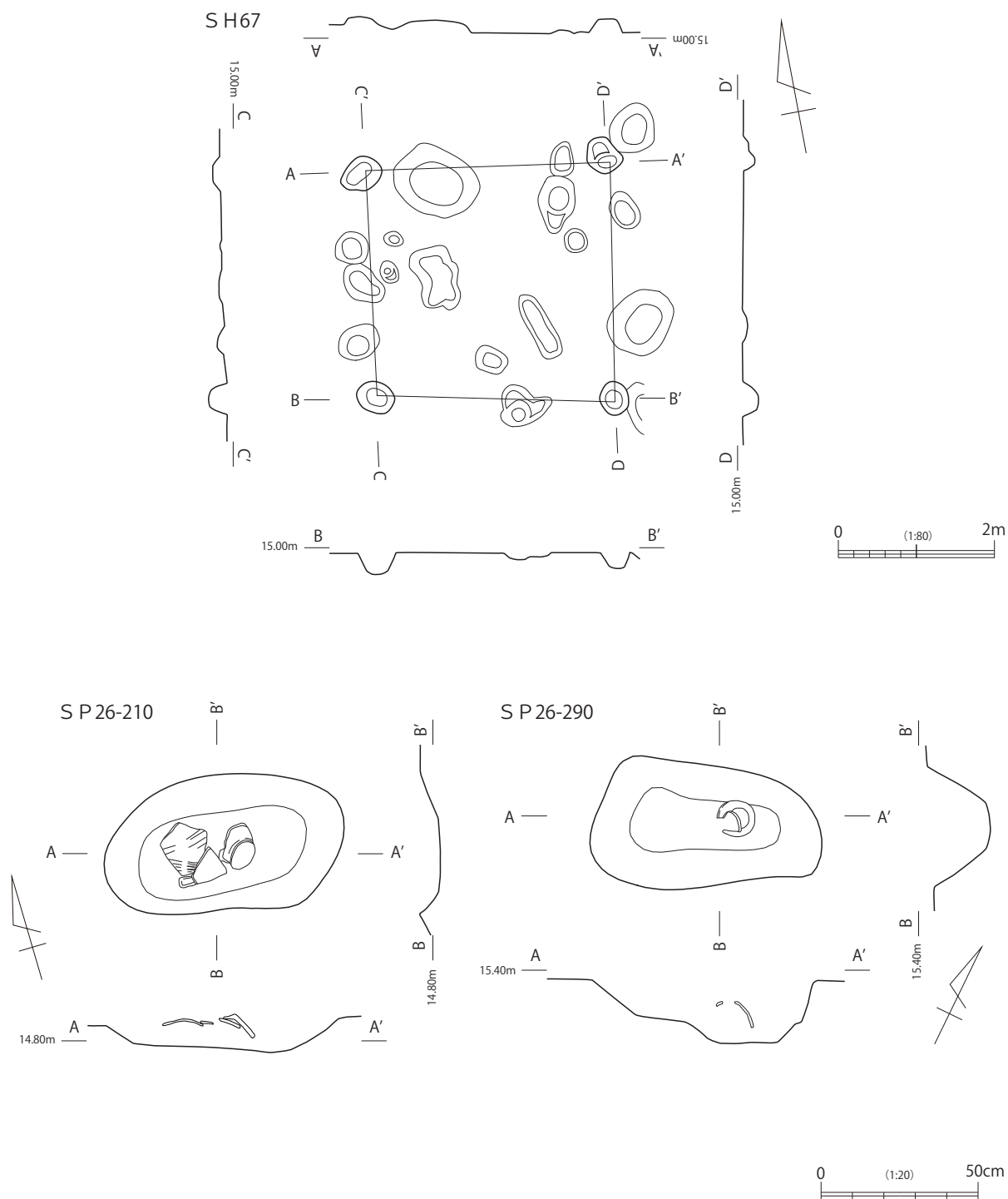
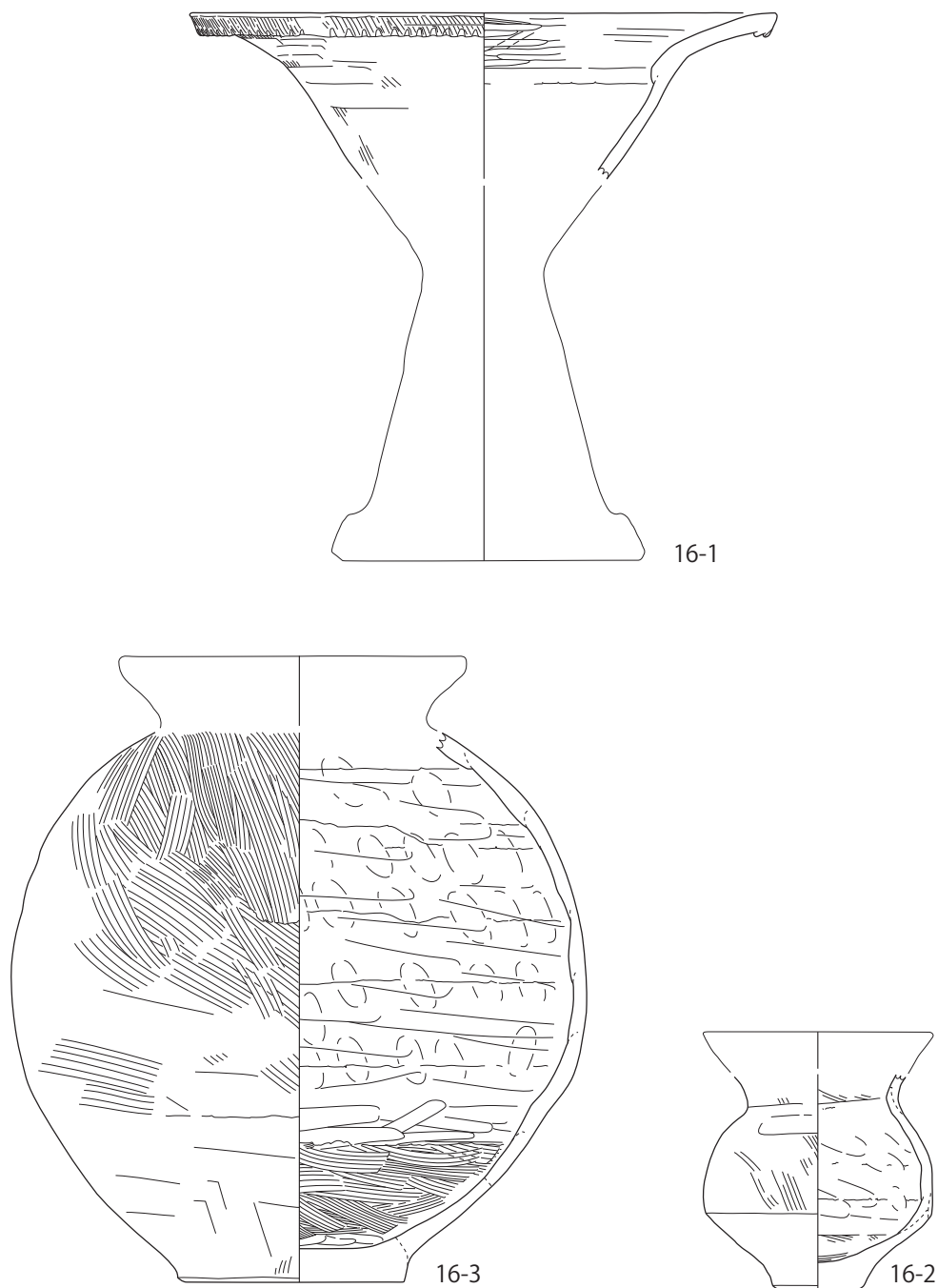


図 97. 第 26 次調査区 S H 67 S P 26-210・26-290



0 (1:3) 10 cm

図 98. 第 26 次調査区 遺物実測図

14 節 第 27 次調査区

第 27 次調査区は大門遺跡の西部に位置し、調査時期は令和 2 年 11 ～ 12 月、面積は 664 m² である。東側は第 14 次調査区、南側は第 7 次調査区、西側は第 18 次調査区と接する。

基本層序は概ね以下の通りである。

I 層 黄褐色土 表土

II 層 褐色土 遺物包含層

III 層 明黄褐色土 地山 遺構確認面

III 層にて遺構を確認するまでに、表土を 0.3 ～ 0.7 m 除去した。遺構確認面の標高は 13.7 ～ 14.2 m で、東から西方向にかけてゆるやかに傾斜をする。遺跡の西部に位置し、遺構の数は北側中央部が少ない。く、弥生時代の竪穴住居 1 棟、掘立柱建物 3 棟、土坑 3 基、方形周溝墓 1 基のほか、古墳時代以降のピット等を検出した。

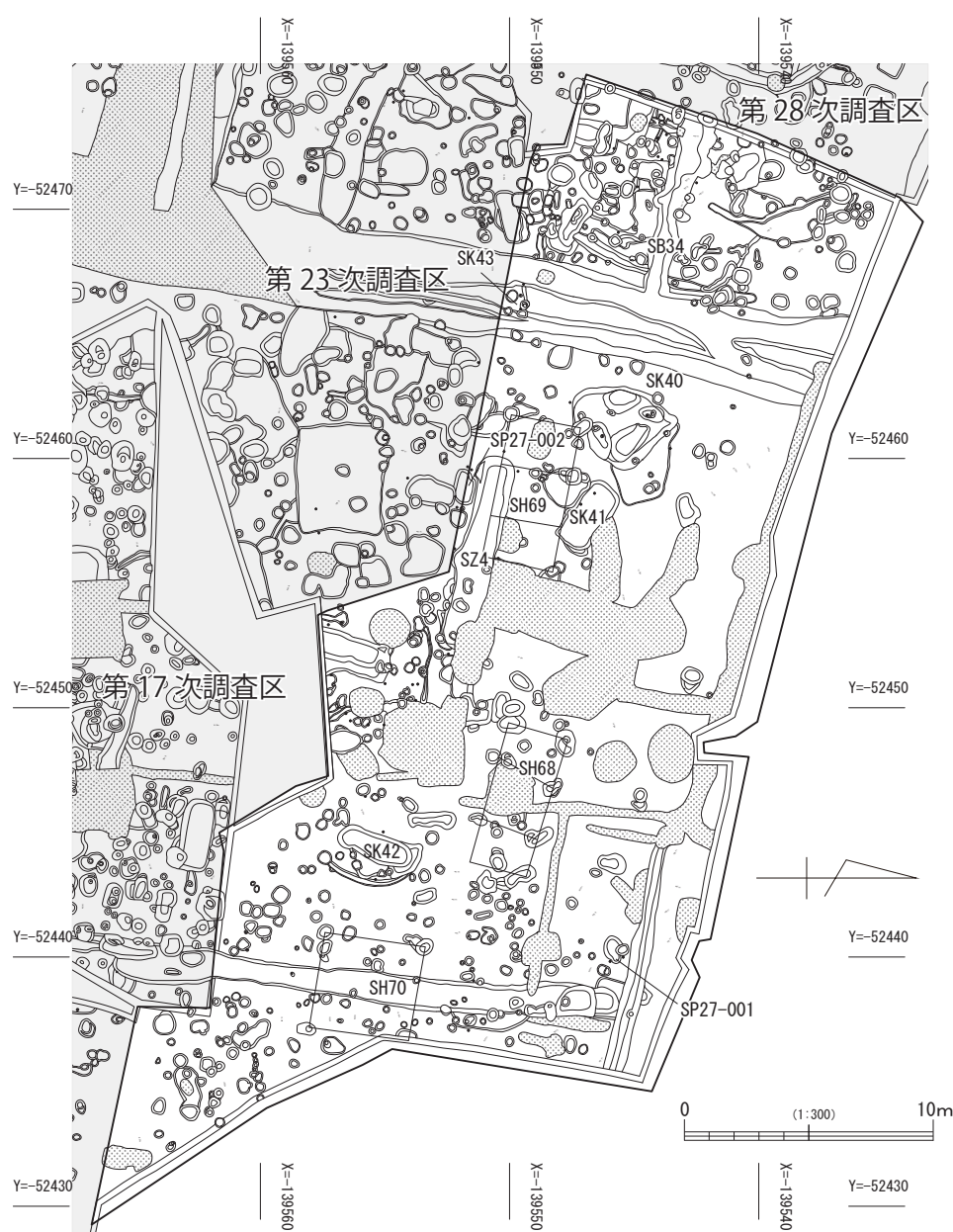


図 99. 第 27 次調査区全体図 (1:300)

14-1. 弥生時代の遺構・遺物

S B 34 (図 100)

平面形は小判型の楕円形。西側は他遺構に切られ依存状態はやや不良である。長軸 8.51 m、短軸 6.12 m、深さ 0.08 m を測る。掘り方や貼床は確認できなかった。壁溝の幅は 0.34 ～ 0.59 m である。柱穴は四基が確認でき、長方形に配されている。また、楕な住居中央部を東西方向に後の時代の溝が走り、本来の炉跡は失われている。しかし、四本柱の南側 2 本近くに焼土が検出されており、南西柱穴は内部上層が被熱している。焼失とも考えられるが、他柱穴では焼土や被熱痕跡確認されない。弥生時代後期菊川式の土器片が出土しているが、細片ばかりで図示できるものはない。

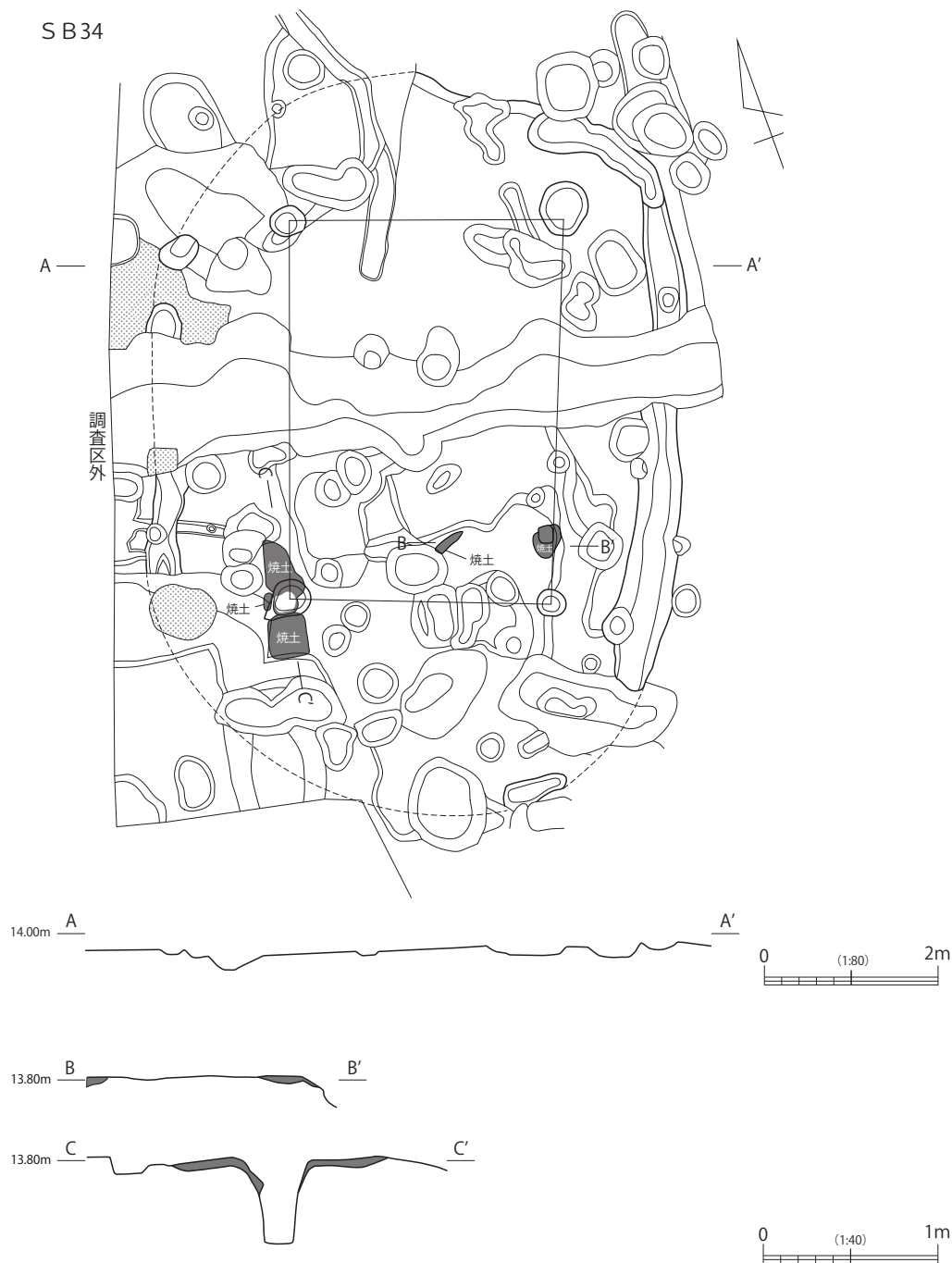
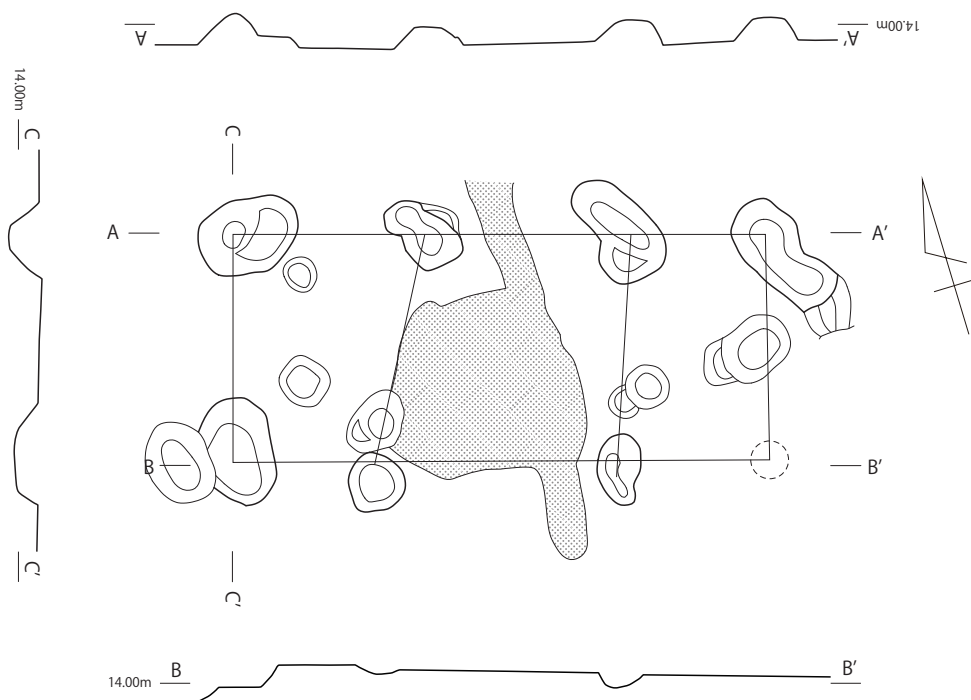


図 100. 第 27 次調査区 S B 34

S H68



S H69

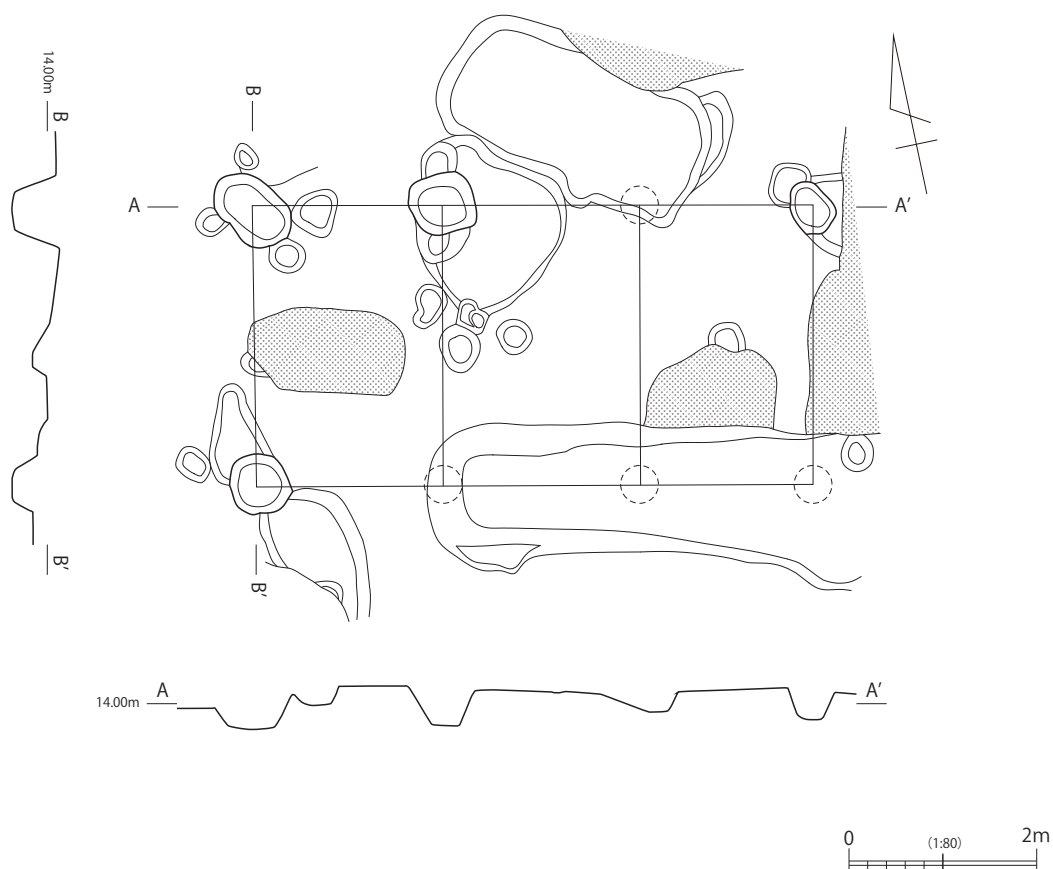


図 101. 第 27 次調査区 S H 68 ・ 69

S H68 (図101)

梁間3間、桁行1間の建物。南東側の柱穴は確認できない。遺構主軸はN-75°-Wである。遺構規模は梁行5.95m、桁行2.55mを測り、柱間は0.76～1.27m、柱穴はすべて不整形ではあるが、径0.42～1.10m、深さ0.08～0.34mである。柱穴から弥生時代後期菊川式の土器片が出土するが、細片で図示できない。

S H69 (図101)

梁間3間、桁行1間の建物。北側1基、南側3基の柱穴はSZ4やSK41によって切られ確認できない。遺構主軸はN-73°-Wである。遺構規模は梁行5.95m、桁行2.97mを測り、柱間は0.59～0.93m、柱穴径0.42～1.10m、深さ0.42～0.51mである。柱穴から弥生時代後期菊川式と推測される台付甕の口縁部片が出土するが、細片で図示できない。

S H70 (図102)

梁間1間、桁行1間の建物。北東側の柱穴の一部が調査区外へおよぶ。遺構主軸はN-8度-Eである。遺構規模は梁行3.82m、桁行3.82mを測り、柱間は3.40m、柱穴径0.51～0.85m、深さ0.25～0.34mである。柱穴から弥生時代後期菊川式の土器片が出土するが、細片で図示できない。

S K40 (図102)

楕円形に近い平面形を持つ土坑。長径は5.27m、短径2.78m、深さ0.68mを測る。覆土中からは、弥生時代中期中葉嶺田式の特徴をもつ甕の破片が出土しており、土坑墓と考えられる遺構である。

S K41 (図102)

SH69と重複し、隅丸長方形の平面形を持つ土坑。長径5.87m、短径2.98m、深さ0.55mを測る。床面直上からは弥生時代中期の嶺田式土器の破片が出土しているが、覆土中からは弥生時代後期菊川式の壺・高坏・甕片の出土がある。土坑墓と考えられる遺構である。

S K42 (図103)

3基が重複する土坑で最も新しいものが長楕円形の平面形を持つ土坑。この最も新しい長楕円形土坑は長径6.21m、短径2.21m、深さ0.34mを測る。覆土中からは弥生時代後期菊川式の壺底部や体部の破片、台付甕脚部片が出土がある。土坑墓と考えられる遺構である。

S K43 (図103)

南端が第17次調査区で確認された。東西を後世の溝に切られ、遺構の本来の形は不明な土坑。南北長1.00m、確認された東西長は1.16m、深さ0.12mを測る。床面直上から赤採の残る弥生時代後期菊川式の小型壺や壺、台付甕片が出土している。

S P27-001 (図103)

径0.37m、深さ0.12mを測る円形の平面形を持つピットで、土坑と西側が切り合う。弥生時代後期菊川式の壺が出土している。

S P27-002 (図103)

SZ1北溝の南側に位置し、遺構の南半分が第17次調査区で確認された。本来は隅丸長方形の平面形を持っていたものと考えられ、長径1.40m、短径0.87m、深さ0.36mを測る。覆土からは弥生時代後期菊川式の土器片が出土している。

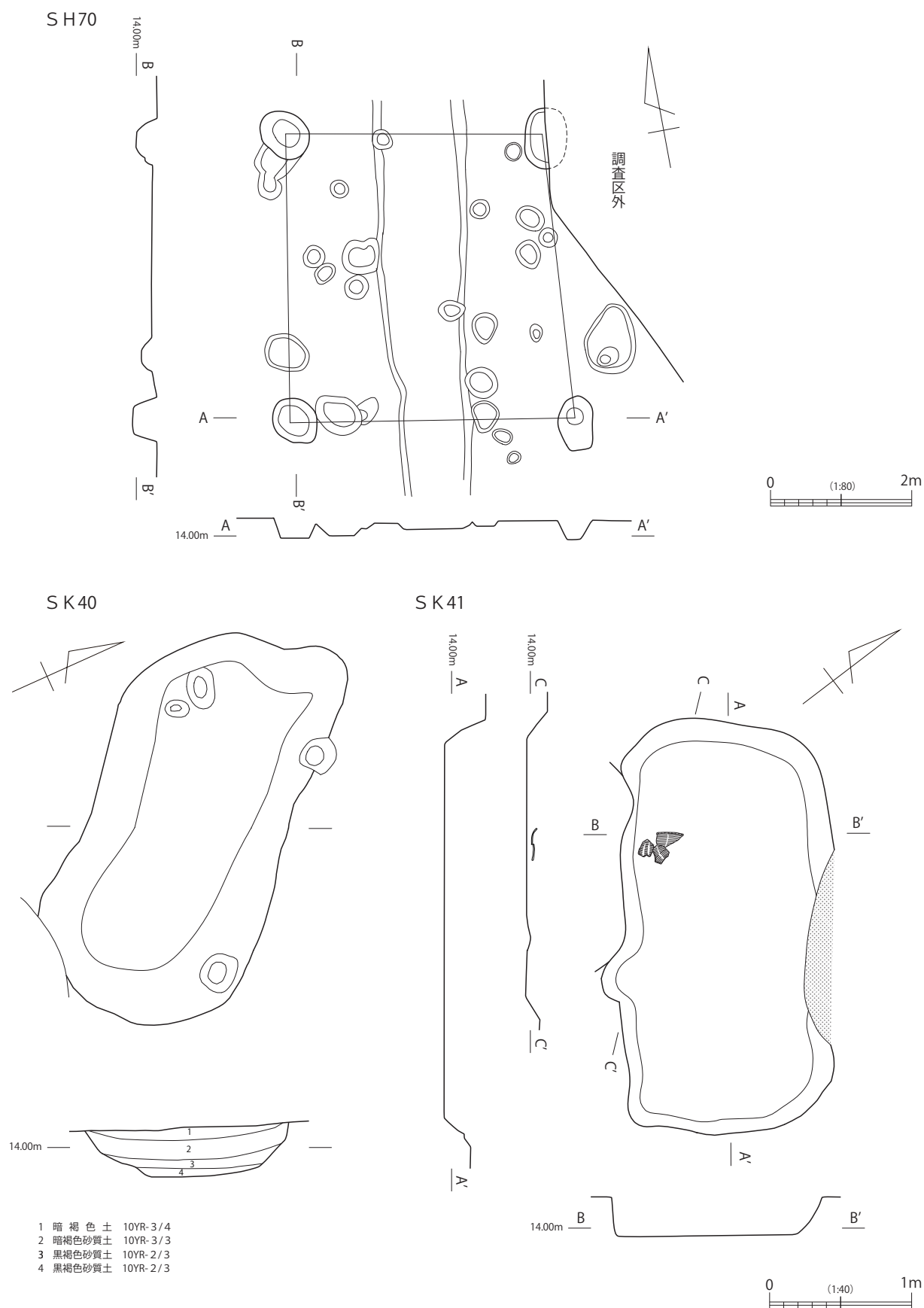


図 102. 第 27 次調査区 SH 70 SK 40・41

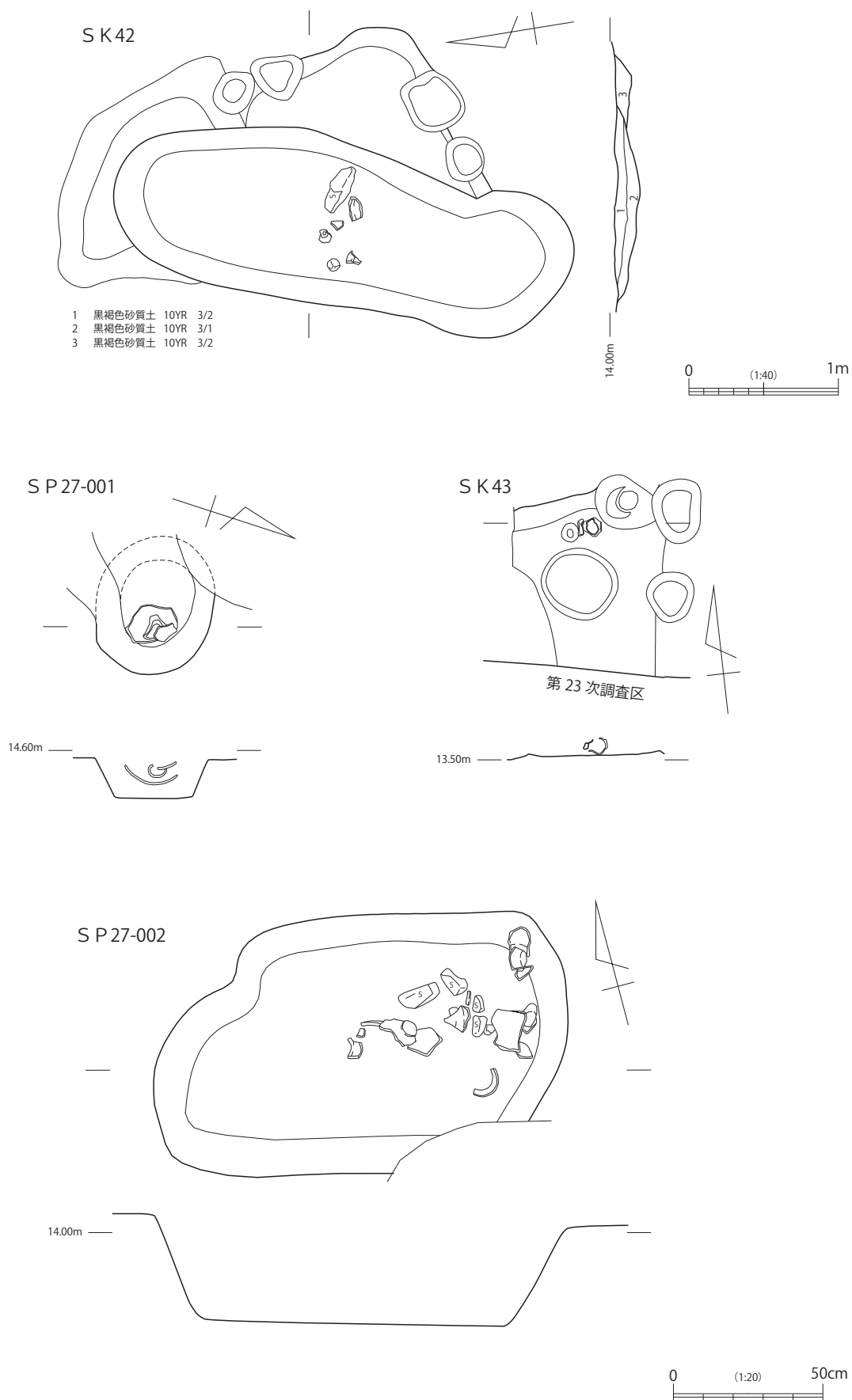


図 103. 第 27 次調査区 S K 42・43 S P 27-001・27-002

S Z 4 (図 104)

他遺構と切り合いの度合いが大きく、第 23 調査区へ広がるが、4 方向の溝が揃う、4 隅切れ型の方形周溝墓。溝間の東西幅 11.7 m、南北幅 9.5 m を測り、東西方向を長軸とする長方形の平面形を呈する。南東側が調査区外へと広がり、マウンド及び主体部は早い段階で削平を受け、中央部に古墳時代の SB27 が重複している。北溝は幅 1.5 m、長さ 8.9 m、深さ 0.2 m、南溝は推定幅 2.0 m、推定全長 7.2 m、深さ 0.1 m、東溝は幅 1.2 m、推定全長 6.7 m、深さ 0.2 m、西溝は幅 1.0 m、推定全長 6.7 m、深さ 0.1 m を測る。西溝及び南溝が不整形で特定が困難であった。北溝及び東溝の覆土からは弥生時代中期白岩式段階の壺、甕の破片が多数出土している。少数ではあるが、嶺田式の特徴を持つ壺の破片の出土があるが、出土状況から弥生時代中期後葉白岩式の段階の遺構と推測する。

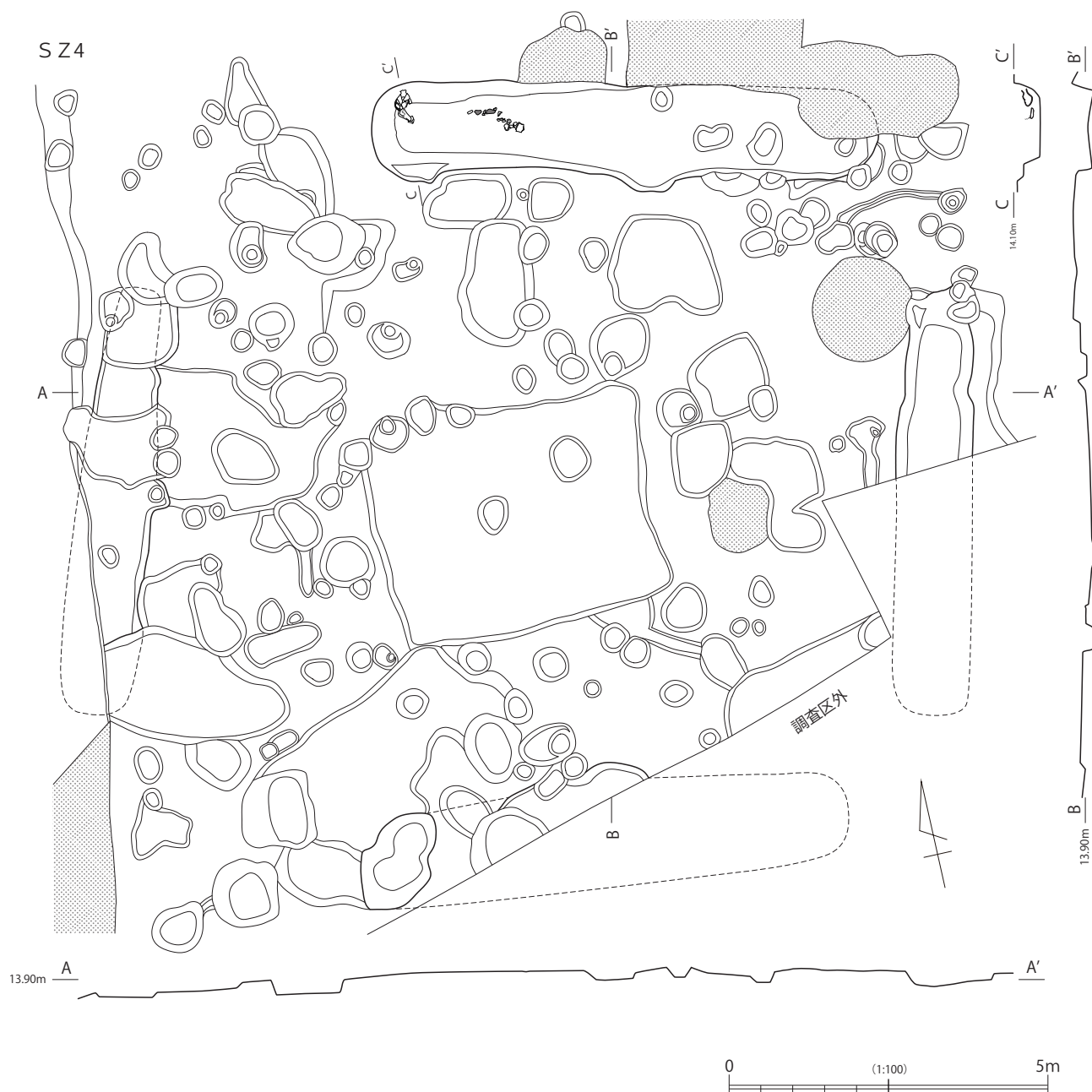


図 104. 第 27 次調査区 S Z 4

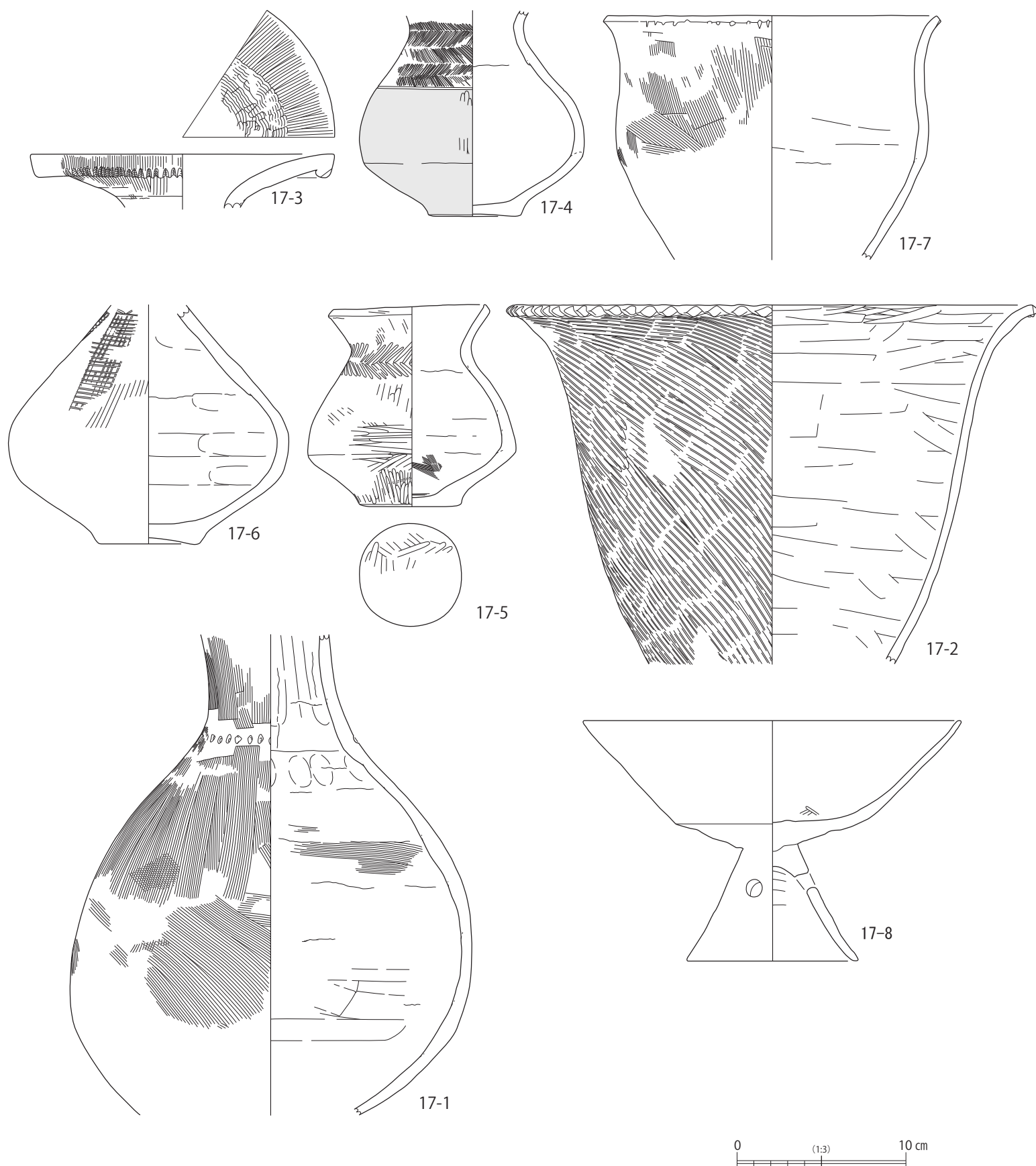


図 105. 第 27 次調査区 遺物実測図

15 節 第 28 次調査区

第 28 次調査区は大門遺跡の西部に位置し、調査時期は令和 3 年 1 ～ 2 月、面積は 644 m²である。東側は第 27 次調査区、南側は第 23 次調査区と接する。西側は 1 段下に道路が造られており、遺構面は残存していないと推測する。よってこの第 28 次調査区が大門遺跡の西端のひとつである。

基本層序は概ね以下の通りである。

I 層 黄褐色土 表土

II 層 褐色土 遺物包含層

III 層 明黄褐色土 地山 遺構確認面

III 層にて遺構を確認するまでに、表土を 0.3 ～ 0.7 m 除去した。遺構確認面の標高は 12.8 ～ 13.7 m で、東から西方向にかけてゆるやかに傾斜をする。遺跡の西部に位置し、遺構の数は北側中央部が少ない。弥生時代の掘立柱建物 3 棟、方形周溝墓 1 基、土坑 4 基、溝 3 条のほか、古墳時代以降の掘立柱建物 2 棟、ピット等を検出した。



図 106. 第 28 次調査区全体図 (1:300)

15-1. 弥生時代の遺構・遺物

S H71 (図 107)

SH72 西隣に軒を並べ、梁間 1 間、桁行 1 間の建物。遺構主軸はN-10°-Eである。遺構規模は梁行 3.53 m、桁行 2.97 ～ 3.57 mを測り、柱間は 2.30 ～ 2.89 m、柱穴径 0.55 ～ 0.76 m、深さ 0.13 ～ 0.29 mである。柱穴から弥生時代後期菊川式の土器片が出土するが、細片で図示できない。

S H72 (図 108)

SH71 東隣に軒を並べ、梁間 1 間、桁行 2 間の建物。東側中間の柱穴は後世の溝に切られ失われている。遺構主軸はN-10°-Eである。遺構規模は梁行 3.48 m、桁行 3.61 ～ 3.91 mを測り、柱間は 1.61 ～ 2.89 m、柱穴径 0.59 ～ 0.93 m、深さ 0.17 ～ 0.42 mである。柱穴から弥生時代後期菊川式の土器片が出土するが、細片で図示できない。

S H73 (図 108)

梁間 2 間、桁行 1 間の建物。遺構主軸はN-12°-Eである。遺構規模は梁行 5.53 m、桁行 3.15 mを測り、柱間は 2.04 ～ 2.63 m、柱穴径 0.55 ～ 0.76 m、深さ 0.17 ～ 0.34 mである。柱穴から弥生時代後期菊川式の土器片が出土するが、細片で図示できない。

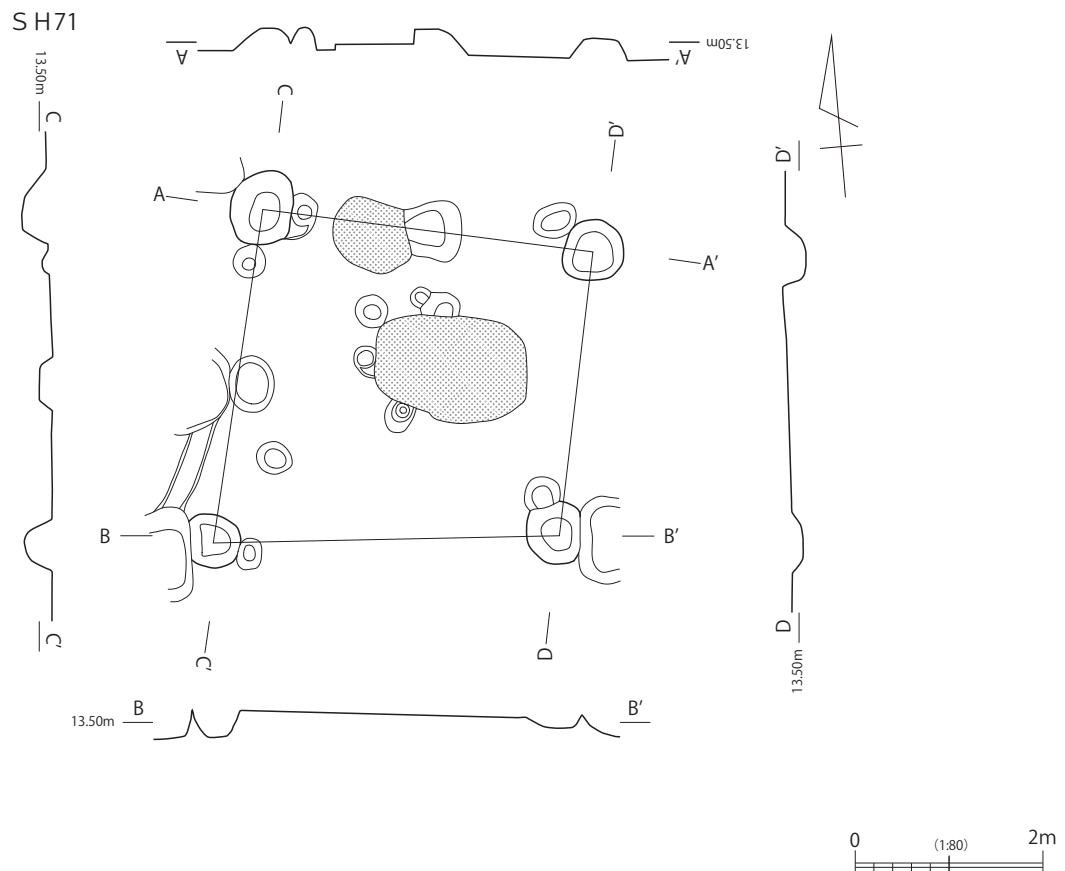


図 107. 第 28 次調査区 S H 71

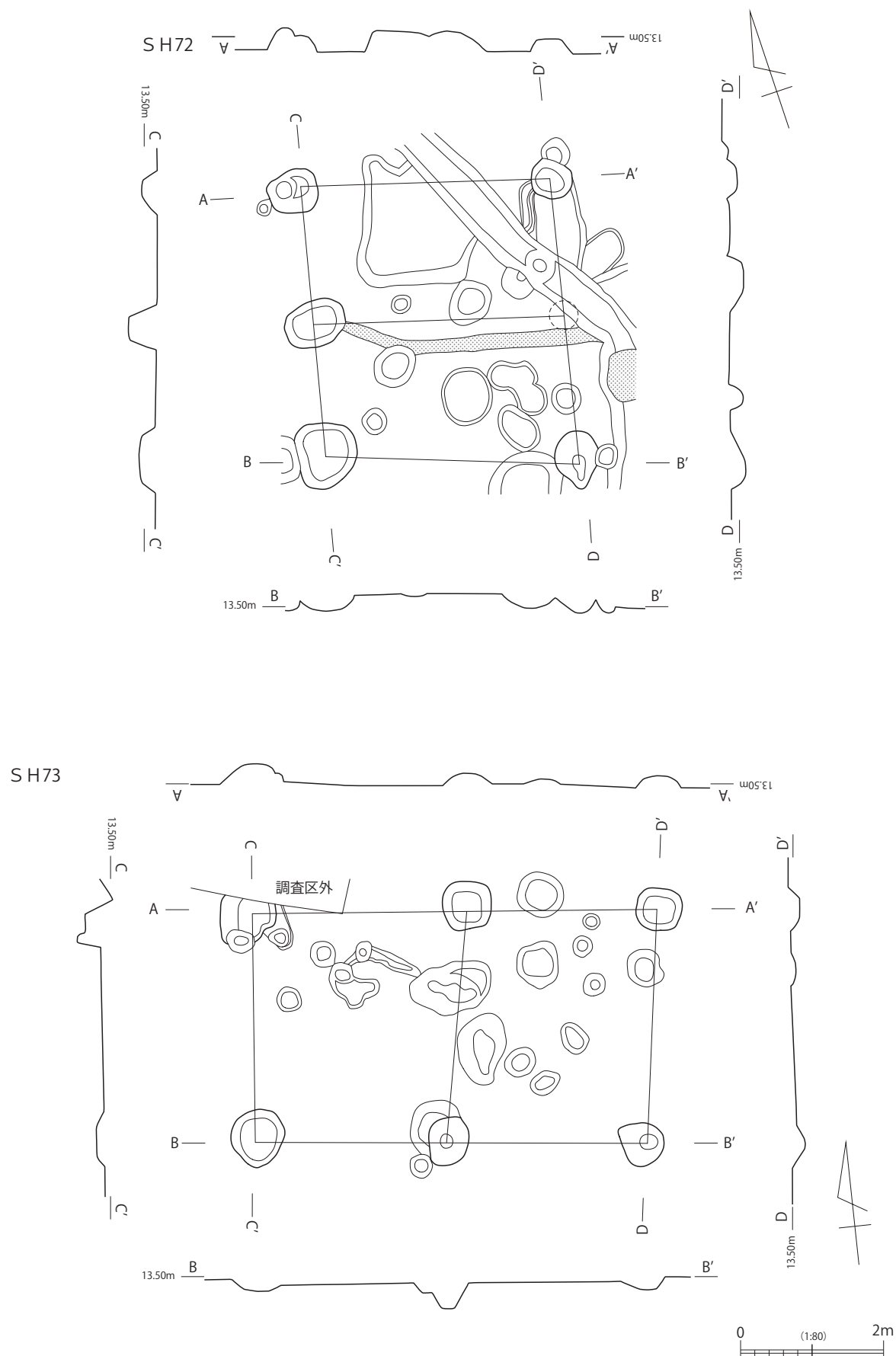


図 108. 第 28 次調査区 SH 72・73

S Z 5 (図 109)

四隅に陸橋を持たないタイプの方形周溝墓で、南側は調査区外へと延びる。溝間の東西幅 7.14 m、南北の確認幅 9.52 m と長方形の方形周溝墓である。西溝の南端及は新しい時代の溝と切り合い、東溝の南端及び南溝の中央部から東側が調査区外へとおよぶ。北溝は幅 1.47 m、長さ 7.89 m、深さ 0.31 m、南溝は確認された幅 4.71 m、北溝幅 1.42 m、深さ 0.48 m、東溝幅 0.71 m、深さ 0.24 m、西溝幅 0.71 m、深さ 0.24 m を測る。各周溝からは弥生時代後期菊川式の土器片が出土するが、細片で図示できない。

S K 44 (図 110)

隅丸三角形に近い平面形を持つ土坑。長径は 1.88 m、短径 1.68 m、深さ 0.14 m を測る。覆土中からは、弥生時代後期菊川式の壺や小型壺の細破が出土するが、細片で図示できない。

S K 45 (図 110)

円形に近い平面形を持つ土坑。長径は 1.40 m、短径 1.33 m、深さ 0.08 m を測る。覆土中からは弥生時代後期菊川式の土器の細破が出土するが、細片で図示できない。

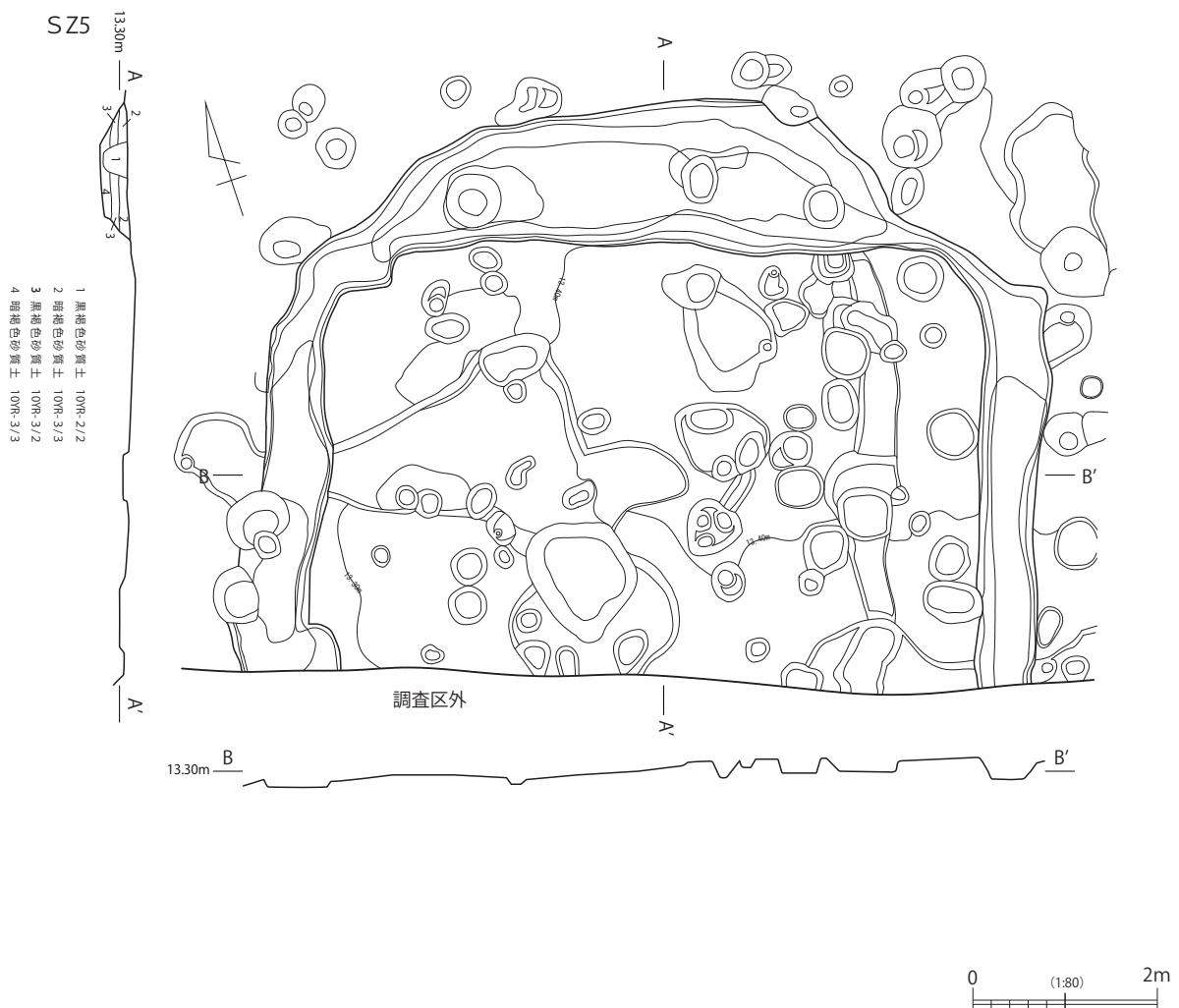


図 109. 第 28 次調査区 S Z 5

S K 46 (図 110)

南側は調査区外に伸びるため平面形は不明な土坑。確認された長径は 2.63 m、短径 2.21 m、深さ 0.17 m を測る。覆土中からは弥生時代後期菊川式の台付甕、壺や小型壺の細破が出土する。

S K 47 (図 110)

北側は攪乱により切られるが隅丸長方形の平面形となると推定される土坑。確認された長径は 2.96 m、短径 1.83 m、深さ 0.22 m を測る。覆土中からは弥生時代後期菊川式の台付甕、壺や小型壺の細破が出土する。

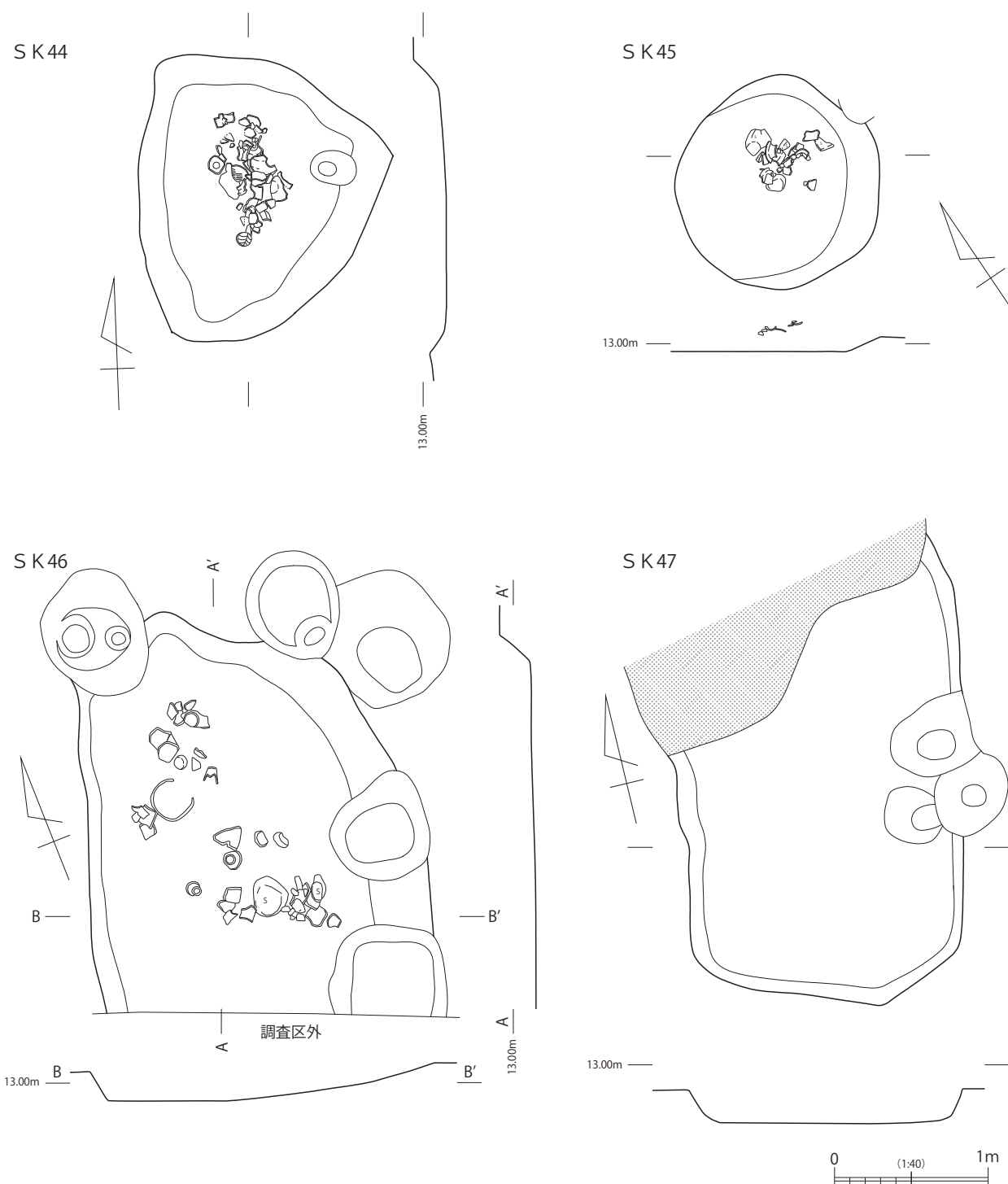


図 110. 第 28 次調査区 S K 44 ~ 47

S D 32 (図 111)

調査区西側で確認された遺構で、南北は調査区外へ延びている。斜面を区画するような方向に延び掘られた溝である。SH74 及び SK44・46 と切り合い、南北は調査区外へと延びるため全容は不明である。調査区内での確認長は 13.16 m、北側幅 3.83 m、南側幅 2.50 m、深さ 0.42 m を測る。弥生時代後期菊川式の壺の細破が出土するが、細片で図示できない。

S D 32

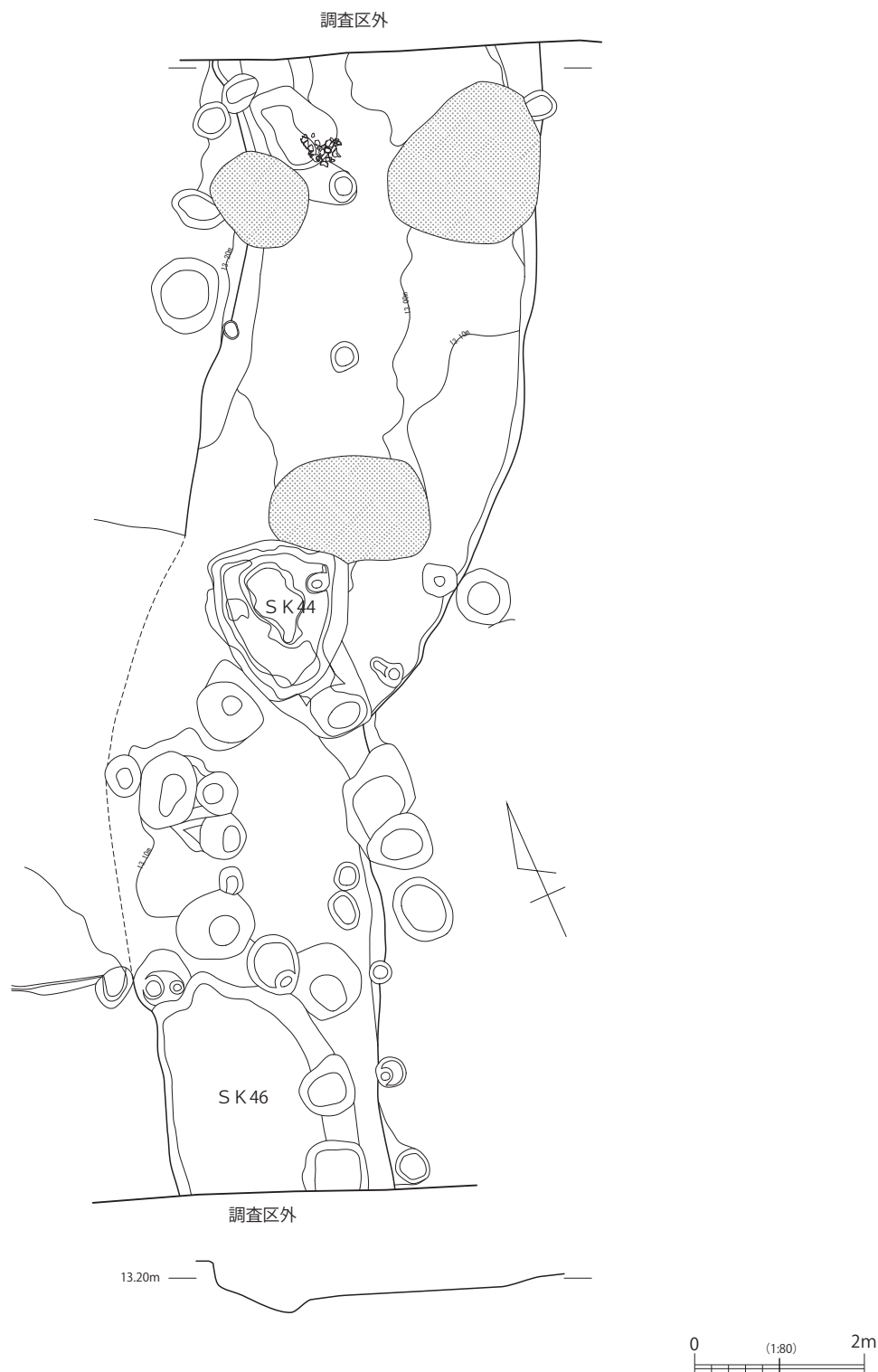


図 111. 第 28 次調査区 S D 32

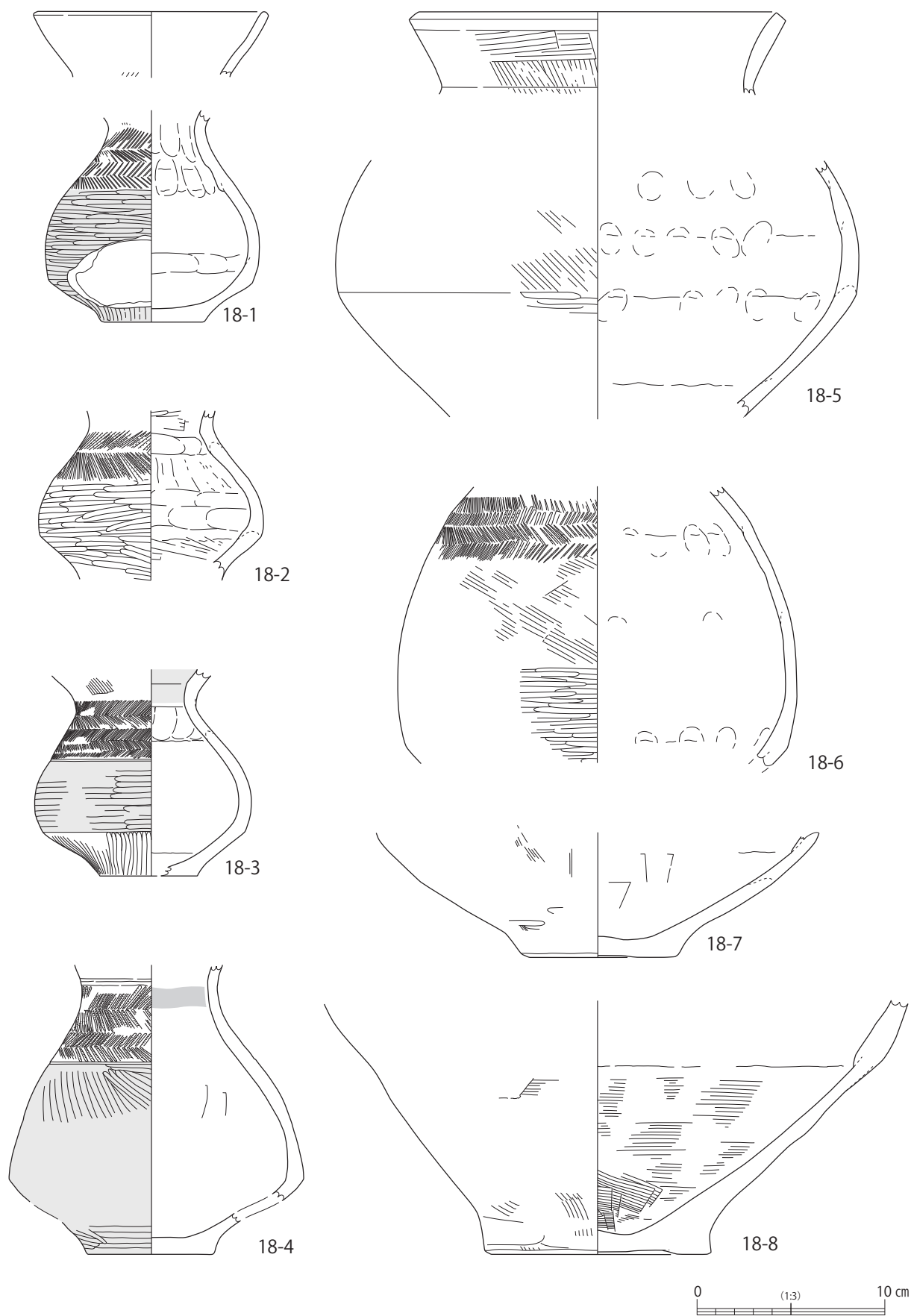


図 112. 第 28 次調査区 出土遺物実測図

15-2. 古墳時代の遺構・遺物

SH74 (図113)

SD31、SK46、SX16と切り合い、梁間2間、桁行3間の総柱建物。西側1基の柱穴を失う。遺構主軸はN-2°-Eである。遺構規模は梁行4.25m、桁行5.10mを測り、柱間は0.59～1.53m、柱穴径0.51～1.61m、深さ0.25～0.59mである。柱穴から古墳時代後期と見られる土師器の細片が出土するが、細片で図示できない。

SH75 (図114)

梁間2間、桁行1間の建物。後世の溝及び攪乱によって北側2基の柱穴を失う。遺構主軸はN-15°-Eである。遺構規模は梁行3.57m、桁行3.66mを測り、柱間は1.27～2.72m、柱穴径0.55～0.76m、深さ0.13～0.29mである。柱穴から古墳時代後期と見られる土師器の細片が出土するが、細片で図示できない。

SX16 (図114)

推定長径9.3m、短径5.4m、深さ0.25mを測り、北東から南西方向への長軸を持つ大型の隅丸長方形の遺構です。東側にSH74およびSD30、SK42・43と切り合い、南西側にSK44、北側にSK45が近接しているが新旧関係は判然としない。底面は平坦ではなく、南側はやや深く、全体として西側へ傾斜している。また、出土遺物が無く、時期の特定はできず、遺構の性格も明らかにはできていない。

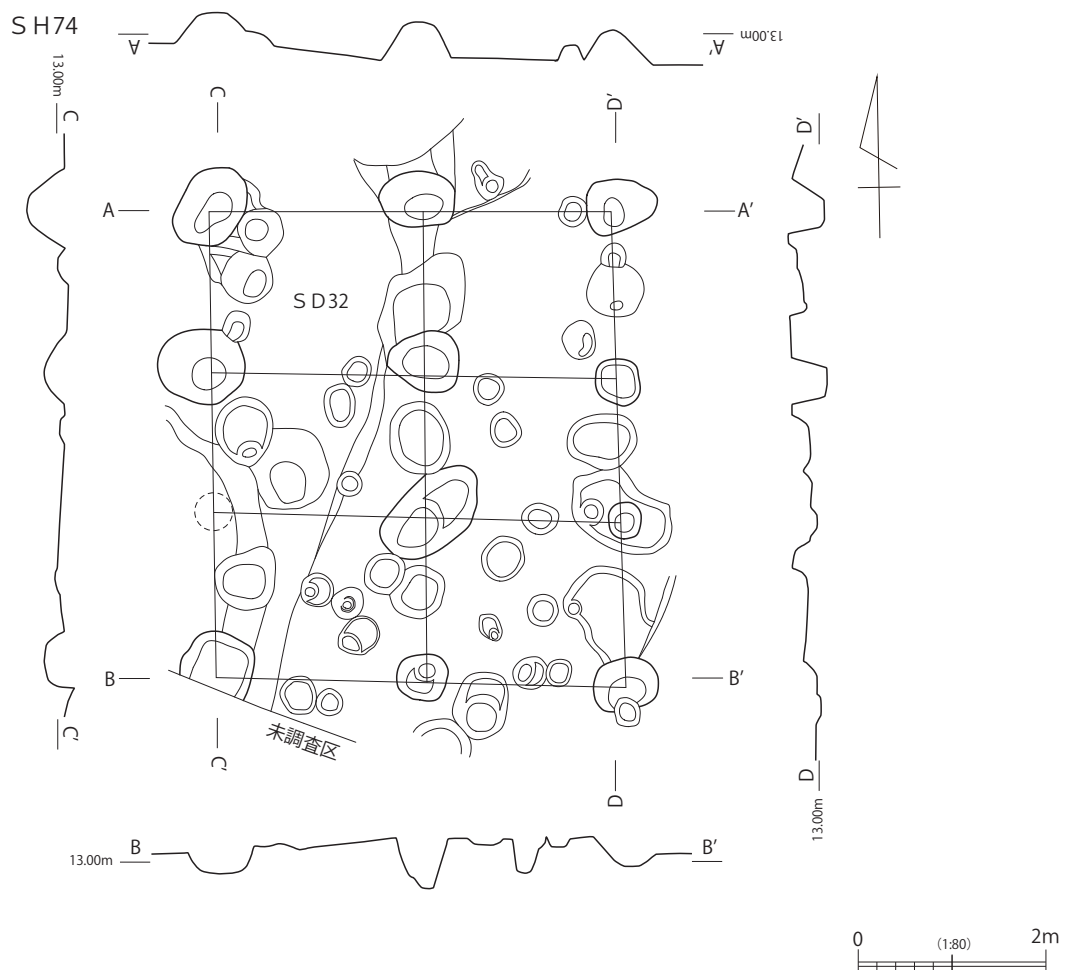


図113. 第28次調査区 SH74

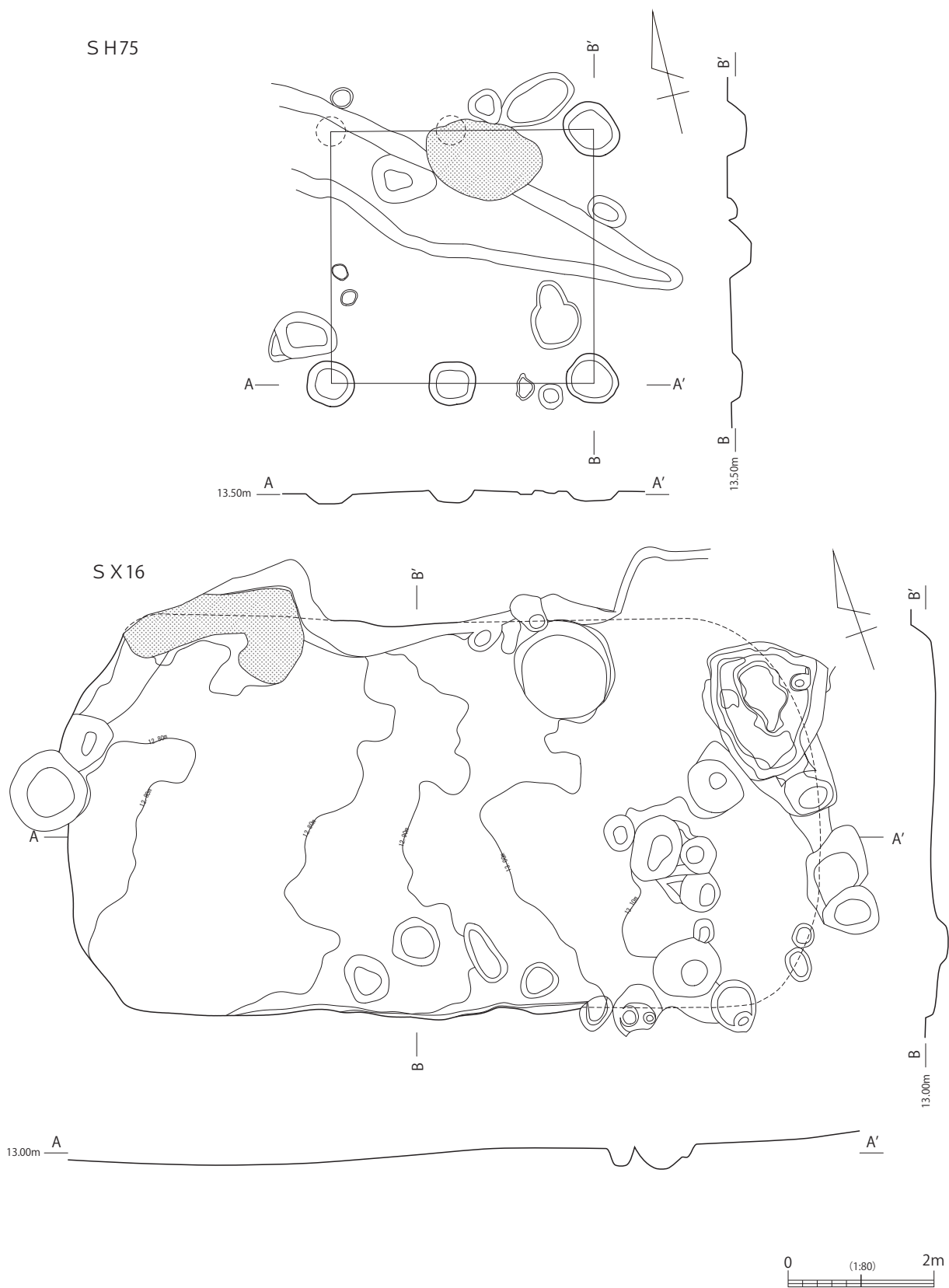


図 114. 第 28 次調査区 SH 75 SX 16

16 節 第29次調査区

第29次調査区は大門遺跡の中央部に位置し、調査時期は令和3年1～3月、面積は250 m²である。東南側は第14次調査区、南側から南西側に第26次調査区と接する。

基本層序は概ね以下の通りである。

- I 層 黄褐色土 表土
- II 層 褐色土 遺物包含層
- III 層 明黄褐色土 地山 遺構確認面

III層にて遺構を確認するまでに、表土を0.3～0.7 m除去した。遺構確認面の標高は15.4～15.5 mで、北から南方向にかけてゆるやかに傾斜をする。弥生時代の掘立柱建物2棟のほか、古墳時代の土坑等を検出した。



図 115. 第29次調査区全体図（1:200）

16-1. 弥生時代の遺構・遺物

S H76 (図 116)

北側の SH77 と軒を並べる遺構。梁間 1 間、桁行 1 間の建物。遺構主軸は $N-2^{\circ}-E$ である。遺構規模は梁行 3.40 m、桁行 2.97 m を測り、柱間は 2.13 ~ 2.46 m、柱穴径 0.51 ~ 1.10 m、深さ 0.17 ~ 0.25 m である。柱穴から弥生時代後期菊川式の土器片が出土するが、細片で図示できない。

S H77 (図 117)

南側の SH76 と軒を並べる遺構。梁間 1 間、桁行 1 間の建物。遺構主軸は $N-4^{\circ}-W$ である。遺構規模は梁行 4.25 m、桁行 2.97 m を測り、柱間は 2.21 ~ 3.83 m、柱穴径 0.29 ~ 0.51 m、深さ 0.21 ~ 0.34 m である。柱穴から弥生時代後期菊川式の土器片が出土するが、細片で図示できない。

16-2. 古墳時代の遺構・遺物

S K48 (図 117)

遺構南側が調査区外に延びるため平面形は不明。確認された長径は 4.34 m、短径 1.91 m、深さ 0.17 m を測る。覆土中からは古墳時代前期の廻間Ⅱ式併行期の土師器片が出土する。

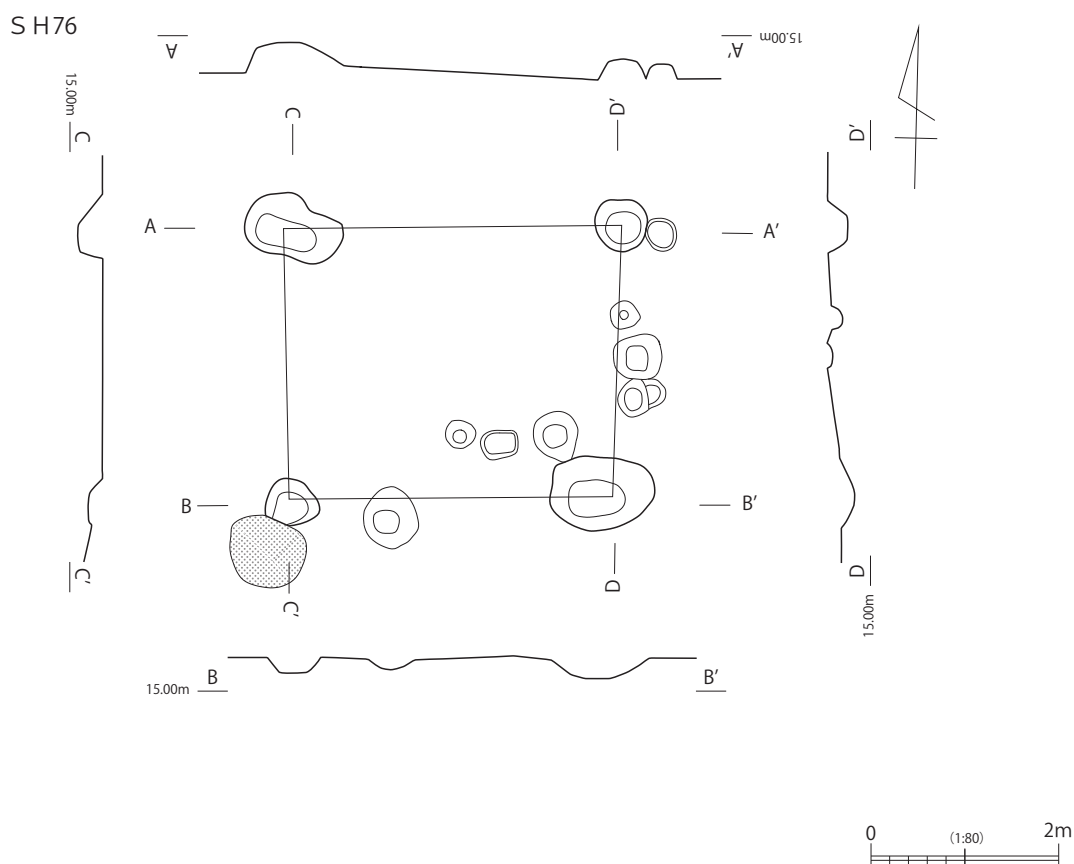


図 116. 第 29 次調査区 S H 76

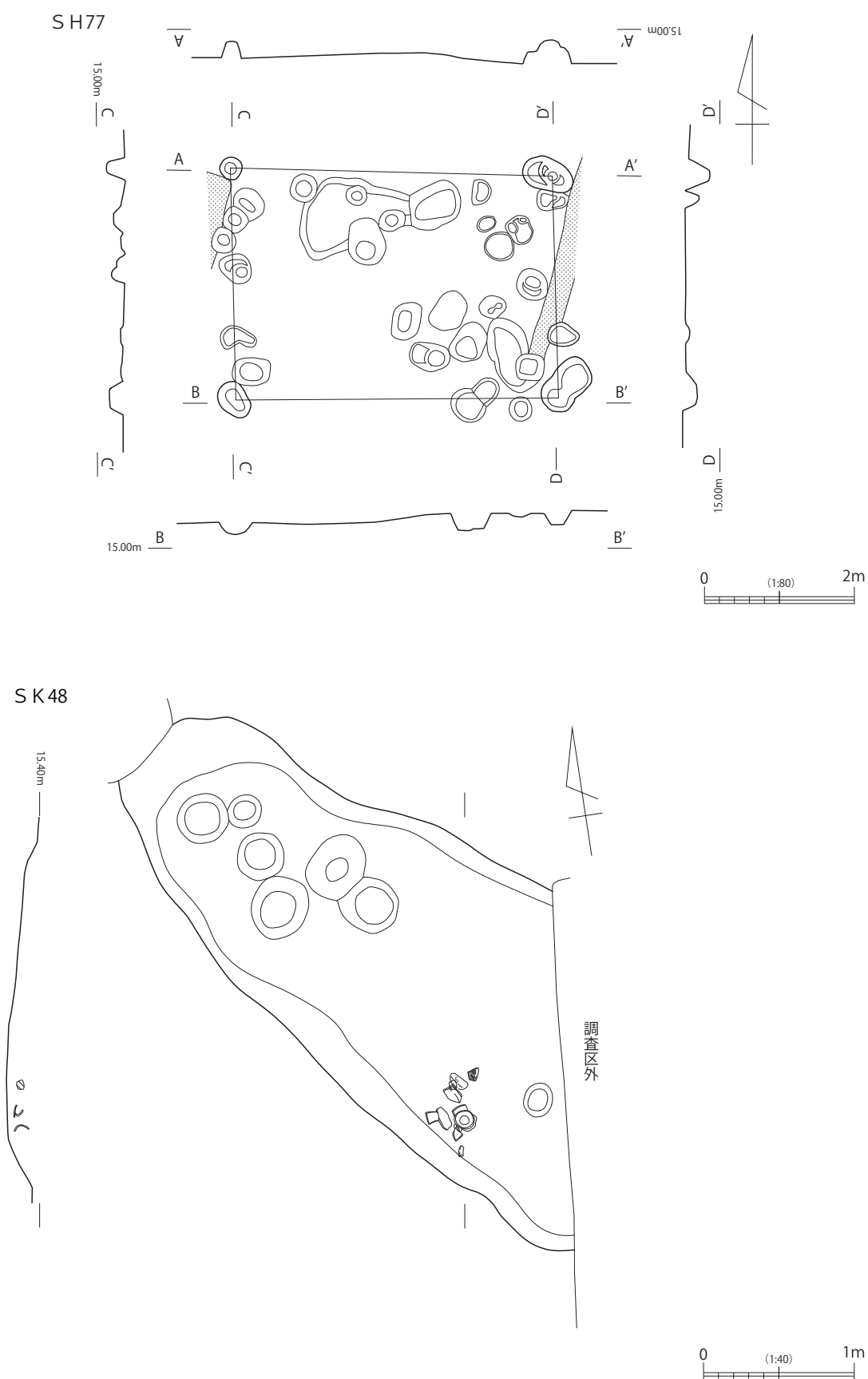


図 117. 第 29 次調査区 SH 77 SK 48

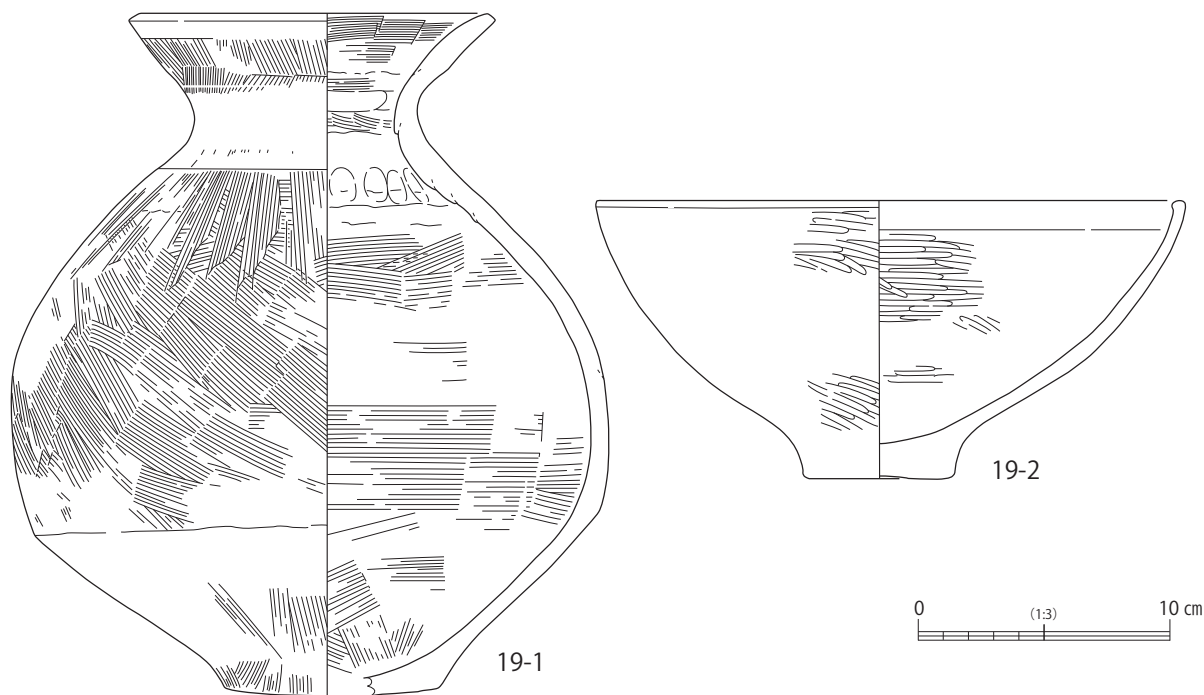


図 118. 第 29 次調査区 遺物実測図

表 3. 遺物対比表 1

報告書 図版番号	調査区	調査区(旧)	図面番号	登録(注記) 番号		取上番号	遺構名	大分類	器種	備 考
5	1	15	5	5-1	TDA5	-	54	54	SP15-062 須恵器 坏身	炭粒内外面ともにあり
6	1	16	6		TDA6	-		SK10 土師器 坏身		
7	1	17	7	7-47	TDA7	-	64	60-1	SZ3 弥生土器 壺	赤採、嶺田
7	2	17	7	7-48	TDA7	-	356	353	弥生土器 壺	嶺田
7	3	17	7	7-2	TDA7	-	65	60-1	SZ3 弥生土器 壺	白岩
7	4	17	7	7-3	TDA7	-	66	62	弥生土器 壺	白岩
7	5	17	7	7-53	TDA7	-	60		弥生土器 壺	嶺田
7	6	17	7	7-37	TDA7	-	341	320	SZ2 西溝 弥生土器 壺	
7	7	17	7	7-13	TDA7	-	203	194	弥生土器 壺	
7	8	17	7	10	TDA7	-	220	200	SZ1 中央 弥生土器 壺	カード無し
7	9	17	7	25	TDA7	-	353	330	SZ2 西溝 弥生土器 壺	
7	10	17	7	7-7	TDA7	-	127	110	SZ1 東溝 弥生土器 壺	
7	11	17	7	6	TDA7	-	127	110	SZ1 東溝 弥生土器 壺	黒斑あり 文様の原体 3 種類程あり
7	12	17	7	2	TDA7	-	127	110	SZ1 東溝 弥生土器 壺	
7	13	17	7	1	TDA7	-	127	110	SZ1 東溝 弥生土器 壺	
7	14	17	7	7-6	TDA7	-	127	110	SZ1 東溝 弥生土器 壺？	
7	15	17	7	3	TDA7	-	127	110	SZ1 東溝 弥生土器 壺	マメツ面積広い
7	16	17	7	5	TDA7	-	127	110	SZ1 東溝 弥生土器 壺	
7	17	17	7	4	TDA7	-	127	110	SZ1 東溝 弥生土器 台付甕	
7	18	17	7	7-4	TDA7	-	127	110	SZ1 東溝 弥生土器 台付甕	
7	19	17	7	7-5	TDA7	-	127	110	SZ1 東溝 弥生土器 台付甕	
7	20	17	7	7-16	TDA7	-	230	210	SZ2 弥生土器 壺	
7	21	17	7	18	TDA7	-	230	210	SZ2 弥生土器 壺	タテ区画 4 方向あり 内面輪積み痕が顕著
7	22	17	7	7-17	TDA7	-	230	210	SZ2 弥生土器 壺	
7	23	17	7	14	TDA7	-	230	210	SZ2 弥生土器 壺	浮文 5 方向か
7	24	17	7	20	TDA7	-	230	210	SZ2 弥生土器 壺	
7	25	17	7	17	TDA7	-	230	210	SZ2 弥生土器 壺	全体的にマメツ
7	26	17	7	11	TDA7	-	230	210	SZ2 弥生土器 壺	外面に黒斑あり
7	27	17	7	16	TDA7	-	230	210	SZ2 弥生土器 壺	底部凹み部分、丁寧なナデか？
7	28	17	7	19	TDA7	-	230	210	SZ2 弥生土器 壺	胴部 1/3 程黒色部分あり ひずみ激しい
7	29	17	7	13	TDA7	-	230	210	SZ2 弥生土器 甕	
7	30	17	7	7-15	TDA7	-	230	231	SZ2 弥生土器 台付甕	
7	31	17	7	15	TDA7	-	230	210	SZ2 弥生土器 甕	
7	32	17	7	12	TDA7	-	230	210	SZ2 弥生土器 台付甕	黒斑あり
7	33	17	7	7-27	TDA7	-	240	220	SK11 弥生土器 高坏	
7	34	17	7	7-26	TDA7	-	240	220	SK11 弥生土器 高坏	
7	35	17	7	7-29	TDA7	-	240	220	SK11 弥生土器 高坏	
7	36	17	7	22	TDA7	-	240	220	SK11 弥生土器 壺	全体マメツ顕著
7	37	17	7	21	TDA7	-	240	220	SK11 弥生土器 壺	ほぼマメツ
7	38	17	7	7-52	TDA7	-	240	220	SK11 弥生土器 壺	

表4. 遺物対比表2

報告書 図版番号	調査区	調査区(旧)	図面番号	登録(注記) 番号	取上番号	遺構名	大分類	器種	備 考
7 39	17	7	7-25	TDA7 - 240	220	SK11	弥生土器	壺	
7 40	17	7	7-31	TDA7 - 240	220	SK11	弥生土器	壺	片口?
7 41	17	7	7-28	TDA7 - 240	220	SK11	弥生土器	台付壺	
7 42	17	7	7-30	TDA7 - 240	220	SK11	弥生土器	鉢	小型
7 43	17	7	24	TDA7 - 240	220	SK11	弥生土器	鉢	
7 44	17	7	7-9	TDA7 - 168	150	SZ1 東溝	弥生土器	高坏	菊川
7 45	17	7	7-1	TDA7 - 32	32		包含層	弥生土器	高坏
7 46	17	7	23	TDA14 - 250-2	250		包含層	弥生土器	高坏
7 47	17	7	7-8	TDA7 - 156	140	SK14	弥生土器	壺	尖部上縁の一部ナデ消しか? 胴部折返しに一部縦ミガキはみ出しあり
7 48	17	7	7-43	TDA7 - 383	383		包含層	弥生土器	壺
7 49	17	7	7-41	TDA7 - 383	383		包含層	土師器	壺
7 50	17	7	7-14	TDA7 - 253	232		包含層	弥生土器	台付壺
7 51	17	7	7	TDA7 - 167	150-1		包含層	弥生土器	壺
7 52	17	7	9	TDA7 - 198	180	SK12	弥生土器	壺	内面口縁部に黒色部分(やや黒斑様)
7 53	17	7	8	TDA7 - 198	180	SK12	弥生土器	壺	
7 54	17	7	7-12	TDA7 - 198	180	SK12	弥生土器	壺	カードに詳細情報あり
7 55	17	7	7-11	TDA7 - 198	180	SK12	弥生土器	台付壺	口縁部に斜格子文、横田
7 56	17	7	7-44	TDA7 - 406	384		包含層	須恵器	坏?
7 57	17	7	7-10	TDA7 - 198	180	SK12	須恵器	平皿?	炭粒付着
7 58	17	7	26	TDA7 - 483		表土掘削	弥生土器	高坏	7C、断面赤褐色
7 59	17	7	7-45	TDA7 - 480			SD12	古代土製品	土鍾
7 60	17	7	7-46	TDA7 - 338	317		包含層	古代土製品	土鍾
7 61	17	7		TDA7 -	220	SK11	弥生土製品	土製品	SH4 北穴
8 1	18	8	8-6	TDA8 - 218	218	SB19	弥生土器	壺	銅鑄型土製品
8 2	18	8	8-15	TDA8 - 260	260	SK15	弥生土器	壺	外面に赤彩まだらに残る
8 3	18	8	29	TDA8 - 260-10	260	SK15	弥生土器	壺	口縁部は折り返しに貼付け不明 ほぼ直角2方向
8 4	18	8	8-16	TDA8 - 260	260	SK15	弥生土器	壺	
8 5	18	8	8-17	TDA8 - 260	260	SK15	弥生土器	壺	口縁部内側赤彩有
8 6	18	8	8-10	TDA8 - 260-1	260-1	SK15	弥生土器	壺	
8 7	18	8	8-11	TDA8 - 260-4	260-4	SK15	弥生土器	壺	
8 8	18	8	8-14	TDA8 - 260-8	260-8	SK15	弥生土器	壺	
8 9	18	8	8-8	TDA8 - 250	250	SP18-243	弥生土器	台付壺	
8 10	18	8	28	TDA8 - 260-3	260	SK15	弥生土器	台付壺	外側少々ムラあり
8 11	18	8	8-9	TDA8 - 260-1	260	SK15	弥生土器	鉢	
8 12	18	8	27	TDA8 - 187	187	SP18-293	土師器	鉢	口縁部水平でない可能性あり
8 13	18	8	8-20	TDA8 - 243	243	SP18-265	土師器	高坏	
8 14	18	8	8-21	TDA8 - 243	243	SP18-265	須恵器	坏身	8-20 と共伴
8 15	18	8	8-5	TDA8 - 212	212	SP18-234	須恵器	高坏	透かしなし
8 16	18	8	8-7	TDA8 - 237	237	SP18-098	須恵器	坏蓋	
8 17	18	8	8-1	TDA8 - 25	25	SP18-0679	須恵器	坏身	
8 18	18	8	8-2	TDA8 - 28	28	SP18-0644	陶器	皿	
8 19	18	8	8-4	TDA8 - 200	200	SK16	?	皿	
8 20	18	8	8-18	TDA8 - 10	10	SA6	陶器	碗	
8 21	18	8	8-19	TDA8 - 43	43	SP18-568	陶器	碗	
8 22	18	8	8-3	TDA8 - 150	150	SD	陶器	碗	
8 23	18	8	8-22	TDA8 -	17	SA59	奈良時代以降	土鍾	長径(残存) 2.8 cm、短径 1.8 cm、孔 0.6 cm
8 24	18	8	8-23	TDA8 -	30	SP18-679	奈良時代以降	土鍾	長径 4.8 cm、短径 1.9 cm、孔 0.6 cm
8 "	18	8	"	TDA8 -	30	SP18-679	奈良時代以降	土鍾	長径 5 cm、短径 1.7 cm、孔 0.7 cm
8 25	18	8	8-24	TDA8 - 5	5	SA8	土師器	碗	
9 1	19	9	71	TDA9 - 100			弥生土器	高坏	
9 2	19	9	72	TDA9 - 100			弥生土器	高坏	
9 3	19	9	9-7	TDA9 - 100-1	100-1	SK17	弥生土器	壺	
9 4	19	9	9-8	TDA9 - 100-1	100-1	SK17	弥生土器	壺	
9 5	19	9	9-260	TDA9 - 260	260	SK18	弥生土器	壺	
9 6	19	9	9-13	TDA9 - 260	260	SK18	弥生土器	壺	欠山式模倣、在地産か
9 7	19	9	9-9	TDA9 - 100-1	100-1	SK17	弥生土器	台付壺	
9 8	19	9	9-12	TDA9 - 260	260	SK18	弥生土器	台付壺	
9 9	19	9	9-14	TDA9 - 260	260	SK18	弥生土器	台付壺	
9 10	19	9	9-15	TDA9 - 279	279	SP19-252	弥生土器	高坏	
9 11	19	9	9-4	TDA9 - ?	?		弥生土器	高坏	
9 12	19	9	9-6	TDA9 - 160	160	SP19-219	弥生土器	壺	
9 13	19	9	9-3	TDA9 - 26	26	SP19-513	弥生土器	壺	
9 14	19	9	9-18	TDA9 - ?	?		弥生土器	壺	
9 15	19	9	9-5	TDA9 - 30	30	SP19-517	弥生土器	壺	
9 16	19	9	9-200	TDA9 - 200	200	SP19-110	弥生土器	ミニチュア土器	
9 17	19	9	9-17	TDA9 - 348	348	SP19-338	弥生土器	小型壺	
9 18	19	9	9-19	TDA9 - 348	348	SP19-338	弥生土器	台付壺	
9 19	19	9	9-20	TDA9 - 348	348	SP19-338	弥生土器	台付壺	
9 20	19	9	9-11	TDA9 - 214	214	SP9-125	弥生土器	台付壺	
9 21	19	9	9-10	TDA9 - 214	214	SP19-125	土師器	壺	S 字壺(在地系)
9 22	19	9	9-16	TDA9 - 298	298	SP19-256	土師器	高坏	古墳前期
9 23	19	9	9-1	TDA9 - 1	1		包含層	土師器	碗
9 24	19	9	9-2	TDA9 - 1	1		包含層	土師器	甗 把手
9 25	19	9	9-24	TDA9 - 222	222	SP19-279	須恵器	坏蓋	7C
9 26	19	9	9-23	TDA9 - 93	93	SP19-504	須恵器	坏身	7C
10 1	20	10	10-24	TDA10 - 195	195	SK24	弥生土器	高坏	
10 2	20	10	10-8	TDA10 - 223-1	223	SK23	弥生土器	壺	
10 3	20	10	10-16	TDA10 - 386	南 076	SX	弥生土器	壺	
10 4	20	10	35	TDA10 - 200	200	SD28	弥生土器	壺	浮文の配置箇所は残存部の間隔から推測

表 5. 遺物対比表 4

報告書 図版番号	調査区	調査区(旧)	図面番号	登録(注記) 番号	取上番号	遺構名	大分類	器種	備 考
10 5	20	10	10-4	TDA10 - 200-1	200	SD28	弥生土器	壺	
10 6	20	10	36	TDA10 - 223-1	223	SK23	弥生土器	壺	
10 7	20	10	10-22	TDA10 - 187-1	187	SD28	弥生土器	壺	
10 8	20	10	10-20	TDA10 - 187	187	SD28	弥生土器	壺	
10 9	20	10	39	TDA10 - 410	南 100	SK26	弥生土器	壺	各部位の計測値を元に図化
10 10	20	10	10-21	TDA10 - 187-3	187	SD28	弥生土器	台付壺	
10 11	20	10	10-7	TDA10 - 223-1	223	SK28	弥生土器	台付壺	
10 12	20	10	10-23	TDA10 - 120	120	SD27	弥生?	台付壺	
10 13	20	10	30	TDA10 - 118-4	118	SK21	弥生土器	台付壺	
10 14	20	10	10-3	TDA10 - 188	188	SP20-190	弥生土器	高坏	
10 15	20	10	10-14	TDA10 - 312	南 12	SP20-413	弥生土器	高坏	
10 16	20	10	10-9	TDA10 - 310	310	包含層	弥生土器	壺	
10 17	20	10	10-5	TDA10 - 201	201	SP20-150	弥生土器	壺	
10 18	20	10	32	TDA10 - 185-3	185	SP20-280	弥生土器	壺	
10 19	20	10	33	TDA10 - 185-4	185	SP20-280	弥生土器	壺	体部表面ミガキか?
10 20	20	10	34	TDA10 - 185-1	185	SP20-280	弥生土器	壺	頭部の線刻に見える 線刻にしては位置が変
10 21	20	10	10-2	TDA10 - 185-3	185	SP20-280	弥生土器	壺	
10 22	20	10	10-13	TDA10 - 310	310	包含層	弥生土器	小型壺	
10 23	20	10	10-6	TDA10 - 185-3	185	SP20-280	弥生土器	台付壺	歪みを補正して図化
10 24	20	10	31	TDA10 - 185-4	185	SP20-280	弥生土器	鉢	体部表面ミガキか?
10 25	20	10	10-1	TDA10 - 185-3	185	SP20-280	弥生土器	鉢	
10 26	20	10	37	TDA10 - 241-1	241	SK27	土師器	壺	
10 27	20	10	10-15	TDA10 - 381	南 071	SX	須恵器	坏身	
10 28	20	10	10-19	TDA10 - 163	163	SP20-335	土師器	坏身	
10 29	20	10	38	TDA10 - 310	平面精査	包含層	土師器	壺(甕?)	頭部計測と胴部最大径と形状より図化
10 30	20	10	10-17	TDA10 - 135	135	SP20-253	土師器	かわらけ	
10 31	20	10	10-18	TDA10 - 135	135	SP20-253	土師器	かわらけ	
11 1	21	11	11-1	TDA11 - 103	103	包含層	陶器	坏身	
11 2	21	11	11-2	TDA11 - 193	193	SP21-210	土師器	碗	
11 3	21	11	11-3	TDA11 - 151	151	包含層	陶器	小皿	
11 4	21	11	11-4	TDA11 - 170	170	包含層	須恵器	坏身	
11 5	21	11	11-5	TDA11 - 170	170	包含層	陶器	坏身	
11 6	21	11	11-6	TDA11 - 176	176	包含層	土師器	かわらけ	カード：セクションベルト 土器 B
12 1	22	12	12-1	TDA12 - 1	1	SK	弥生土器	高坏	
12 2	22	12	1	TDA12 - 104	104	SK29	弥生土器	壺	
12 3	22	12	12-4	TDA12 - 104	104	SK29	弥生土器	壺	
12 4	22	12	12-123	TDA12 - 123	123	SP22-245	弥生土器	壺	
12 5	22	12	40	TDA12 - 204	210	包含層	弥生土器	壺	
12 6	22	12	12-66	TDA12 - 66	66	SX	弥生土器	壺	
12 7	22	12	12-34	TDA12 - 34	34	SX	土師器	台付鉢	
13 1	23	13	1	TDA13 - 16	16	SK30	弥生土器	高坏	坏部の内側はミガキの単位が不明瞭な程ツルツルに磨かれている 表面は真黒 焦げによるものかウチグロのようなものか不明
13 2	23	13	6	TDA13 - 16		SK30	弥生土器	壺	
13 3	23	13	4	TDA13 - 16		SK30	弥生土器	小型壺	
13 4	23	13	5	TDA13 - 16		SK30	弥生土器	壺	
13 5	23	13	2	TDA13 - 16-一括	16	SK30	弥生土器	壺	口唇部の突起は具によるものにも見えるが、現状では櫛と判断した
13 6	23	13	41	TDA13 - 16	16	SK30	弥生土器	壺	
13 7	23	13	42	TDA13 - 16	16	SK30	弥生土器	壺	体部外面被熱ハクリか
13 8	23	13	45	TDA13 - 254-1	土器集中 F	SK334	弥生土器	壺	黒斑あり
13 9	23	13	46	TDA13 - 254	土器集中 F	SK33	弥生土器	壺	
13 10	23	13	43	TDA13 - 187	187	包含層	弥生土器	壺	黒斑あり
13 11	23	13	13-5	TDA13 - 261	261	SD	弥生土器	壺	
13 12	23	13	13-9	TDA13 - 238-1	238	SB28	弥生土器	鉢	
13 13	23	13	7	TDA13 - 219		SB28	弥生土器	壺	
13 14	23	13	8	TDA13 - 219		SB28	弥生土器	壺	
13 15	23	13	13-6	TDA13 - 201	201	包含層	弥生土器	壺	
13 16	23	13	3	TDA13 - 2		SK30	弥生土器	壺	
13 17	23	13	2	TDA13 - 2		SK30	弥生土器	壺	
13 18	23	13	5	TDA13 - 2	2	SK30	弥生土器	壺	(注釈) 剥突は漆の痕を彫目の残りに伴って施されたか 各段、向きが逆になる
13 19	23	13	44	TDA13 - 249	249	SB28	弥生土器	壺	
13 20	23	13	13-249	TDA13 - 249	249	SB28	弥生土器	鉢	底部穿孔
13 21	23	13	13-249	TDA13 - 249	249	SB28	弥生土器	壺	
13 22	23	13	13-249	TDA13 - 249	249	SB28	土師器	壺	刻み目のような施文あり
13 23	23	13	13-206	TDA13 - 206	206	包含層	土師器	小型壺	5C ごろか
13 24	23	13	13-6	TDA13 - 6	6	SB27	須恵器	坏蓋	
13 25	23	13	13-47	TDA13 - 47	47	SB27	須恵器	坏蓋	
14 1	24	14	26	TDA14 - 250-1		SB29	弥生土器	高坏	
14 2	24	14	4	TDA14 - 250	250-1	SB29	弥生土器	高坏	脚内色調 10YR 8/3 浅黄橙 二之宮古相か
14 3	24	14	27	TDA14 - 250-1		SB29	弥生土器	壺	
14 4	24	14	25	TDA14 - 250		SB29	弥生土器	壺	
14 5	24	14	7	TDA14 - 250	250-1	SB29	弥生土器	壺	胴部の縄文が濃れ気味 ナデ消しか
14 6	24	14	3	TDA14 - 250	250-2	SB29	弥生土器	台付壺	
14 7	24	14	20	TDA14 - 251	251	SB29	弥生土器	小型壺	
14 8	24	14	22	TDA14 - 279		SP24-001	弥生土器	小型壺	
14 9	24	14	14-251	TDA14 - 251	251	SB29	弥生土器	壺	
14 10	24	14	24	TDA14 - 210		SB29 ビット	弥生土器	壺	
14 11	24	14	47	TDA14 - 250-2	250	SB291	弥生土器	壺	色調 外側一部：2.5Y 7/1 灰白
14 12	24	14	48	TDA14 - 250-2		SB29	弥生土器	壺	
14 13	24	14	21	TDA14 - 190-2		SK37	弥生土器	高坏	

表6. 遺物対比表3

報告書 図版番号	調査区	調査区(旧)	図面番号	登録(注記) 番号			取上番号	遺構名	大分類	器種	備 考
14 14	24	14	69	TDA14	-	190		SK37	弥生土器	小型壺	
14 15	24	14	19	TDA14	-	190-2		SK37	弥生土器	壺	
14 16	24	14	18	TDA14	-	190-1		SK37	弥生土器	壺	
14 17	24	14	9	TDA14	-	190	190-1	SK37	弥生土器	壺	黒斑あり
14 18	24	14	17	TDA14	-	190-1		SK37	弥生土器	壺	
14 19	24	14	23	TDA14	-	190-2		SK37	弥生土器	台付甕	
14 20	24	14	8	TDA14	-	190	190-1	SK37	弥生土器	台付甕	黒斑あり 外面スス汚れあり
14 21	24	14	68	TDA14	-	190		SK37	弥生土器	鉢	
14 22	24	14	70	TDA14	-	190		SK37	弥生土器	鉢	
14 23	24	14	14-190-2	TDA14	-	190-2	190-2	SK37	弥生土器	鉢	
14 24	24	14	67	TDA14	-	190		SK37	弥生土器	台付鉢	
14 25	24	14	14-1	TDA14	-	141	141	SB37	弥生土器	鉢	底部穿孔あり
14 26	24	14	9	TDA14	-	80		SK38	弥生土器	高坏	
14 27	24	14	10	TDA14	-	80		SK38	弥生土器	高坏	
14 28	24	14	16	TDA14	-	80		SK38	弥生土器	壺	
14 29	24	14	12	TDA14	-	80		SK38	弥生土器	壺	
14 30	24	14	15	TDA14	-	80		SK38	弥生土器	壺	
14 31	24	14	14	TDA14	-	80-2		SK38	弥生土器	小型壺	
14 32	24	14	11	TDA14	-	80		SK38	弥生土器	小型壺	
14 33	24	14	13	TDA14	-	80-2		SK38	弥生土器	甕	
15 1	25	15	30	TDA15	-	215		SB33	弥生土器	壺	
15 2	25	15	6	TDA15	-	186	186(その1)	包含層	弥生土器	台付甕	黒斑あり
15 3	25	15	29	TDA15	-	57		包含層	弥生土器	台付鉢	
15 4	25	15	28	TDA15	-	84		包含層	土師器	甗	
16 1	26	16	33	TDA16	-	153		包含層	弥生土器	高坏	
16 2	26	16	31	TDA16	-	100		包含層	弥生～土師?	小型壺	
16 3	26	16	32	TDA16	-	152		SP26-210	土師器	壺	
17 1	27	17	10	TDA17	-	192	192-6	包含層	弥生土器	壺	黒斑あり
17 2	27	17	11	TDA17	-	169	169-2	包含層	弥生土器	深鉢	口唇部の棒状圧痕は布目ありか 外面焼きムラあり 白岩初期～磯田
17 3	27	17	40	TDA17	-	206		SP27-001	弥生土器	壺	
17 4	27	17	38	TDA17	-	206		SP27-001	弥生土器	小型壺	
17 5	27	17	37	TDA17	-	194-3		SP27-003	弥生土器	小型壺	
17 6	27	17	36	TDA17	-	164-3		包含層	弥生土器	小型壺	
17 7	27	17	39	TDA17	-	273		SK34	弥生土器	台付甕	
17 8	27	17	34・35	TDA17	-	2		SP27-002	土師器	高坏	
18 1	28	18	41	TDA18	-	177		SD32	弥生土器	小型壺	
18 2	28	18	42	TDA18	-	198		SK44	弥生土器	小型壺	
18 3	28	18	47	TDA18	-	210		SK46	弥生土器	小型壺	
18 4	28	18	48	TDA18	-			SX16	弥生土器	小型壺	
18 5	28	18	46	TDA18	-	210		SK46	弥生土器	壺	
18 6	28	18	43	TDA18	-	198		SK44	弥生土器	壺	
18 7	28	18	45	TDA18	-	198-2		SK44	弥生土器	壺	
18 8	28	18	44	TDA18	-	198		SK44	弥生土器	壺	
19 1	29	19	49	TDA19	-	121		SK48	土師器	壺	
19 2	29	19	50	TDA19	-	121		SK48	弥生土器	壺	

5 章 まとめにかえて

平成 30 年度及び令和元年度の発掘調査では、弥生時代から近世にかけての集落跡を確認した。これまで主に大門遺跡の東側で行われていた調査においても、同じ時期の遺構や遺物が確認されており、大門遺跡全域で長期にわたって遺構を確認することができると推測できる。本報告調査地では、中でも弥生時代中期から後期にかけてのものが多く、古代・近世の遺物を伴う遺構はわずかであった。なお、丘陵上にある大門遺跡では自然堆積が薄く、ほぼ同一の面に複数の時期の遺構が重なるようにあり、出土遺物を中心に時期を判定しているが、古い時代のものを含んでいる可能性がある。

弥生時代の遺構と土器

弥生時代の遺構として、竪穴住居、掘立柱建物、方形周溝墓、土坑、溝などを検出した。数多くの竪穴住居や掘立柱建物は調査区が遺跡の西端から南端にかけての場所に位置することから、弥生時代の居住区が南西向き斜面に面して広がっていたことを説明しており、集落に伴う墓域も集落に近接している。

出土遺物には嶺田式や白岩式の壺類などもみられるが、菊川式のものの出土量が突出している。太田川流域の鶴松遺跡などと同様に弥生時代中期中葉に興り、弥生時代後期にかけて継続的に集落を拡大していったと推測でき、特筆すべきは、第 17 次調査区では銅鐸型土製品の出土があったことである。掛之上遺跡で銅鐸破片の出土とともに、銅鐸文化圏縁辺地域の掛之上、大門遺跡の集落内祭祀の一端を今に伝えていていると考えられる。

現在、銅鐸形土製品は全国で 200 例以上の出土が確認されており、集成や考察が進んでいる。県内では大門遺跡を含めて 4 例が確認されている。大門遺跡以外の 3 例は、いずれも現在の浜松市内の角江遺跡（『角江遺跡Ⅱ 遺物編 1 土器・土製品』静岡県埋蔵文化財調査研究所 1996）、森西遺跡（『森西遺跡』財団法人浜松市文化振興財団 2005）、梶子遺跡（『梶子遺跡 15 次』浜松市教育委員会 2014）からの出土で、いずれも完形品ではない。これらの銅鐸形土製品の形状は本来の銅鐸を模倣したような形状で、角江遺跡出の銅鐸形土製品は小銅鐸に近似したものである。小銅鐸は市内、愛野向山Ⅱ遺跡でも出土があり、それを含めて県内では、伊場遺跡（浜松市）、有東遺跡（静岡市）、関峯遺跡（沼津市）、陣ヶ沢遺跡（富士市）、青木原遺跡（三島市）等の 8 か所で確認されている。また、小銅鐸は近畿式や三遠式銅鐸の破片とともに、銅鐸が出土している三ヶ日～都田～敷地の丘陵谷部の付近での出土は確認されておらず、これまで、銅鐸の分布域以東でも確認されている。市内では、小銅鐸の出土した愛野向山Ⅱ遺跡、銅鐸の破片が出土した掛之上遺跡、そして、本報告記載の銅鐸形銅製品が出土した大門遺跡の 3 遺跡で、いずれも原野谷川・逆川左岸に位置する遺跡である。銅鐸文化圏の東限に接する地域からの出土ととらえることができる。しかし、1772 年（明和 9 年）に現在の掛川市長谷から三遠式と見られる銅鐸が発見された記録（正願寺旧蔵・所在不明）があることから、天竜川流域以東の状況判断が難しくなっている。

大門遺跡の銅鐸形土製品の出土状況は、土坑から多数の土器とともに出土しており、他地域の銅鐸形土製品の出土状況と大きな差は無い。共伴する土器は壺・台付甕・高坏で、残存率 50% 以下の破片ばかりで、時期は弥生時代後期前半であり、銅鐸形土製品が他所からの搬入品ではないと見られ、短時間に土器が廃棄され埋没したと見られる状況で、積極的な土器の供献された状況ではないと考えられる。木棺墓付近から出土したため、愛野向山Ⅱ遺跡の小銅鐸とは状況が違い、集落と墓地では使用方法も異なっていたと見られるため、当地域では小銅鐸と銅鐸形土製品では使用する場や方法（祭祀）が違うものであったことを説明していると考えられる。また、大門遺跡の銅鐸形土製品の形状は大阪府和泉市の池上曾根遺跡（『池上遺跡—池上小学校建設に伴う発掘調査概要—』仮称池上小学校予定地内遺跡調査会 1980）や和歌山県橋本市の血縄遺跡（『血縄遺跡発掘調査概報』橋本市教育委員会 1986）、和歌山県の西飯降Ⅱ遺跡（『中飯降

遺跡・西飯降Ⅱ遺跡・加陀寺前経塚・大谷遺跡・重行遺跡—一般国道24号京奈和自動車道（紀北東道路）改築工事に伴う第2～第7次発掘調査報告書—』財団法人和歌山県文化財センター2012）、愛知県清須市の朝日遺跡（『朝日遺跡Ⅵ（新資料館地点の発掘調査）』愛知県埋蔵文化財センター報告書 第83集）、大阪府東大阪市の鬼怒川遺跡（『鬼虎川の金属関係遺物—第7次発掘調査報告2—』財団法人東大阪市文化財協会 1982）出土のものに形状は近似するが、大門遺跡出土の銅鐸形土製品はデフォルメ度合いが強い。紐・鰭・舞・片持孔等の銅鐸の要素をおさえてはいるが、銅鐸の形状や文様構成を正確な形を理解できずに造られたものと見られる。型持ちをイメージした穴があることなど、特定の情報だけが製作者に伝わった結果と見られる。県内他地域出土の銅鐸形土製品と比べると、縦横比が少なく、幅広な印象を受ける。釣り鐘型で、内部空洞は型持孔までは届かず、身の半分程度となっている。この空洞の大きさでは舌は当初から想定されていないと考えられる。左右の鰭は胴体から粘土を指でつまみ出し造られ、紐は舞に平たい粘土を貼り付けたもので、形状はアーチ状ではない。舞との接合部には接合時の指圧痕が残る。紐の上半部に中心線からややずれて紐孔が開けられている。その舞には紐の前後に舞の片持ち孔も開けられているが、内部の空洞まで貫通していない。鐸身には両面から2か所ずつで、全体的なバランスに対してやや大型の型持孔が開けられている。文様は無いが、焼成時に燃料と接触したため黒色に変色した箇所が鐸身下縁に見られる。デフォルメの度合いが大きいのか精巧さに欠けていて、彩色もされておらず、音を鳴らす機能も無い。この状況から、この銅鐸形土製品の製作者には本来の銅鐸を忠実にまねるという意識が欠けているのか、忠実に本来の銅鐸をまねるのが禁じられていたのかは明らかではないが、デフォルメの度合いから見て、製作者は本来の銅鐸を実見したことが無いのかもしれないと考えられる。

古墳時代以降の遺構と土器

今回報告分の調査区は基本的に弥生時代の集落遺跡であるが、古墳時代以降の掘立柱建物が散見される。企画性をもって建ち並ぶということではない。古墳時代以降の遺構は大門遺跡の北よりで、掛之上遺跡に近接した側に集中すると考えられ、その範囲に若干の違いがあると考えられる。しかし、ピット等から古墳時代前期・後期の土師器及び須恵器片が出土しているため、大門遺跡の西端から南端にかけの地域が全くの無利用ではなかったと考えられるが、袋井市南コミュニティセンター敷地内での遺構の状況や大門大塚古墳等の立地を考えると、斜面は積極的に利用するのではなく、掛之上遺跡に近い北東側に中心域を移していると考えられる。また、掛之上遺跡との関連が期待された奈良時代の遺構は明確なものは今回も確認できなかった。奈良時代の遺物は包含層土中より出土したものが多数である。

区画整理事業に伴う発掘調査は令和4年度以降も引き続き行われているため、第30次調査区以降の報告とともに調査の総括は次回以降とさせていただきたい。

最後に、袋井市駅南都市拠点都市区画整理組合をはじめとして、袋井市都市建設部都市整備課区画整理係の担当者、（都）田端宝野線整備業の事前調査を行っている静岡県埋蔵文化財センターの関係者、田端自治会の関係者ならびに地域住民の方々、袋井市南コミュニティセンター関係者の皆様は調査に対して理解を示して下さい、様々なかたちでご協力いただきました。調査期間中にお世話になった皆様にあらためて感謝の意を申し上げ、更なるご協力とご指導をお願いして結びとしたい。

《引用参考文献》

- 静岡県 1990 『静岡県史』資料編 古代 1
- 静岡県 1990 『静岡県史』資料編 1 考古一
- 静岡県 1990 『静岡県史』資料編 2 考古二
- 静岡県 1992 『静岡県史』資料編 3 考古三
- 静岡県 1994 『静岡県史』通史編 1 原始・古代
- 袋井市 1983 『袋井市史』通史編
- 浅羽町 1997 『浅羽町史』資料編一 考古・古代・中世
- 袋井市教育委員会 1983 『大門遺跡 大門Ⅰ遺跡第2次発掘調査報告書』
- 袋井市教育委員会 1987 『大門大塚古墳 昭和61年基礎資料収集調査報告書』
- 袋井市教育委員会 1988 『大門遺跡 袋井市大門遺跡第4次発掘調査報告書』
- 袋井市教育委員会 1990 『大門遺跡Ⅴ 大門Ⅰ遺跡第5次発掘調査報告書』
- 袋井市教育委員会 1992 『団子塚遺跡—遺構編—』
- 袋井市教育委員会 1992 『土橋遺跡Ⅴ』太平住宅株式会社建売住宅用地造成事業に伴う緊急発掘調査報告書 ほか
- 袋井市教育委員会 1995 『坂尻遺跡—遺物・総括編—』
- 袋井市教育委員会 1997 『鶴松遺跡Ⅸ』(主) 浜北袋井線単交通安全施設 1種工事に伴う発掘調査報告書 ほか
- 袋井市教育委員会 2004 『愛野向山Ⅱ遺跡』愛野向山Ⅱ遺跡・愛野向山B古墳群発掘調査報告書
- 袋井市教育委員会 2008 『袋井市内遺跡発掘調査報告書Ⅳ』
- 袋井市教育委員会 2015 『掛之上遺跡』袋井駅前第二土地区画整理事業に伴う第95次～106次発掘調査報告書ほか
- 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所 1996 『角江遺跡Ⅱ 遺物編1(土器・土製品)』静岡県埋蔵文化財調査研究所報告 69
- 浜松市教育委員会 2004 『森西遺跡』
- 浜松市教育委員会 2014 『梶子遺跡 15次』
- 愛知県埋蔵文化財センター 2000 『朝日遺跡Ⅵ(新資料館地点の発掘調査)』愛知県埋蔵文化財センター報告書 第83集
- 名古屋市教育委員会 1966 『昭和39・40年度見晴台遺跡Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ次発掘調査概報』
- 橋本市教育委員会 1986 『血縄遺跡発掘調査概報』
- 財団法人和歌山県文化財センター 2012 『中飯降遺跡・西飯降Ⅱ遺跡・加陀寺前経塚・大谷遺跡・重行遺跡—一般国道24号京奈和自動車道(紀北東道路)改築工事に伴う第2～第7次発掘調査報告書—』
- 財団法人東大阪市文化財協会 1982 『鬼虎川の金属関係遺物—第7次発掘調査報告2—』
- 仮称池上小学校予定地内遺跡調査会 1980 『池上遺跡—池上小学校建設に伴う発掘調査概要—』
- 野本孝明 1986 「銅鐸形土製品考」『東京考古』第2号
- 神尾恵一 1984 「銅鐸形土製品試行(上)(中)(下)」『古代文化』36-5・10・11
- 神尾恵一 2012 「銅鐸形土製品祭祀の研究」『古代文化談叢』67
- 木村有作 1994 「伊勢湾周辺における銅鐸形土製品について」『考古学と信仰』同志社大学考古学シリーズⅣ
- 伊賀高弘・筒井崇史 2003 『木津城山遺跡』京都府遺跡調査報告書32冊 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 大野勝美 2004 「銅鐸形土製品考—銅鐸祭祀の東限を考える—」『財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所設立20周年記念論集』財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 黒沢 浩 2013 「西志賀遺跡の銅鐸形土製品」『南山大学人類学博物館紀要』第31号
- 黒沢 浩 2016 「銅鐸模倣品の状況—銅鐸形土製品を中心に—」『青銅器の模倣Ⅱ』第65回埋蔵文化財研究会
- 山寄貴之 2014 「九州・近畿地方の銅鐸形土製品—銅鐸と銅鐸形土製品の分布と傾向—」『青銅器の模倣Ⅰ』第63回埋蔵文化財研究会
- 吉田 広 2014 「青銅器模倣研究の可能性」『青銅器の模倣Ⅰ』第63回埋蔵文化財研究会
- 肥後弘幸 2024 『銅鐸型土製品集成』近畿弥生の会HP (<http://kinkiyayoi.starfree.jp/data/dataindex.html>)
- 北嶋未貴 2021 「大門遺跡出土の銅鐸形土製品について」『地域と考古学2』向坂鋼二先生米寿記念論集

写真図版



1. 第15次調査区 全景



2. 第15次調査区 SB16 北東から

図版 2



1. 第15次調査区 SB17 北東から



2. 第15次調査区 SH30 南から



1. 第 15 次調査区
SH31



2. 第 15 次調査区
SP15-062



3. 第 15 次調査区
遠景 南から

図版 4

1. 第 16 次調査区
SH32 東から



2. 第 16 次調査区
SK 9 北から



3. 第 16 次調査区
SK10 南から





1. 第16次調査区
全景



2. 第16次調査区
全景 北から



3. 第16次調査区
全景 東から



1. 第17次調査区 全景



2. 第17次調査区 SZ1 南東から



1. 第17次調査区
SZ1 東溝



2. 第17次調査区
SZ1 南溝



3. 第17次調査区
SZ1 東溝



1. 第17次調査区 SZ2 北東から



2. 第17次調査区 SZ3 西から



1. 第17次調査区
SZ1 東溝



2. 第17次調査区
SZ2 北溝



3. 第17次調査区
SZ2 西溝 東から

1. 第17次調査区
SK11 東から



2. 第17次調査区
SK12 北から



3. 第17次調査区
SK14 北東から





1. 第17次調査区
SK13 西から

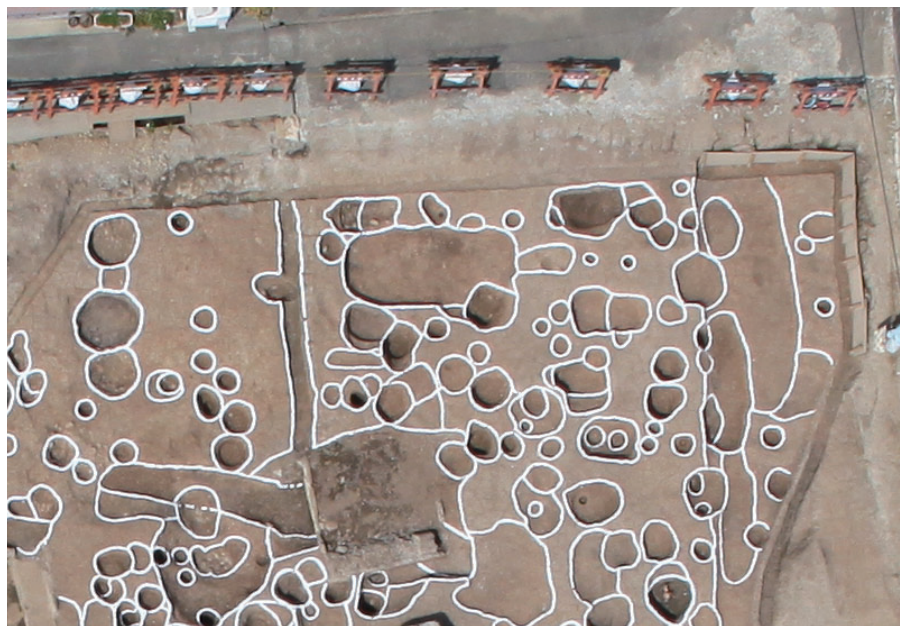


2. 第17次調査区
SH34 南西から



3. 第17次調査区
SH35 北東から

1. 第17次調査区
SH36



2. 第17次調査区
SH37 北東から



3. 第17次調査区
遺物出土状況 1





1. 第17次調査区
遺物出土状況2



2. 第17次調査区
SP17-001 遺物出土状況



3. 第17次調査区
調査風景

図版 14

1. 第18次調査区
全景



2. 第18次調査区
SB19 北東から



3. 第18次調査区
SP18-265





1. 第18次調査区
SH38 東から



2. 第18次調査区
SK15 北から



3. 第18次調査区
SK15 遺物出土状況

1. 第18次調査区
SP18-293



2. 第18次調査区
SH40・41 北東から



3. 第18次調査区
SH42 西から





1. 第18次調査区
SK16 北から



2. 第18次調査区
SA1～5 西から



3. 第18次調査区
遠景 北東から

1. 第19次調査区
全景



2. 第19次調査区
北側 全景



3. 第19次調査区
SH43 北から





1. 第19次調査区
SH44 北東から



2. 第19次調査区
SH45



3. 第19次調査区
SH46

1. 第 19 次調査区
SK17 東から



2. 第 19 次調査区
SK18 西から



3. 第 19 次調査区
SK19 南西から





1. 第 19 次調査区
SP19-110 北東から



2. 第 19 次調査区
SP19-330 東から



3. 第 19 次調査区
SD24 北から

1. 第19次調査区
SH47 北西から



2. 第19次調査区
SD 北から



3. 第19次調査区
SD 北東から





1. 第20次調査区
全景



2. 第20次調査区
SB20 北から



3. 第20次調査区
SK21・SK51 南東から

図版 24

1. 第20次調査区
SH50 東から



2. 第20次調査区
SD27 南西から



3. 第20次調査区
SD28 南西から





1. 第20次調査区
SD28 南西から



2. 第20次調査区
SK21 南西から



3. 第20次調査区
SK22 東から

1. 第 20 次調査区
SK23 北西から



2. 第 20 次調査区
SK24 北西から



3. 第 20 次調査区
SK26 南東から





1. 第20次調査区
SP20-190 東から



2. 第21次調査区
遠景 南西から



3. 第21次調査区
SH52 北から

1. 第 21 次調査区
SP21-220



2. 第 21 次調査区
SA 南西から



3. 第 21 次調査区
SK28 南西から





1. 第21次調査区
SD遺物出土状況



2. 第22次調査区
全景



3. 第22次調査区
全景 南から

1. 第 22 次調査区
SX 遺物出土状況



2. 第 22 次調査区
SP22-245



3. 第 22 次調査区
SD29 遺物出土状況





1. 第22次調査区
SK28 北から



2. 第22次調査区
SB23 北から



3. 第22次調査区
SB22 北から

1. 第22次調査区
SB22・23 SD30



2. 第22次調査区
SB24 南から



3. 第22次調査区
SB26 南東から





1. 第23次調査区
全景



2. 第23次調査区
SK34・35 南西から



3. 第23次調査区
SK35 遺物出土状況

図版 34

1. 第 23 次 調 査 区
SK30 西から



2. 第 23 次 調 査 区
S K 31



3. 第 23 次 調 査 区
S K 33





1. 第23次調査区
SB27 北から



2. 第23次調査区
SB28 南から



3. 第24次調査区
全景

1. 第 24 次調査区
SB29 南から



2. 第 24 次調査区
SB30 北から



3. 第 24 次調査区
SB31・SK38 南西から





1. 第24次調査区
SB32 東から



2. 第24次調査区
SK36 南から



3. 第24次調査区
SK37 南から

1. 第 24 次 調 査 区
SK38 南東から



2. 第 25 次 調 査 区
全景



3. 第 25 次 調 査 区
SK39





1. 第25次調査区
SP25-090



2. 第26次調査区
全景



3. 第26次調査区
南側全景

1. 第26次調査区
北側 全景



2. 第26次調査区
SP26-001



3. 第26次調査区
SP26-290





1. 第26次調査区
SP遺物出土状況



2. 第26次調査区
SP26-210



3. 第27次調査区
全景

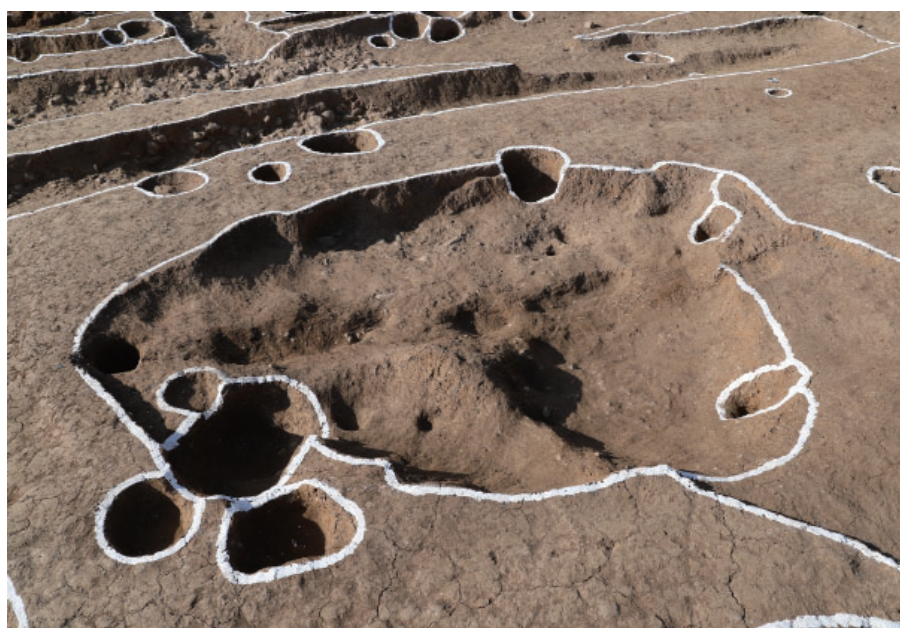
1. 第 27 次調査区
SB34 南から



2. 第 27 次調査区
SK43 南から



3. 第 27 次調査区
SK40 南東から





1. 第 26 次調査区
SZ4・SH69 南東から



2. 第 26 次調査区
SH68・SP27-002 南西から



3. 第 27 次調査区
SK42 SH70 北西から

1. 第28次調査区
全景



2. 第28次調査区
SH71・72 東から



3. 第28次調査区
SH75 南東から





1. 第28次調査区
SK44 北から



2. 第28次調査区
SK45 東から



3. 第28次調査区
SK46 南西から

1. 第28次調査区
SZ5 東から



2. 第28次調査区
SD32 北側 南東から



3. 第28次調査区
SD32 遺物出土状況





1. 第28次調査区
SD32 遺物出土状況



2. 第29次調査区
全景



3. 第29次調査区
南側

1. 第 29 次調査区
SK49 東から



2. 第 29 次調査区
SK49 北から



3. 第 29 次調査区
SK48 東から





1. 第 17 次調査区出土遺物 7-1



2. 第 17 次調査区出土遺物 7-2



3. 第 17 次調査区出土遺物 7-3



4. 第 17 次調査区出土遺物 7-4



5. 第 17 次調査区出土遺物 7-8



6. 第 17 次調査区出土遺物 7-9



7. 第 17 次調査区出土遺物 7-10



8. 第 17 次調査区出土遺物 7-11



1. 第 17 次調査区出土遺物 7-12



2. 第 17 次調査区出土遺物 7-13



3. 第 17 次調査区出土遺物 7-15



4. 第 17 次調査区出土遺物 7-16



5. 第 17 次調査区出土遺物 7-17



6. 第 17 次調査区出土遺物 7-18



7. 第 17 次調査区出土遺物 7-19



8. 第 17 次調査区出土遺物 7-21



1. 第 17 次調査区出土遺物 7-23



2. 第 17 次調査区出土遺物 7-24



3. 第 17 次調査区出土遺物 7-25



4. 第 17 次調査区出土遺物 7-26



5. 第 17 次調査区出土遺物 7-27



6. 第 17 次調査区出土遺物 7-28



7. 第 17 次調査区出土遺物 7-29



8. 第 17 次調査区出土遺物 7-30



1. 第 17 次調査区出土遺物 7-31



2. 第 17 次調査区出土遺物 7-32



3. 第 17 次調査区出土遺物 7-34



4. 第 17 次調査区出土遺物 7-36



5. 第 17 次調査区出土遺物 7-37



6. 第 17 次調査区出土遺物 7-38



7. 第 17 次調査区出土遺物 7-40



8. 第 17 次調査区出土遺物 7-42



1. 第 17 次調査区出土遺物 7-43



2. 第 17 次調査区出土遺物 7-45



3. 第 17 次調査区出土遺物 7-46



4. 第 17 次調査区出土遺物 7-47



5. 第 17 次調査区出土遺物 7-49



6. 第 17 次調査区出土遺物 7-51



7. 第 17 次調査区出土遺物 7-52



8. 第 17 次調査区出土遺物 7-53